
榊原研究室

蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

榊原研究室

【Nコード】

N0963Y

【作者名】

蘭

【あらすじ】

飛び級で大学生になった天才少年と彼を愛してやまない人々の1年間。

基本のほんとしたコメディになる予定……でしたが、のんびりしていられなくなりました。

途中から徐々に冒険活劇が始まり、犯罪・流血を含むアクションが発生します。

天才少年の成長と、それを支える仲間達の物語です。

本編主人公 天才と野獣

江藤克也15歳。国内最高学府、東東大学の3回生である。傷みのない黒い髪は品良く切りそろえられ、大きな黒いリュックを背負った細い体は15歳にしてはずいぶんと小柄でまだまだ成長途中だ。ジーンズにTシャツまたはジーンズにポロシャツ以外の服装の彼に会いたければ、寒い冬まで待つしかない。そうするとジーンズにセーターを着た克也少年を見ることが出来る。

江藤克也についてももう少し触れよう。

克也は天涯孤独である。知りうる限りにおいて存命中の係累がない。数年前まで父方の祖父が生きていたが、病気で没した。父母はそれ以前に他界している。母の係累については語れる人物がいないため遡ることができない。

克也少年は父方の祖父の下で育ち、祖父亡き後は里子に出ていた。引き取ってくれたのが現在同居中の山城夫妻である。

山城和男は見るからに子煩悩な好人物ではあるが40過ぎで定職がなんだか分からない上に家を不在にすることも多い風来坊である。山城乙女は夫よりいくらか若い有能な人物で、和男に代わって家計を支え、克也を育てている。乙女の仕事は山城酒店の社長である。山城酒店は、もとは山城酒造という造り酒屋の二男だか三男だかが独立して作った卸売会社だ。山城の本家は今も石川にある健在の富豪である。

克也は13歳で大学生になった。試験は免除だ。高校生科学コンクールに応募したレポートの内容で代替された。大学生になって1回生、2回生と順調に修了した克也を待っていたのは、11歳で高校に入学した時のような意地の悪い好奇の目ではなかった。大柄で毛むくじゃらでほこり臭い男子学生だった。彼の名を猿渡という。猿渡とかいてサワタリと読む。音は爽やかなのに、見た目が毛むく

じやらなので、あだ名を猿君という。

猿渡桂蔵24歳。国内最高学府、東東大学をあわや放校されんとした大学生である。伸び放題のくせ毛は絡まり合いそのことで巨大な毛玉の様相を呈している。大きな体に大きな顔と大きな頭が乗っている。顔は髭に覆われており下半分は良く見えない。濃い眉の下に大きな目がぎよりと光っている。背中に土囊のようなものを背負っているが、良く見ると昔はキャンパス地だったと思われるリュックである。春の新学期に戻らねば放校する、と学校から通知がきた親から放校になったら仕送りを止める、と通知が来た下宿の大家から仕送りが切れたら置き去りにしている荷物を全部捨てる、と脅されて学校に舞い戻ってきた。それまでマレーシアの奥地に滞在していたらしい。学校から姿を消して4年程経っていたので戻ってきたも、ほとんど知り合いがいなかった。その数少ない知り合いも、彼の変わり果てた姿に本人と見抜くことができなかった。

猿君と克也の出会いには当然の成り行きであった。こうした扱いにくい学生を扱える人物は限られている。よって、二人が師事することになった教授が同一人物だったのだ。

本編主人公 天才と野獣（後書き）

初投稿です。よろしくお願ひします。

未知との遭遇 - 1

大学の入学式は有って無きが如き存在である。しかし若人が寄り集まり老体の訓示を受けるといふ儀式はいつの時代も尊重されるべきものとされる。こうした格式に煩い最高学府においては新入学生のみならず、在学生にまで参加が義務付けられていた。

某年4月、麗らかな春の日差しをシャツアウトした講堂に1万人近い人間が集い、例年のごとく老体の訓示を受けていた。10分を超す学長の挨拶に続き、国会議員、どこかの学会長、財界の名のある社長など各界の権威から来賓挨拶が続く。白い羽毛のような毛髪を戴いた老人たちは、これからの国を背負って立つ若者に勉学に励めと激励の言葉を送った。見ず知らずの誰かに激励されなくても勉学に励める探究心と知識欲の旺盛な人物だけが入学可能な最高学府において全くもって無駄極まりない行事である。

ほぼ全ての学生が完全に意識を遠くへ飛ばして過ごす入学式において、学生達の注意を引きもどす効果を持っているのが東東大学の名物教授である総合科学部長の榊原教授による挨拶である。

榊原教授はテレビなどへの出演も多く、大学のみならず全国区で知られた看板教授である。神がかり的な発明と実験で知られる彼の発明の中で最も有名なものが「消える紙」である。一定条件下で時が立つと水と空気に分解される紙はゴミの削減に大いに役立つ発明として産業にとりいれられ、すでに巨万の富を得ている。この発明をした際に榊原教授が行った伝説的実験が、学内のトイレの個室の環境を制御し、個室に入るときはあった紙が、用を足している間に水と空気になっているという現象を300人もの学生で実験したものである。これによって、いかに素早く環境に影響なく紙を消失させるかを立証してみせたのだ。彼には他にも功績があったが、それはトイレにおける恐怖の実験の有名度に比べれば取るに足らないものと言える。

実績のある教授には学生が集まる。榊原教授は人気教授であったが学生を受け入れないことでも有名であった。彼のお眼鏡にかなう人間しか研究室には参加できず、年に1人入ればいい方なのだ。実際、前年時点で榊原研究室に所属していた学生は学部生から博士課程まで合わせても4人しかいなかった。榊原教授はその年、殺到する応募の中から研究室に配属する新人を発表する場を入学式に定めていた。全学生が集まっている場で発表しないと掲示板前の人だけが警備員を必要とする程になったり、選に漏れて抗議に来る学生で研究室がすし詰めになってしまったりするという教訓に基づいてのことである。3回生以降でしか配属されない研究室への配属発表が入学式のハイライトというのは本来の趣旨に悖るのだが、過去の混乱を踏まえて大学側からも異論はでなかった。この年、榊原教授は2人の新人を受け入れると発表し、1万の学生をどよめかした。「今年3回生になる江藤克也君、猿渡桂蔵君の2名にはこれから我々と一緒に研究に取り組んでもらいます」

語尾に「ですよのじゃ」がつかないのが不思議な程、仙人めいた外見の教授から出た名前を聞いて学生のだよめきが納得のため息に変わった。

江藤克也。国家の至宝。飛び級によって13歳で大学に入学した稀代の天才児として有名な人物であった。彼の名前によるインパクトが強過ぎて、猿渡桂蔵の名前は殆どの学生の頭に残らなかった。もし、猿渡桂蔵の名を知っていた人物がいたとしたら、その口から洩れた言葉は「生きていたのか」だったに違いない。4年前に学校を去り、どこへともなく旅立っていった学生である。

これが、猿君と克也がお互いの名前を聞いた初めのことである。

未知との遭遇 - 2

その後、二人はすぐに榊原研究室で顔を合わせた。

克也が研究室のドアをノックすると「どうぞ」と女性の声で返事があつた。

「失礼します」

克也が中学校時代に職員室に入る際に教わった作法で部屋に入ると、中には5人の人間がいた。2人は巨大な灰色の机に向かってそれぞれ何かしており、2人は窓際に立つて話しており、一人は換気扇の下に立つてタバコをふかしていた。

机に向かつているうちの手前側は丸顔に黒縁の大きな眼鏡をかけた男性で黒い髪が肩より長く伸びている。もういつでも恋人に求婚できるだけの長さがあるが、残念ながら一瞥した限りでは女性に喜ばれそうな要素が全く見当たらない。その第一印象は太った犬である。もう一人、机に向かつているのは針金のように痩せた男性で、丸坊主である。目も鼻も口も一様に細く鋭い作りで、それを際立たせるように細い銀縁の眼鏡をかけている。こちらの第一印象はマツチ棒である。

窓際にいるのは長い黒髪をすっきりまとめたスーツ姿と、赤色の髪でジーンズにTシャツ姿の女性である。黒髪の女性はスタイルの良さを最大限に強調する深いスリットの入ったタイトスカートのスーツを着ており、スリットから時折のぞく裏地は金色である。ストッキングの後ろ側には一本黒いラインが入っておりそれがまっすぐのびる細い脚を強調している。もう一人の女性はとにかく髪に目が行く。克也は唐獅子のように赤い髪の人間を初めてみた。ちなみに彼の頭には唐獅子という語彙がなかったので、ただただ「赤い髪」として認識したのだが。克也の入室に気がついて振り返った彼女の顔には明らかに書いてある分しか眉毛がなく、やや釣目のきつい顔つきと相まってヤンキーそのものという印象を与えた。二人の女性

が並んでいる様子は弁護士と依頼者の暴走族という風にも見えた。

黒髪の方の女性はフレームのない眼鏡を直しながら、克也に向き直り声をかけてきた。

「江藤克也君ですね。猿渡君が来るまで、そこにかけて待っていてください」

空いている巨大な灰色の机を示された克也は背負っていた大きなリュックを足元に下ろすと、素直に席に腰かけ回りを見渡した。当たり前なことだが、みな大学生以上なので克也の目には大人に見える。タバコを吸っている人物は特に他の4人よりも年配のようだ。30代中頃といったところだろうか。黒いスーツ姿で前髪を後ろに撫でつけたオールバックスタイルの男性はテレビで見るとような二枚目だった。彼は克也と目が合うと啞えタバコでニヤリと笑った。

程なく重そうな足音がしたかと思うと研究室の扉が開き、入室しようとした何者かが激しく戸口に頭を打つ音がした。ちよつと打ちつけた、というレベルではない音量に室内にいた全員が驚いて見守っている、一歩下がって屈みこんでから大きな塊が入ってきた。そして入ってきた瞬間にマッチ棒が眉を寄せ、他のメンバーも一様に敵しい顔つきに変わった。なぜなら、塊が部屋に入ってきた瞬間に米が炊ける時の匂いと砂と汗と靴の匂いがいっしょくたになったような異臭が漂ってきたからである。塊は頭部が絡まった毛で覆われており、体は迷彩色で覆われていた。背中には何故か土嚢を背負っている。

「おい、猿。お前臭えよ。そんなんで良く飛行機乗れたな。」

タバコを吸っていた人物が携帯灰皿でタバコをもみ消しながら嫌そうに言う、塊から声が発せられた。

「船で帰ってきたんで。」

「そうかよ、って、そういうこと聞いてんじゃねえ。お前風呂入って来いよなあ。」

「銭湯で入湯拒否を受けました。」

淡々と塊が返事をする。どうやらこの塊は日本語がしゃべれるらしい。しかしタバコの人物は猿と呼んでいる。猿なのか。人間なのか。克也は二人を見比べた。

「そらそうだろうよ！お前なんぞ、グランド脇の水道のホースで十分だ。おい、今行くなよ。生乾きの状態で部屋に戻ってきたら俺はお前を焚きあげてやらにやいかんことになる。」

タバコの人物は甘い中にも渋みのある紳士然とした二枚目の外見に反して口が非常に悪い。塊はホースという単語で部屋をいったん出て行こうとしたが、止められて振り返った。素直である。塊は振り返る途中にすぐそばに座っている克也を目視確認した。

小さな生き物が座っている。丸い目を見開いてこっちを向いている。かわいらしい。

色白で華奢な体つきの克也はまだ少年のようでもあり少女のようでもある。丸い瞳が目立つ小さな顔は子ザルのようだと塊は思った。一方の克也は、塊に見つめられて初めて塊に目があることが確認できた。大きな目である。しかし、これだけでは人か猿か判断できない。

「あの」

克也は勇気を出して口を開く。

「あなたは人間なんですか。もし違っていたら、すみません、でも僕、話せる猿を見たことがなくて。」

塊は大きな目を瞬かせた。

既に塊から興味を他に移して、好き勝手なことをやっていた他の面々も一斉に動きを止めて克也に注目している。

塊は数秒思索していたが、簡単な問いだったので回答した。

「人間だ。」

「ああ、そうでしたか。」

克也はにっこりと笑顔になった。

塊、つまり異郷からの帰国直後の猿君はこの笑顔で克也の虜になった。元々小動物が好きなのだ。動物好きが高じてマレーシアへ出奔してしまったと言っても過言ではない。そんな彼にとって、子ザルのような克也はストライクと真ん中のターゲットだった。ちなみに外見上、自分の方がよっぽど類人猿じみていることについては思い当ってもいない。

周囲にいたメンバーは克也の無垢さと、それを上回る無知っぷりを目の当たりにし、なんだかこれまでに出会ったことのない生き物がやってきたと認識した。

猿君は思わず身についた餌付け癖でポケットから小さなリンゴを取り出し克也に差し出した。全身ズタボロの衣類のどこがポケットか判然としないため、克也の眼には猿君が突然どこからともなくリンゴを出してきたように見えた。驚いて丸い目がますます丸くなる。差し出されたリンゴは小さく見えたが、克也が手に取ってみると標準的な大きさだった。まるで魔法である。

「食べるか？」

猿君に首を傾げて聞かれて、克也はリンゴと猿君を真剣に見比べた。知らない人にものをもらって食べてはいけない。この場合、猿君は知らない人にカウントしていいのだろうか。その仕草そのものが動物が餌を与えられた瞬間の動作と同じだとは克也自身は気づいていないが、周りの学生達は気がついた。リンゴを握りしめてきよるきよるする克也は文句なしに可愛い。全員の視線を一人占めにしていた克也だが、それもそう長いことではなかった。

「江藤、それ食うなよ。」

タバコの人物が横から割って入ってリンゴを没収した。

「知らない人からもらった食べ物には食べてはいけません。」

克也が考えていたことを思わず口走ると、彼は呆気にとられた顔をしたがすぐに苦笑い浮かべて克也の頭を撫でた。

「そうだな。その通りだ。何よりこれ食ったら絶対腹壊すぞ。その手も良く洗っとけよ。食事の前には手を洗いましょう、だ。」

克也は頷いた。タバコの人物はリンゴを猿君に投げ返した。

「人間を餌付けしようとするな。」

そう言ってからふと克也と猿君を見比べて「いや、どっちも猿っぽいな。今年の新人は親子ザルか。」と言った。

克也は意味が分からなかったが、猿君はなんとなく嬉しそうだった。

猿君と克也を除く学生が、そうだ克也は子ザルに似ていると心の中で納得していると、タバコの人物の背中側にあった扉が開いた。つまり克也たちが入ってきた廊下に通じる扉とは反対側の扉である。そこから榊原教授が姿を現した。

「おお、揃っているかね。ん？一人足りないようだが。黒峰君、大木君はどうしたかね。」

黒峰と呼びかけられたのは黒髪の女性だ。

「大木君には事務室まで資料を取りに行ってもらっています。」

彼女が回答し終わるタイミングで、もう一度廊下側の扉が開いた。大荷物の子学生が入ってくる。

「黒峰さん、もらってきました！」

「ありがとう。」

彼が荷物を一番手前の机の上に下ろすとようやく顔が見えた。肉中背の真面目な学生然とした青年である。学内の他の場所に比べ平均的な学生としてすっかり背景に馴染めそうな彼も、周りのメンバーの濃過ぎる外見の中に混じると「普通だ」ということが際立つて感じられる。妙に安心感を誘うのは、そのためかもしれない。

「よし、では全員揃ったところで始めようかね」

榊原教授がさういうと、黒峰が心得たように教授の脇に立った。

「本日は新しい研究室のメンバーが入りましたので、まずメンバーの紹介を行ってから席替えをします。では教授からお願いします。」

黒峰が一步下がると、榊原教授が口を開いた。

「まずは、猿渡桂蔵君、江藤克也君。榊原研究室へようこそ。この研究室の担当教官である榊原兵衛だ。この研究室は総合科学部先端

技術研究科榊原研究室というが、要するに他の研究室に入れない人間の集まる場所だ。個性の強い学生ばかりだが、ここが東東大学を去るまで、君達のホームになる。仲良くやっていってほしい。研究に関して言えば、研究テーマは自由に設定してくれて構わない。私の守備範囲を超えたら指導できないというだけのことだ。もちろん、他の教授の手を借りることを禁止するほど私の心は狭くないので、そういうときは然るべき人間を探して来て指導を受けるように細かいことは黒峰君と最上君に聞いてくれるように。では、これから長い付き合いになるだろうがよろしく頼むよ。」

これでは自己紹介というより研究室紹介であるが、榊原教授の生年月日や趣味に興味があるわけではないので誰も文句は言わなかった。

「最上先生。自己紹介と新入生以外のメンバーの紹介をお願いします」

黒峰に指定されたタバコの人物はちよつと手を上げて了解の意を示した。

「最上一樹。38歳。今年度も引き続き準教授だ。専門は無機化学と大人の男女交際。主な研究テーマは特殊な金属の開発、精製だ。最近はその応用実験がてら軽量バイクを作っている。で、その共同研究をしているのがそこにいる赤毛の赤桐。赤桐はドクターコース在籍中だ。年齢と年次は聞くな。それから、命が惜しければこいつがハンドルを握っているときには絶対逆らうな、スピード狂だからな。スピード狂って分かるか、江藤。アホみたいにスピード出して車とかバイクとか乗りたがる命知らずのことだ。次にそっちのマツチ棒みたいなのが針生だ。ドクターコース3年目だな。こここの榊原教授と一緒にあって消える繊維だか透明になる繊維だかを開発してる。当研究室きつての頑固おやじだから、愛想が悪くても気にするな。奥のデカ眼鏡が大徳寺光明。通称犬丸。火薬マニアだ。外向きの専門は建築目的の爆破技術開発とかなんとか言ってる。人に聞かれたら話を合せるように。あと金に困ったら俺じゃなくて

犬丸に相談しろ。最後に入ってきたのが大木。去年まで唯一の学部生だったからこの雑用係でもある。何でも調べさせればそこらの興信所よりあてになる。そういうわけだから金以外で困ったらとりあえず大木に泣きつけ。以上。」

ひどい説明だが、どこからも異論がでないので間違っではないらしい。

「では次に猿渡君、自己紹介を」

黒峰に塊が先に指名された。

「猿渡桂蔵。今年から大学に復帰しました。専門は特にはないです。専門が特にはないという回答は正しいようで、正しくない。せめて予定の研究分野でもあげるのが常識というものである。しかし誰もその点を正さなかった。

「では、江藤君」

克也は椅子から立ちあがった。それでも横にいる塊の半分程の大きさしかない。

「江藤克也です。専門は特にまだ決めていません。よろしく願います。」

最後に、とって黒峰がもう一度一步前にでて榊原教授の横に並ぶ。

「この研究室で榊原教授の秘書を務めます黒峰優花です。ファシリテイの不備があった場合や出欠の連絡は私にしてください。さて、次に席替えですね。」

榊原研究室は院生も学部生も関係なく一つの大きな部屋に机を持つ。特別扱いは奥の教授室を使う榊原と最上だけである。黒峰の机は教授室扉前の半個室スペースと決まっている。残りのメンバーは人数の変動があると机の配置や取り分を変更する「席替え」を行うのが習わしだ。

「今年は二人増えましたから、戸口付近のスペースに机を増やしました。針生君と犬丸君は今の並びのまま、もう少し壁際に机を下げてください。部屋の中側に散らかしている荷物は片付けること。赤

桐さんは一つ机を開けてください。大木君は開けてもらった方に移動。猿渡君と江藤君は新しく入れた机と大木君が使っていた机をそれぞれ使ってください。」

席替えは黒峰の独断で実行される。一応窓がないのがお好みの針生と犬丸が壁際。窓際が好きな赤桐は窓際と配慮されてはいるが大木や新入生に発言権はない。

「では今日中に片づけを終えてください。配線はすでに終わっているので問題ないはありますが不都合がありましたら言うってください。続いて」

黒峰は優秀な秘書であるらしく淀みない。今学期のスケジュールと近数日間の連絡事項が次々と言い渡される。

「以上、散会」

黒峰の号令で研究室の顔合わせ会は終了した。通常、必ず触られる克也がなぜそこにいるのか、という点についても説明はなかった。元からいるメンバーは慣れたもので、素直に机の移動などに取り掛かっている。

「おい、江藤」

猿君が克也に声をかけた。

「江藤は、なんでここにいるんだ」

至極当然の質問である。克也はこのとき15歳だったのだから。克也も問われ慣れているので回答も慣れたものだった。

「飛び級です。15歳ですが、高校卒業までの認定と大学2年次まで修了認定はもらっています。」

小学校から飛び級に飛び級を重ねて、13歳で大学生ということになった。飛び級と言えば聞こえはいいが、彼の場合はある分野において傑出した能力が認められたため、他分野の学習が終らなくても進級を許されたのである。よって、専門分野以外の知識はもちろん一般常識、情操教育にも著しい抜けがある。こんな無茶が罷り通ったのは、彼のその傑出した能力が国をも動かす潜在的な力を秘め

ていたことによる。平たく言うと国益に直結する分野に秀でた頭脳だったのだ。克也の頭には国益が眠っている。よって国の機関も彼の飛び級を後押ししこそすれ、止めることはなかった。

「そうか」

猿君は素直に納得した。繰り返しになるが、素直な人物なのだ。

「15歳か。伸び盛りだな」

大きな手で克也の頭をぼんぼんと撫でると大きな目を細めた。大抵、飛び級の話をするときと大げさな反応をされるので、必要な過程を修了したら進級すると言う当たり前のことをしているつもりで、克也は不思議に思うことが多かった。しかし、この塊はあっさり納得してくれた。克也は級友にすんなり受け入れられるという生まれ初めて経験の良い感情と共に記憶した。また、いつも自分より大柄な級友に囲まれ小柄であることが密かなコンプレックスだった克也には伸び盛りという単語も非常に喜ばしいものだった。実のところ成長期らしい成長期を迎えていない克也は伸び盛りではないのだが、そんなことを猿君は知る由もない。克也はたった二言の返事を聞いて、この塊が気にいった。二人で席を並べてPCのセットアップやら、黒峰から渡された膨大な量の資料への記名やら、署名やらを行う。署名に印鑑を押す欄を発見した猿君は、机の下に置いてあった土嚢を取り上げると口を開いて中から古びたペンケースを取り出した。その中には更に古びた印鑑が入っている。

「珍しいカバンですね」

土嚢という存在を克也が知っていれば、土嚢をカバン代わりにするなんて珍しいですね、といったであろう。猿君は首を傾げた。

「普通のリュックサックだ。古いだけだと思うけど。」

「そうですか。リュックサックは古くなるとそんなに見た目が変わるんですね。」

榊原研究室のメンバーで普段から人の会話に無遠慮に口をはさんでくるのは最上と犬丸だけなのだが、この会話には打ち合わせのため既に席を外していた赤桐と最上を除く全員が何か言いたくてもう

うずした。そして最初に口を開いたのは犬丸だった。

「猿君はさあ、ただ長い間そのかばん使ってたんじゃないでしょう。どうしたらカバンがそんな土囊みたいになるのか僕には分かんないね。」

「見た目がどうというより、その土囊自体が異臭の一因なんじゃないか。お前明日から何とかして来いよ。」

針生は鼻が良い。よって臭いものにも非常に敏感だ。もっとうと大抵の刺激には他の人より敏感だ。周りからは神経質とのレッテルが張られている。

「江藤、リュックはただ古くなってもそうはならないから。俺のカバンは10年使ってもリュックだって分かる外見してるだろ。」

騙されるな、という言葉をかろうじて飲み込んだ大木は自分のカバンを持ち上げて見せた。確かに薄汚れてはいるが十分にリュックサックと分かる状態である。克也は自分の足元のリュックを見下ろした。大きな黒いリュックは高校卒業時に山城乙女が購入してくれたものだ。もう通学カバンに学校の指定はないから何でも好きなものを選びなさいと言ってデパートのカバン売り場に連れて行ってもらった。あれから2年間、基本的にこのかばんしか使用していないが、猿君のカバンへの道のりは遠いと思えた。

「猿渡君は、」

何年そのかばんを使っているのですか、と聞こうとして克也ははたと気がついた。なんと呼べばいいのか聞いていない。克也が飛び級を繰り返すうちには意地悪をいう者も当然いて、年上はクラスメイトでも「さん付け」で呼べと言われたこともあった。以来、新しく出会った学友の呼び名は本人に確認するようにしていた。

「あの、僕はあなたのことをなんて呼んだらいいでしょう。」

改めて、克也が問いかけると猿君はしばし沈黙した。表情が毛に覆われて驚いたのか悩んでいるのか窺い知ることができない。

「猿君でいいんじゃないの。」

さっさと答えたのはまた犬丸だ。犬丸にしても猿君に会うのはこ

れが初めてなのに全く遠慮というものがない。しかし、猿君はそんな犬丸の態度も気にならないようだった。

「それでいい。」

簡単に同意した。

「じゃあ、猿君、猿君はそのかばんを何年使っているのですか。」

克也の問いに、今度は全員ずつこけそうになった。

「まだカバンが気になるのか。」

猿君は自分の土囊、元リュックサック、を見下ろした。それ程魅力的な存在には見えない。

「かれこれ、5年くらいかな。」

10年使っていると言った大木のカバンと猿君のカバンを克也は頭の中で並べてみる。犬丸が言っていた使い方が問題というのは正しいようだ。克也が一年あたりのカバンの消耗について考えている間に、猿君は書類に印鑑を押した。ちよつと心配だったが印鑑は割れも欠けもしていなかった。

「江藤は、なんて呼んでほしいんだ。江藤でいいのか。」

猿君はお返しのように克也に声をかけた。克也は猿君に向き直って回答する。

「江藤で構いません。でも、家族は克也と呼ぶので克也でも構いません。」

「克也のがいいなあ。」

犬丸は勝手に感想を述べる。

「俺も克也って呼んでいい？」

大木も便乗する。

「はい。」

克也が良い子のお手本みたいな返事をする、キワモノ集団と名高い榊原研究室に似つかわしくないほんわかムードが流れた。これで、克也のあだ名は克也に決定した。その後、全員の呼び名を克也は確認していったが、犬丸以外は先輩なので名字にさん付け、犬丸は名字で呼ぶと他の人が誰のことか分からないという理由で犬丸さ

んと呼ぶことになった。最上は先生なので、先生と呼ぶ。榊原教授はそのま榊原教授だ。

克也は研究室の面々が話しやすいことに驚いた。猿君は何くれとなく気にかけて声をかけてくれるし、分からないことがあって困っていると呼ぶ前に大木か黒峰が手伝いに来てくれた。気にかかると質問しても、昨年度までのように変な顔をされて返事がもらえなかったり、要領を得ない回答で終わったりすることはなく、素早く明瞭な回答が返ってくる。犬丸は口を出すだけで、針生は文句を言うだけだったが理不尽なことは何もなかった。学校というところでは常に遠巻きにされ、質問をするたびに戸惑いや悪感情をもつて返されていた克也にとって、これは画期的な環境の変化であった。

未知との遭遇 - 2 (後書き)

克也の仲間達です。

未知との遭遇 - 3 (前書き)

ランチタイムです。

授業が行われている訳ではない研究室では昼食の時間は不明確だ。猿君の腹の音で気が付いたら14時近くになっていた。

「いい腹時計ですね。」

大木が声をかけると、猿君は「ぐぐぐ」とぐぐもった声を上げた。笑ったらしい。

「飯行きますか？俺は学食で適当に食べてきますけど。」

大木が立ちあがって声をかけた。特に急ぎの用が無ければ基本的にご飯はみんな食べるのが榊原研究室の習慣である。放っておくと一日中研究に没頭できてしまう面々の精神と身体の健康のために息抜きの時間をもたせているのだ。針生はちよつと目を上げて行かないという意思表示をした。どうも手が離せないようだ。犬丸はもそもそと机から何か取り出している。校舎の出入りに必要なIDカードだろう。つまりは行くということだ。黒峰はいつも一人で昼食をとるので、誘う数には入っていない。赤桐と最上はまだ戻って来ない。二人で先に食べているかもしれない。猿君はのっそりと立ち上がった。どうやら行くらしい。

「克也はどうする？」

大木が重ねて尋ねると、克也は首を横に振った。

「僕はお弁当があるので、学食には行きません。」

「弁当、持ってくれば？針生さんと黒峰さんに囲まれて一人で食べるのもいいけど。」

二人の眼鏡越しに鋭い視線が飛んできて大木は「それじゃつまらないでしょ。」という言葉を急いで別の表現に置き換えた。

「二人ともまだ食事しないみたいだから、俺たちと一緒に食べに行こうよ。」

「学食にお弁当を持っていってもいいんですか。」

克也が不思議そうに聞く。

「もちろん、いいんだよ。知らなかったの？」

「学食ではそこで買ったもの以外食べてはいけないのかとと思っていました。」

友達は教えてくれなかったのかと言いそうになって大木は危うく飲みこんだ。が、犬丸は飲み込もうともしなかった。

「誰かそういうこと教えてくれる友達いないの？」

「いません。」

克也は気にする風もなく回答する。いわゆるお友達がいらないことを克也は気に病んではない。彼にとってはいないのが当たり前なのだ。

「とにかく、行こうか。お弁当持っておいでよ。」

「はい。」

克也はカバンから小柄な体に不釣り合いなほど大きな弁当箱を取り出した。山城乙女特製弁当である。その大きさに目を奪われながらも一行は学食へ向かった。学食で人目を集めたのは、学内ではだいぶ見慣れた姿となっている克也よりも人間かどうかが判然としない猿君の方だった。

猿君が入店拒否を受けるかと大木は密かに心配したが、特に咎められることも無く生姜焼き定食を手にしてテーブルへ戻ってきた。犬丸はラーメンに行列している。ラーメンのブースはいつも混んでいる。大木が猿君と同じ定食をもって克也の待っている席へ戻ると克也の弁当は既に広げられていた。豪華絢爛とはいかないが、手の込んだおかずのたくさん詰まった愛情いっぱいのお弁当に見えた。何より量が多い。

「克也、そんなに食べられるの？」

「はい。乙女さんがよく食べれば大きくなると言つので、たくさん食べるようにしています。」

「乙女さん？」

「母です。」

母を名前で呼ぶのは珍しいと思ったが猿君も大木も黙っていた。

「犬丸さんは、待たなくていいから先に食べよう」

大木は自分を待っていたらしい二人を促して食べ始めた。犬丸はどうせ来てもあつという間にラーメンを食べ終えてしまうのだ。先に始めていても特に問題はない。3人があまり弾まないなりに会話をしながら食事をしていると犬丸より先に最上と赤桐がやってきた。手に手にプレートを持っている。

「邪魔するぜ。」

最上は大木の隣に腰かけた。大木の正面に克也、克也の隣に猿君がすわっているのだが、大木の隣、猿君の向かいではない方に座る。赤桐は克也の隣、最上の向かいに落ち着いた。最上が克也の弁当箱を覗き込む。

「お、江藤、うまそうだな。」

「はい。美味しいです。」

「自分で作ってるの?」

赤桐も横から巨大な弁当箱を見下ろしながら聞く。

「いえ、母が作ってくれます。僕は料理ができないので」

見るからにできなさそうなので、恥じ入られても驚きはない。

「そうか。お母さん料理上手だね。」

赤桐はそう言いながら、横からさつさと煮物の絹さやを抜き取って食べてしまった。兄弟も親しい友人もない克也は弁当の中身を横取りされたことがない。あつけにとられていると、罰の悪そうな顔で見下ろされた。

「なんだよ、絹さや好きだった?じゃ、代わりにこれあげるよ。」

赤桐は八宝菜からうずらの卵をすくい上げると弁当箱の端に返した。どうやら物物交換らしいと克也は気がついた。絹さやは特別好きではないが、卵は好きだ。この交換なら文句はない。

「ありがとうございます」

克也が笑顔になると、赤桐も安心したように「気にすんな」と笑顔になった。赤桐が誰かに優しくする所など中々みられるものでは

ない。余計なことを言うと怒られるので黙っていたが大木としては驚きの克也マジックだった。こういうときに余計なことをいう代表の犬丸はラーメンブースからまだ戻って来ていない。

「自分が先に好きなもんとつといて気にすんなってなあ。」

最上がからかったが赤桐は素知らぬ顔だ。

「あれえ、先生と赤桐さんもいる」

ついに犬丸がラーメンを手に入れて戻ってきた。5人の席次をみると犬丸が猿君の正面になる。まだ異臭が漂う猿君の正面は貧乏くじと言えよう。一瞬恨めしげに大木をみたが大木は素早く目を逸らして気がつかないふりをした。

「犬丸、またラーメンかよ。」

最上は呆れた様子で、湯気のたつどんぶりをみやった。最上は自分が色男であることの価値をよく理解しているので30代も後半になった今は体型維持に余念がない。年中ラーメンを食べて思う存分太っている犬丸を見ると、腹が立つこともある。特に自分が減量している最中は許し難い。幸い、今の最上は減量をしなければいけない状況ではなかったため、ラーメンを胡椒でいっぱいしたりソースをぶち込んで台無しにしたりはしなかった。

「いいじゃないですかあ。」

犬丸は大木の横に座りながらさりげなくラーメンを最上からガードする。

「犬丸さんはラーメンが好きなんですか。」

克也がそう問いかけると最上と赤桐と大木が、はつとした顔をした。犬丸に自由にラーメンの話させてはいけない。榊原研究室の不文律だ。新参者に説明しておかなかつた大木は今日の午後の自分の作業に大急ぎで不文律の説明を追加した。

「克也は好きじゃない？僕はねえ」

犬丸のラーメン講釈は長い。好きな店、好きなスープ、ダシ、具、麵、麵のゆで加減いくらでも延々と話している。克也は驚いたように箸を止めて犬丸の講釈を聞いていたが、残りの4人は黙々と食事

を進めた。数分後にデザートのリンゴをのぞいて全て食べ終わった猿君が、リンゴの表面をこすりながら熱のこもる犬丸に声をかける。「犬丸さん、麺がのびてる」

めでたく犬丸のラーメン講釈の最短記録が樹立された。

犬丸が1分程度、伸びてしまったラーメンを嘆きながら啜っている間に、食事が止まってしまった克也と赤桐がこっそり席を入れ替わった。犬丸が改めて続きを話そうと顔を上げるとばっちり赤桐と目が合った。

「犬丸。その話はもういい。」

がっかり俯いた犬丸の長い髪が垂れた犬の耳に見えた。

未知との遭遇 - 4

克也が食べ終わるのを待って全員で研究室に戻ると黒峰はどこかに昼食をとりに出た後で、針生は出かけた時と変わらぬ様子で何か作業を続けていた。

猿君と克也がオリエンテーション資料を読んだり、大木に廊下呼びだされて榊原研究室の不文律を教え込まれたりして過ごしている間に、黒峰も戻ってきた。

午後4時過ぎ、記入した書類などを克也と猿君が黒峰に手渡すと内容を確認した黒峰は帰宅を指示した。

「江藤君、今日やらなければならないことはもう終わったので、帰宅していいですよ。明日からは授業が無い時間にこちらに寄ってください。猿渡君は、復学に関する書類の続きがあるからもう少し待っていてください。」

克也はPCをシャットダウンして机の上を片付け、巨大なリュックを背負うと研究室の扉へ向かった。

「では、お先に失礼します。さようなら」

「またな。」

「気をつけて帰れよ」

克也は礼儀正しく一礼して去っていく。扉がしまり、軽い足音が聞こえなくなると何気なさを装って見送っていた面々が黒峰に視線をやる。黒峰が人の帰宅時間に口を出すようなことは普段あり得ない。

黒峰は研究生達の視線に直接答えることはなく、教授室の扉を叩いて榊原教授と最上を呼び出した。榊原教授が咳払いをして「みんな、ちよつといいかな」と言ったときには既に全員の注目は黒峰から教授に移っていた。

「皆、知っての通り江藤克也くんは15歳だ。特例として本学に入

学し、今年から研究室にも所属することになったが、特別に配慮が必要な点がある。これは彼の保護者が江藤君の入学を許可する条件とした事柄なので厳守してもらいたい。」

そう言つて教授はゆっくりと学生達を見まわした。

「まず、15歳の年相応の子供として扱ふこと。深夜にわたる研究や週末返上の実験などは禁止。学校を退出する時刻は20時までが原則だ。それ以上残る場合は保護者に連絡の上、許可を受ける必要がある。それから、飲酒喫煙の禁止はもとより公序良俗にもとるような情報を与えないことに留意してほしい。」

二つ目に、大学生としてプライドを傷つけられるような言動をしないこと。研究や実験に終日時間を費やせないからと言つて、彼を主要な研究から遠ざけたりしないこと。よいかな。」

榊原教授が一同を見回すと、針生が軽く手を上げた。教授が頷いて発言を促すと難しげな顔で口を開いた。

「退出時間は共同研究をしない限り口を出さず気はないですが、大学生としてのプライドと言われても、それは約束しかねます。江藤が大学生であること自体に無理があると思いますから。」

「無理があると思うかね。」

榊原教授に問われて針生が再び口を開く。

「例えそれがどんなに人間として認識するには難しい外見だったとしても隣に座っている生き物が喋る猿か、人間かの判断もつかないような人間が大学生ですか。江藤のこれまでの飛び級のスピードなら、あれほど常識が欠落することはないはずです。もちろん15歳までに得られる教育について、江藤自身に責任があつたとは思えないし、本人になんて飛び級したんだと責めるのがお門違いだと言うことくらい分かつてますよ。周囲の人間が、飛び級を認めたことによつてより高いレベルの教育を与えたのではなくて、社会人として必要な常識を得る機会を奪ってきただけというのが実態なんじゃないですか。彼のこれまでのレポートを見ました。その範囲においてですが、江藤の才能は理解します。自分に分かる限りでも傑出して

いるし、自分の理解を超えたレベルのものがあるとも思います。それでも俺は、今の彼を同じ学生として尊敬することはできませんよ。それに学生の身分でも一応大人のつもりなので、黙ってこの状況を受け入れることはできません。彼に今必要なのは世界最高峰のハードが完備した研究環境ではなく、しゃべる猿が大学に通うことはないという当たり前の常識を身につけられる環境ですよ。そのための友人と、指導者が必要なんじゃないですか。俺は、

「だから、それが与えられるのがここなんだろう。お前らが友人で、俺と教授が指導者だ。文句あるか。」

話に割り込んでこられた針生は細い目に力を込めて最上を睨みつけた。いつも細々としたことに苛立っている針生だが、本当に怒っているときには額から剃りあげた前頭部に向かって血管が浮きたつ。それは心の弱い人間なら10年うなされそうな見事な悪役面である。そこまで述べている常識的な意見とのギャップに笑ってはいけないと思いつつも最上は口元が緩むのを止められなかった。それを見ないふりをして針生は続ける。

「文句ならありますよ。この研究室はいつから小学校レベルの情操教育を行う機能まで持つことになったんです。言っていることが無茶苦茶です。」

少しトーンダウンしたものの針生は全く納得していない。スキンヘッドのおかげで丸見えの頭皮まで赤くしている。

「針生君」

今度は榊原教授が口を挟んだ。

「君の意見はもつともだ。それでも、私は重ねて江藤君をこの研究室に受け入れることをお願いしたい。」

針生は、普段から敬愛する榊原教授から直々に依頼されて更に少し怒りのボルテージを下げた。しかし感情と理性は別のものだ。

「納得しかねます。」

榊原研究室において本気で榊原教授に逆らうなんて前代未聞の大挑戦、であつたらここでもっと深刻なムードになったのだろう。し

かしながら、最上を筆頭に常に皆が言いたいことをいう環境であるので針生がはつきり拒絶しても榊原教授の小さいため息が漏れただけだった。

「頑固だなあ、針生さんは。若いながらに立派な頑固おやじだ。」
犬丸が首を軽く振ってため息をつく。首の動きに合わせて頬の肉と束ねられていない黒髪が揺れた。

「常識的な視点、今日会ったばかりの克也の人生を思いやる正義感、学内権力者に屈しない胆力。その鉄の意志があれば、克也の才能が生み出す富に目を眩まされたりせずに付き合っていける。榊原教授のお眼鏡にかなうだけの頭脳があれば克也の良き相談相手にもなれる。天才という外野の評価だけで無闇やたらと嫉妬もしない。」

針生とはいつもレベルの低い小競り合いが絶えない犬丸がせつせと針生を褒め続ける。針生は毒気を抜かれて困惑顔だ。

「そういう学友が必要だつて、最上先生は言いたいわけでしょ？針生さんは今、まさに克也が必要としている人物だつてことを自ら証明しちゃったわけですよ。」

そう言つて、犬丸は自分の言っていることが正しいかと問う様に最上と榊原教授を順に見やった。

「それつて、天才、天才と騒がれた子供が普通の人間扱いを受けられる環境を用意しようとしたら、こんなところになつちやつたつてこと？」

赤桐は呆れた顔で最上と榊原教授を交互に見る。最上は苦い顔だ。「ここが普通かどうかは意見の分かれるところだろうが、まあ、そういうことだ。」

フォフォフォオと榊原教授が声を上げて笑った。

「そういう大人の事情まで汲んで状況判断ができる犬丸君も良き学友となつてくれると期待しているよ。」

最上と榊原教授、それぞれに明言はしていないが明らかに犬丸の発言を肯定している。針生は眼鏡をはずしてこめかみを押さえた。自分が克也の友人候補としてエントリーさせてもらっていたとは考

えていなかった。

「針生君、改めてどうかね。」

榊原教授がもう一度問いかけると、針生は眼鏡を机に下ろしたまま目線を上げた。

「大学生としてのプライドというところを江藤個人のプライドに置き換えて理解していいなら、いいですよ。」

榊原教授は「それも結構だ」と笑顔で頷いた。

「良かった。よろしく頼むよ。他の皆も、言いたいことがあれば今のうちに言っておいてくれるかな。」

教授は一同を見渡したが、それ以上の質問はなかった。犬丸、大木曰く「だって、針生さんが全部言っちゃったし。」ということであり、赤桐は可愛くない現在の後輩たちより克也がいる方が楽しいので文句はない。猿君としては克也自身に不満がなければそれ以上自分から言いたいことはなかった。

換気扇の下でタバコに火を付けた最上が再び口を開く。

「授業が終わったらず必ず研究室に来させるから、勉強に没頭し過ぎて遅くまでここに居残らないように気をつけてやってくれ。暗くなってきたら誰かしら早く帰って一緒に駅まで行け。ちなみに、大事なことを教えておいてやると、保護者の出した条件が飲めないなら江藤は退学になるが、ちょっとやそつとこのことで江藤がこの大学を退学させられることはない。問題があつた場合は、江藤に不利益を被らせた人物を辞めさせて、江藤は残す。という風に大人の世界は動く。分かるな？」

犬丸が「ふあああ」としまりのないため息をつく。

「新時代の錬金術師の頭脳と引き換えじゃ、家にいくらお金積んでもらっても勝ち目がないなあ。」

犬丸は以前から克也の評判を良く知っていた。犬丸の実家である大徳寺家は黒いお金で儲けを出している老舗の暴力団である。お金になりそうなことには詳しい。江藤克也の能力は「錬金術師」という言葉に示されるように、大きな金を生み出す可能性があると期待

されていた。まだ試験管の中におさまる程度の実験しか行っていないが、少量で長期安定的なエネルギー供給を可能とさせる新たな触媒の開発において、彼は既に世界でもトップクラスの研究成果を挙げているのである。エネルギーを牛耳れば世界の覇権を握ることができるのはすでに世界の常識だ。克也は実用レベルまで昇華させれば世界の経済、勢力図すら書き換え兼ねない大発明の卵を握っており、かつその独創的な手法からいって、今後の応用開発を行うことができるのも江藤克也をおいて他にないとされているのである。大徳寺家にも当然、その噂は届いていたというわけである。

当然のことながら克也が頭角を現した中学の終わり位から、彼の周りには常に金と欲望と政治の暗い影が付きまとい、それから本人を守るために過保護なほどの配慮が求められた。そうなる则子供は傲慢に育ってしまいそうなものだが、本人は素直で真面目で礼儀正しい。この点においては、今は亡き克也の祖父も、現在の保護者の山城夫妻も克也の教育にここまで成功してきているといえるかもしれない。

最上はもう一度だけ念を押した。

「世間が何と言おうと、江藤は見たまま15歳の世間知らずの坊やだ。弟ができたつもりで大事にしてやれ。」

最上の念押しが功を奏したかどうかは定かでないが、克也は研究室にすぐに馴染んだ。また克也の常識が欠落していることは、初日から誰の目にも明らかであったので周りの大人たちは社会勉強と言っては色々なことを克也に吹き込んだ。

「いい、克也。このラーメンは何ダシだと思う？」

犬丸は、誰にも邪魔されずに克也と一緒に昼を食べられる限りにおいてラーメン講釈の続きを行い、実地検証のために出前を取っては一口食べさせて味を覚えさせた。お互い、それが何の役に立つのかさっぱり分からないが克也はここでも良い生徒であった。一度食べさせれば確実に味を覚える。天才の記憶力は味覚にも有効であるらしい。

「鰹と煮干しの味がします。」

「正解。」

犬丸はダシの話ができる仲間の出現に大いに喜んだ。

もちろん、先輩格の学生や最上がいるときはラーメン漬にはさせてもらえない。赤桐は弁当のおかずの交換に味をしめ、年中克也の隣に座ってご飯を食べたがった。克也の母親が栄養のバランスまで考えているのだから、横取りしたらいけないと最上が何度か諭したが聞く耳持たない。

「卵焼き一個くらいどうってことないって。」

「ハンバーグと鳥のつくねの交換ならいいですよ。」

と子供のような口答えをしては、「ねー」と克也を半ば無理やり同意させていた。この点に限らず、学生の中では一番年長のはずの赤桐が最もよく我儘な子供の実例を克也に示していたと言える。赤桐の遠慮がなくなるにつれ、克也は好きなおかずを守るにはそれら

を早く食べねばならないという大家族の鉄則を身をもって学んだ。

針生は克也の常識の無さを真剣に憂えて、ときどき新聞を読ませた。そもそも新聞を読んだこともなければ、ニュースをみたこともないという克也に突然丸ごと新聞を与えてもどうかと、わざわざ内容を自ら吟味し、良さそうなものを選んで与えていた。読み終わつた克也に感想を言わせて正しく理解したか確認するのも忘れない。大学生らしい常識レベルに達するまでの道のりは遠いが、救いはとにかく素直で一度聞いたことは忘れないことだ。

大木は雑用のうち、克也にも出来そうなものと、猿君の方が得意そうなものを適当に寄り分けて二人をお願いしていた。おかげで去年までよりだいぶ自分の時間が取れている。克也は些細なことでも質問すると答えてくれる大木を素直に尊敬したのでペーパー歴が長い大木はそれも喜んでいた。例えば、克也は電話がとれなかった。克也は自分の携帯電話を持っていたが、家の据え置き電話は見るだけで使ったことが無かった。研究室では黒峰の机の上に研究室直通電話がある。基本的に黒峰が応対するが、彼女の不在時には別の誰かがとらねばならない。それを説明すると電話の使い方から質問されたのだ。常識不足はいつものこととは言え、面喰いながら大木が説明すると克也は新しいおもちゃのように電話を面白がった。このまま研究室の電話で遊ばれてはかなわないので自宅の電話を使用することをさりげなく勧めてみると素直に同意してくれた。これで自分が黒峰に怒られることはない和大木はそつと溜息をついた。雑用は減っても気苦労はあまり変わっていない。

そんなわけで彼は砂が水を吸収するより早く、榊原教授の消えるトイレットペーパーが消えるより早く、先輩達の教えを覚えていった。こうした人生の先輩の訓示を受ける克也の横には常に猿君の姿があり、克也が困るとそつと克也を自分の背中に隠して庇ってくれ

た。特に克也へ向かう力加減を間違いがちな赤桐や犬丸相手には有効な防御壁であった。

運動会をしよう - 1

5月も終わりごろの月曜に赤桐が研究室に紅葉饅頭を持ってきた。週末に地元の友人の結婚式があったのだ。いつもなら研究室に帰省の土産など持ってこないのだが、今年は可愛い弟分の克也がいる。重役出勤で研究室に現れた赤桐は差し入れがあった際の通例どおり、紅葉饅頭を黒峰に渡した。

目ざとく饅頭を見つけた猿君が立ちあがる。黒峰からの配給を待てないほど腹が減っていたようだ。

「赤桐さん、広島なんですか。」

猿君が声をかけると、黒峰から鋭い視線が飛んできた。慌てて言い直す。

「赤桐さん、ご実家は広島なんですか。」

これは今年に入ってから新しく加わった不文律である。常識の欠落した克也が聞いても誤解しないように、正確な日本語を話すこと、主語述語目的語のいずれもなるべく省略しないこと。誰が言い出したわけではないが、克也の質問攻めを回避するための各々の自衛策として定着しつつあった。

「そつだよ。」

赤桐が長い髪を括り上げながら返事をする。以前、赤桐という名前で赤毛なのは関係があるのかと克也に質問されて以来、限りなく真っ赤に近かった髪の色は赤みがかかった茶色程度に落ち着いてきている。何か思うところあったらしい。

「俺は高校の修学旅行以来縁がないです。紅葉饅頭もそれ以来で……
いただきます。」

黒峰に饅頭を手渡され、とうとう食物を手にした喜びのために一部文末は省略された。この程度の省略は許される。

「克也は広島に行ったことあるか」

一口で饅頭を食べ終わった猿君が問いかけると、克也はPCの画面から顔を上げてから首を横に振った。

「ないよ。」

克也は猿君には敬語を使わない。これは猿君が自分達は同期なのだから敬語はおかしいと説得した結果そうなった。

「普通、関東の学校で修学旅行と言えば奈良、京都、広島あたりじゃないのか。ああ、高校も中学も飛び級したのか。修学旅行か林間学校どっちかいけなくなったりしたのか？」

克也はまた首を振った。

「僕は基本的に学校行事に参加しなかったから、校外学習に参加したことはないよ。」

「ええー。」

大きい声を上げたのは猿君ではなく犬丸だ。いつの間にか紅葉饅頭を三つも机の上に積み上げ、更に別の一個を手に行っている。

「学校行事に参加しないって、運動会も文化祭も何にも出ないってこと？」

今度は克也の頭は縦方向に振られた。

「そうです。入学式と卒業式、始業式、終業式は参加しますが、それ以外は参加したことはないです。」

「じゃあさ、じゃあさあ。皆が体育祭の練習してる時とか、どうすんの？」

「補講授業を行ってもらっていました。」

一拍おいて犬丸と猿君と赤桐と大木から一斉にため息が漏れた。

普通の人の1.5倍の速度で進級したのだから、言われてみれば当然の措置のようだが、窓の外から歓声上がる中、一人ぼっちで補講を受けている克也を想像すると余りに不憫だった。

「克也、授業は全部出た？音楽とか体育とかも全部他の子と一緒に受けたの？」

赤桐が聞くと、克也は小首を傾げて目を瞬かせた。まだ少年だから許される可愛い仕草だ。

「出るように指示されたものには出席しましたが、それが他の生徒と同じだったかは分かりません。選択授業でクラスの編成が変わることもありましたし。」

実際のところ、克也は他の生徒や学生達に興味が無かった。他の人と自分のしていることが同じかどうかにも興味が無い。そう言う意味では友達ができない要因は克也にもあると言える。

「なるほどね。でも一応体育とかはあったんだ。」

念を押すと、克也は頷いた。

「はい。」

一同ちよつとほつとする。

「よし。」

赤桐は開きかけていた資料を勢いよく閉じると、一同を見渡して宣言した。

「天気もいいことだし、今日の午後に榊原研の運動会をしよう。」

「いいですね。」

大木と猿君が即賛成した。普段なら運動を絶対嫌がる犬丸も4つも紅葉饅頭を食べたことをネタに赤桐に押し切られて参加が決定した。克也は話の流れに着いて行けていなかったが、やはり参加で押し切られた。

「黒峰さん、針生と最上さんは午後捕まりそう？」

赤桐が確認すると、黒峰は各自の予定の入った画面をみて「14時以降なら」と回答した。

「榊原先生は参加されないのでですか？」

克也は不思議そうに質問する。

「うーん、御老体だからな。」

猿君が困ったような声を出した。榊原教授の実年齢は定かでは無いが60歳を超えていることは確かで、下手すると70代かもしれない。20代の若者相手に交じるのは厳しく思われた。

「いや、呼ぼう、呼ぼう。種目に合気道でも入れれば十分活躍でき

るよ。黒峰さん、教授の予定は？」

赤桐が再度問いかける。

「14時に針生さんとの実験が終わったあと1時間程度なら空いています。」

「つまり針生と教授を14時に是が非でも実験室から引つ張り出せばいいってことね。」

赤桐はご機嫌そうに時計を確認すると、じゃあ、みんな動ける格好用意しときなさいよ、とさつき入ってきたばかりの扉からさっさと出て行った。元々お祭り大好き、お祭り野郎の赤桐はこういう企画のためとなると労を厭わない。

5分もしないうちに、榊原研究室のメンバーあてのメールリストに運動会のお知らせが入った。差出人は黒峰だ。無反応だった割に楽しみにしているのかもしれない。

「猿君」

克也は黒峰経由で配給された紅葉饅頭というものを初めて食べて猿君に声をかけた。

「紅葉饅頭っておいしいね。」

「そうだな。俺も好きだ。」

猿君が頷くと、克也の前と後ろ両方から犬丸と大木も「俺も！」と声をあげた。みんな大好き紅葉饅頭。黒峰が早々に確保しなければ針生、最上、榊原教授の取り分はなくなっていただろう。

「克也君、あとで赤桐さんにも美味しかったとってあげてくださいね。」

黒峰が声をかけると、克也は笑顔で頷いた。

運動会をしよう - 2

その日の午前中、最上は自身もなんの分科会だか忘れてしまった会議に参加していた。本題の議題が終了すると、最上は大きく後ろに伸びをして天気もいいことだし外の喫煙所にタバコを吸いに行こうかと窓を眺めた。すぐ脇では、他の研究室所属の助教や準教授達が何やら話している。声高なのは隣で伸びている最上に聞かせるためだ。

「秘書を雇わなきゃならないなんて、榊原教授の苦勞も推して知るべしですなあ。」

普通の研究室には秘書などというものは存在しない。教授を頂点とする研究室ヒエラルキーの中で雑用は格下の研究者陣の仕事になっている。榊原研究室には万年ドクターコースの学生その他、フアカルティーは榊原教授と最上しかない。当然、この場合雑用は最上の仕事になる。ところが、榊原研究室には例外的に秘書として黒峰が雇われており榊原教授個人のスケジュール管理から、研究室全体のスケジュール、設備管理までを行っている。下働きに追われる他の準教授や助教陣にすれば、羨ましい限りであり嫌味も一つも言いたくなる。一つどころか二つも三つも言いたくなる。よって、先ほどの発言は、榊原研究室唯一の下っ端教職者である最上が無能だから、秘書などというものが必要になるんだ、と当てつけていたわけである。

最上に言わせれば、東東大学において榊原教授と同じ程度に予定の立てこむ人気教授など片手で足りるほどしかおらず、そういう研究室は揃って大所帯で雑用を分担できるだけの人数が揃っている。最上一人で榊原教授のスケジュール管理を引き受けたら、最上の研究対象は榊原教授の生態になってしまふのは必定だ。そういう人物に教職者としての給与を払う気が学校側にあるのだとしたら、それ

については学費を治める学生とその保護者に告発した方が良いと思
っている。そんなことも分からんのか、と最上は憐みを込めて嫌味
を言いあう同僚たちを眺めやった。しかし一つずつ説教して回って
も何も得るところはないので無言で立ち去る。

最上にはとにかく風当たりが強い。いつでも暴風雨の様相を呈し
ている。

もちろんそれには理由がある。通常この大学において教職者とし
て給料をもらって働ける人間は、東東大学の卒業生や学校関係者が
自らと同等かそれ以上の学歴を持っていると判定したものだ。だ
それゆえに皆、輝かしい経歴の持ち主ばかりである。しかし最上は
どこの大学かも分からないような三流大学を出て、有名で実績もあ
るが金に任せて有能な研究者を引き抜くことで知られる大学で研究
を続けていたという御世辞にも輝いてはいない経歴の持ち主である。
更に賞罰の欄には学会での受賞歴の他、若い頃の補導歴もずらりと
並んでいる。

なぜそのような人物が誉れ高い最高学府に籍を置くに至ったかと
いえば、榊原教授の独断に他ならない。誰にも文句を言わせぬ実績、
学生を集める集客力、メディアへの露出による学校の知名度向上へ
の貢献、なにより積み上げた高額の手当。これらの力を総動員して
最上の席を作ってしまったのである。そんなわけで初めて来たとき
から、最上は歓迎されていなかったし、その後本人も受け入れられ
る努力を怠ったので、ますます浮いたまま移籍9年目を迎えている。

最上は外の喫煙所にも気の合わない教授陣を発見し、さっさと回
れ右をして研究室に戻った。そのまま定位置の換気扇の下まで行っ
てタバコに火をつけ、ネクタイをぐいつと緩めて窓に寄りかかる。
最上は何かの会議が終って帰ってくると大抵、ささくれだった精神
状態になっているので、誰も声をかけなかった。

タバコを一本吸い終わると、そのまま無言で教授室へ消えて行く。
普段であれば気分が落ち着くまで教授室で一人悪態をついて過ごす

のだが、この日は5分もせずにもた研究室へ戻ってきた。既に眉間のしわが消えて機嫌が直っている。

「おい、昼飯行くか。午後は運動会なんだから？」

食ってすぐ動くお腹が痛くなるぞ、と最後は克也に向けて付け加えると返事も待たずにさっさと研究室を出て行く。それもそうだと皆それぞれに後追って研究室を出た。

この日、榊原研究室のタイムスケジュールは完全に運動会を中心に回っていた。

運動会をしよう - 3

赤桐が戻ってきたのは、皆が昼食を終えて午後の作業に取り掛かってしばらくしてからだった。「激安の殿堂」と書かれた大きな袋を抱えている。またタバコを吸っていた最上がそれをみて「お前は今日、実験を進める気は全くないな」とこぼしたが口元が笑っている。

「最上さん、スーツしかないの？」

赤桐はいつも通り、スーツに革靴姿の最上に眉を寄せる。

「これの他は白衣か作業用のつなぎしかねえよ。」

「せめてつなぎにすれば？」

最上はちよつと考えるように自分の服装を見下ろしたが、納得したらしく「そうだな」と返事をした。

学部生はまだ体育の授業があるので猿君と克也はジャージを研究室に常備していた。他のメンバーも予期せぬ泊まり込みはよくあることなので、なにかしらジャージを持っている。

「グラウンド確保してきた。野球のグラウンドの脇のスペース使えるから、そこに14時に集合ね。」

赤桐が宣言すると、みな作業を中断して着替えを手に手に移動し始めた。

「今日はどうして急に運動会をすることになったの？」

グラウンドまで移動しながら克也は猿君に質問する。

「天気がいいからな。」

「天気がいい日はこれまでもあったけど、今日になったのはなぜ？」

「思いついたからだな。」

「運動会は思いついたら行うものなの？」

猿君と克也の問答の後ろで聞いていた犬丸が口を挟む。

「楽しそうならやってみようって思うのが若者なの。サボれるならサボろうとするのが学生なの。ちゃんとした理由なんてあるわけないじゃない。ま、僕は運動会にいい思い出なんかないけどね。」

「赤桐さんにとって運動会は楽しいのですか？犬丸さんは楽しくないのでしょうか？」

「楽しい人も、楽しくない人もいるよ。ニンジンが好きな人と嫌いな人がいるのと同じ。克也が楽しいかどうかは、今日やってみれば分かるでしょ。」

ここまでの問答で克也には研究室内で、運動会が楽しそうだと考えた人が多かったので本日決行されることになったらしいということが理解された。

「ちゃんとした理由がなくても運動会をすることはよくありますか。」

更に質問する。赤桐が思いつくたびに晴天なら運動会をするのだろうか。それでは研究がおろそかになりすぎるのではないかと克也は危惧する。

「初めてだよ。運動会自体が、たぶん榊原研始まって以来初めて。克也がさらに質問しようとしたが、途中から合流してきた最上も口を挟んできた。

「まあ、とにかくやってみる。人生何事も経験だ。やってみて楽しかったら赤桐が突然こんなこと言い出したのも少しは分かるだろ。言っておくが、俺も榊原教授も晴れる度に運動会なんて真似はさせん。できるときにやっておけ。」

13時58分、榊原教授と針生が実験を行っていた部屋に赤桐と黒峰が押し込んできた。二人とも実験に没頭しており、当然運動会のお知らせは読んでいない。1分で事情を説明し、1分で実験室を退出させる。

針生と榊原教授を連れて二人がグラウンドへ向かうと既に他のメンバーは着替えて準備体操など始めていた。

「よし、はじめるぞー！」

赤桐は威勢よく集合をかける。集まってきたメンバーに黒峰がいつものタイムテーブルを読むように説明する。

「榊原研究室記念すべき第一回運動会の最初の種目は、徒競争です。針生さんは順番が来るまでに体をほぐしておいてください。榊原教授はこの種目不参加でよろしいですよね。」

小さなカラーコーンを買い込んできた赤桐の指示のもと大木と猿君がコースを作成する。二人ひと組のかけっこだ。

スタート地点にピストルをもった赤桐、ゴールにストップウォッチを持った黒峰が立つ。女性陣は参加しないらしい。

「最初はじゃあ、大木と犬丸。」

指名されて大木と犬丸がスタート地点に立つ。

「位置について、よいい」

パーンという音と共に大木が駆け出し、一拍遅れて犬丸がスタートする。50Mにも満たない程度の距離だが、あっという間に差が開いて大木が悠々とゴールする。数秒遅れて、それでも最後まで必死で走っていた犬丸が転がるようにゴールする。そんな犬丸のゴールを待とうともせず、何かをガサガサと探していた大木は紙テープを持って帰ってきた。

「赤桐さん、これ使っていいですか？」

叫ぶと、「いいよー」と返事が返ってくる。黒峰に一方を持ってもらってゴールテープをはる。

「やっぱり、これがないと運動会って気がしないですよね。」

大木は満足げにゴールテープを見ると、手を振って赤桐に準備OKの合図を送る。

「次は、克也と猿君」

克也は少し緊張した面持ちでスタート位置に着く。猿君の表情は毛に覆われて見えない。

「位置について、よい」

どちらも立ったままちよつと片足を引いて構える。

パーン。二人が駆け出すと最初はせつていたものの途中からじわじわと猿君が遅れて行く。巨体がずしんずしんと芝生に沈み込む度にペースが遅れて行った。

克也がゴールテープをきる。2歩差で猿君がゴールする。

克也は目を輝かせて振り返り、膝に手について息を整えている猿君に向かって言う。

「僕、ゴールテープを切ったの初めてだよ。なんだか気持ちいいものだね。」

猿君はゆっくり顔を上げると、「そうか」とちよつと目をほころばせた。最近、猿君の目の表情をだいぶ判別できるようになった克也には、それが笑顔だと分かった。

「俺は駆け足で負けたのは久しぶりだ。克也は足が速いな。」

猿君は克也の頭をぐりぐりとなでると、まだへたっている犬丸の脇へ向かった。

「次！針生と最上さん」

赤桐は最後のペアを指名する。薄汚れたつなぎ姿の最上の足元は鉄板入りの重たい作業靴である。着替える暇がなかったもののシーズンにスニーカーの針生の方が有利に見えた。そもそも年齢からしても針生の方がだいぶ若い。ところが、走り出すと明らかかなことに最上の方が速かった。最後はちよつとペースを落としていたのにも関わらず圧勝した。

黒峰が全員のタイムを読み上げると、ぶつちぎりの総合1位が最上であることが判明した。克也は総合4位だった。

「運動会で一番怖いのが徒競争だよ。逃げようも隠れようもないし、誤魔化しようもないし。」

当然最下位だった犬丸がブツブツ文句を言っている間に、黒峰が次の種目を発表した。

運動会をしよう・3 (後書き)

ちなみに2位以下は、大木、針生、克也、猿君、犬丸の順でした。

運動会をしよう - 4

第二種目は何故か柔道だった。

「柔道って運動会の種目だったっけ？」

王道の運動会の競技も嫌いだが、柔道も決して好きではない犬丸はまた嫌そうな顔をしたが、次のセリフに黙らざるを得なかった。

「柔道には榊原教授も参加なさいます。」

要は、教授が参加可能な競技をいたら柔道になってしまったということなのだ。いつのまに着替えたのか、白衣姿だった教授は作務衣姿で登場した。やる気満々である。

「柔道はトーナメント方式で行きます。くじを引いてください。」

榊原教授はシード枠確定なので、若者たちがあみだくじを引く。

1 回戦は克也と犬丸、2 回戦は針生と猿君、3 回戦は最上と大木に決まった。

「克也は柔道やったことあるか？」

猿君が声をかけると、克也は頷いた。

「高校の授業で何度かやったことがある。」

「そうか、受身は覚えてるか？」

「うん。」

猿君は、なら大丈夫だなと言って克也を送り出した。足元は柔らかい芝生なのでよっぽど酷い落ち方をしなければ怪我はしないだろう。この競技に限っては審判を榊原教授が行う。

「始め！」

いつもより遥かに張りのある声で試合を開始する。犬丸が克也のジャージの襟をつかむと、克也は高校時代の体育教師の説明を思い出しながら腕を払い、逆に犬丸のだれたTシャツの襟をつかむ。

「おお、いいぞ！がんばれ、克也！」

応援は克也一色である。

しばらく掴みあいが続いたが、子供のころに家で格闘技を散々仕込まれた犬丸がやや優勢になってきた。腐っても太つても極道の息子である。取っ組み合いの喧嘩もしたことのない少年に負けるわけにはいかない。ぜいぜい言いながら大外刈りを仕掛けると、克也はあっけなく芝生に倒れた。

「一本！」

スピード感のない試合だったが、二人とも赤い顔をしてふうふう言って礼をした。

針生と猿君が試合は、あっという間に猿君が一本勝ちした。よそ見していた犬丸と克也は完全に見逃した。試合をしていた針生本人ですら、何が起きたのか把握しきれない内に芝に寝転んでいたのだから見逃しも仕方なかったかもしれない。

第3試合は最上と大木である。始まってしばらくは睨みあうばかりで両者手が出なかったが、最上が大きく一步踏み込むと一気動き出した。投げの打ち合いかわし合いの末、大木が押さえこみにかかると、最上がひっくり返す。これぞ、柔道の試合という緊迫感に克也は釘づけになる。

「へえー、二人とも柔道やってたことあるんだねえ。ていうか有段？黒帯じゃない？」

犬丸は汗を拭き拭き二人を眺めている。体だけでなく目も肥えている。最上と大木が、相当に高いレベルで試合をしていることは分かった。

「榊原研究室に柔道有段者が3人もいるなんて、みんな知らないだらうねえ。」

「3人？もう一人は誰ですか？」

横で見入っていた克也が質問すると、犬丸は目で審判をしている榊原教授を示した。

「当然、榊原教授だよ。あの人、下手したら学校一強いよ。居合道、合気道、空手、柔道なんでもござれだよ。」

克也は元々丸い目を更に丸くした。あの仙人みたいなおじいさん然とした榊原教授が学校一強い武道家だとは夢にも思わなかった。

そうこうしているうちに大木が辛くも勝利を収めた。最上の髪が長い試合のおかげですっかり乱れている。面倒くさそうに髪をかきあげて大木を見やると「あと10歳若ければ俺が勝ってた」と負け惜しみを言う。

「先生がタバコ吸ってなければ、今でも危なかったですよ」

大木は朗らかだ。

2回戦は犬丸と猿君の試合から始まった。犬丸は先ほどの試合で全力を出し切って若布か昆布みたいになっていたので、またあつという間に猿君が勝った。この試合がさつさと終ってしまったおかげで、最上との長丁場から回復する時間が無かった大木と元気いっばいの榊原教授の試合もあつさり決着がついた。

決勝戦は猿君対榊原教授である。

二人が向かい合うと、巨体のゴリアテと中国の仙人の試合のようである。猿君は小さすぎる相手に手を伸ばすのを躊躇った。力任せに放りだしたら骨が折れてしまいそうだ。老人の骨折は寝たきりの原因になることも多く大変よろしくない。一方、榊原教授は殺しても死ななそうな猿君相手なので遠慮会釈なく投げをかました。小さな仙人に巨大なゴリアテが放り出される。

ずしん、と重い音がしてしばらくしてから「一本」と最上の声がかかった。克也が手を叩いて歓声をあげる。克也の知りうる中で一番大きな人間をあんなに小さな老人が投げてしまうなんて、克也の榊原教授への尊敬の念は一気に膨らんだ。柔道の部、優勝は榊原教授である。次の会議の予定が詰まっていたため、試合後の礼をすると思気揚々と校舎へ戻って行った。

開始早々フアカルティ一陣が二種目制覇するという大人気ない活躍をしたことが影響したのか、第三種目は勝敗のつかない組体操となった。しかし「このメンツでピラミッドとか無理でしょ。」と犬丸が断固拒否し、結局は猿君が克也を担いだり、放り投げて遊んだりして終了した。

お父さんに高い高いをしてもらった記憶もなく、大きな大人に体を張って遊んでもらったことのない克也には体を振りまわされるのはちょっと緊張する体験だった。しかし慣れてしまえば体や足が宙に浮く感覚が楽しくなってきた。本当に子供のようにケラケラと笑いだした。一同はほのぼのと縮尺のおかしい親子ザルの戯れる図を眺めて、しばし心を癒した。

運動会をしよう・4（後書き）

意外と皆腕っ節が強いです。

運動会をしよう - 5

続いて、在り合わせの道具をならべて障害物競走が始まった。

今度は全員横一列に並んで一斉にスタートである。

最初の障害フラフープくぐりは猿君が大いに苦戦した他は足の速い順に順当に通過していく。次の飛び箱では最後尾で走っていた犬丸が脱落。テニス用のネットを並べたネットくぐりでは、克也の小柄な体格が活かされ、あつという間に前にいた最上、大木、針生を抜き去った。克也はそのまま最後の障害、ハードルくぐりもするりと通過し、堂々の一位でゴールした。追いつがっていた大木がハードルに肩を強打したのを見てペースをぐっと落としていた最上と針生は克也がゴールしたところで走るのを止めてしまったし、猿君はフラフープに絡まったまま、犬丸は飛び箱に着席してしまったまま、ハードルに激突してのたうち回っていた大木は転がったまま、やはりそれ以上走らなかったので2位以下の順位は不明となった。

最後に赤桐がどこからか綱引きの綱を引っ張り出してきた。

「じゃあ、克也チームは猿君と針生さん、最上先生チームは犬丸と大木ね。」

適当に二組に分けられて綱を握る。

「いいか、克也。綱引きってのはな、こう両手で綱を握って腰を落としてだな、体を後ろに倒して足を踏ん張って目一杯綱を引っ張るんだ。」

綱引き初心者の克也に猿君が要領を説明すると、克也は神妙に頷いた。

「さあ、準備はいい？よし、はつけよい、残った！」

赤桐の掛け声は完全に間違っているが構わず綱引きが開始される。

一般的に綱引きとは、猿君の言う通り体を大きく倒して足を踏ん張り、引っ張り合う競技のはずだが、開始後すぐに最上チームは全

員前のめりになってしまった。足を踏ん張る暇もなくずると引きずられる。

「ストップ！ストップ、おしまい！克也チームの勝ち！」

ぞっとするほどの圧勝である。猿君はきつねにつままれたようになっていた克也を放り投げて喜びを表現した。一方、顔から引きずられんばかりに引かれた最上が座り込んだまま声を上げる。

「ちよつと待て。そつちは克也がいるつてのに、この大差はどういうことだ。」

同じくへたり込んでいた大木もじつとりと猿君を見上げる。

「この勝負は克也チームの勝ちでいいけど、番外編で力比べをしましようよ。」

引きずられそうになった時点で綱から手を離してしまっていた犬丸が遠くで「えー」と抗議の声をあげたが、同時「いいね」と叫んだ赤桐の声で打ち消された。

明らかにラスボスの気配を漂わせている猿君を後回しにして、克也対犬丸から対戦を始めた。

「はい、はっけよーい、残った！」

相変わらず、掛け声は間違っているが引き続き誰もそれは指摘しない。

第一組の対戦はかろうじて大人の体面をたもって犬丸が勝利した。腕力と言うよりも、今日が初綱引きという克也に比べて、20年ぶりとはいってもこの競技への慣れがあったのが良かったのかもしれない。

次の組で針生と犬丸が対戦し、これも意外といい勝負になった。しかし、2連戦になった犬丸の握力がもたずに針生が辛勝した。

「これ、連戦になる方が不利に決まってるじゃないですか。」

まるまるとした頬をさらに膨らませて犬丸が文句を言ったが、赤桐の「勝ち抜き戦ってそういうもんじゃない？」という言葉であった。さりー蹴された。

しかし、犬丸の指摘が正しいことを証明するように針生対大木では、大木が、大木対最上では最上が、最上対猿君では猿君が勝利した。

「なんとなく納得いかないな。」

大木は腕組みをして、猿君をしばらく見つめた後で「じゃあ」とその他のメンバーを振り返った。

「念のため、猿君対みんなってどういうのやってみましようか。」

5対1である。これなら猿君に勝てるかもしれない。大木はその可能性は少くないと思った。

「なんか結果、見えてる気がするけどー？」

「とりあえずやってみましようよ。」

犬丸の重い腰を上げさせて猿君対その他みんなで綱引きを試してみる。

結果は、大木の期待を裏切って危なげなく猿君が勝利した。決して本気で引いているようには見えないのにも関わらず、相変わらず全員を引きずりまわさんばかりの勢いであった。

「この太い腕は伊達じゃないわけね。」

力比べに負けることがよほど悔しいのか、大木は非常に残念そうに猿君の棍棒のような二の腕を叩いたが、さすがにもう打つ手もなく渋々ながら最終種目、綱引きの終了に同意した。

それぞれの意外だったり、意外じゃなかったりする特技を明らかにして第一回榊原研究室運動会のプログラムは無事終了した。

運動会をしよう - 6

三々五々と更衣室に引き上げる面々の中で克也は赤桐に歩み寄りた。

「赤桐さん。運動会楽しかったです。あの、ありがとうございます。」

克也は「運動会は楽しい」と認識した。これなら、運動会について思い出したら突然やりたくなるかもしれないと納得する。やれば分かるかと最上が言っていたのは正しかった。

赤桐は「そうか、良かった。」と克也の頭を撫でた。お互いにスニーカーで並んでも赤桐の方が5cm程背が高い。

「でも、赤桐さんは参加しなくて良かったんですか？」

赤桐がやるうと言い出したのに、赤桐は黒峰と一緒に審判をするだけで一つも競技には参加していないことが疑問だった。

「いいの、いいの。私走れないし。」

克也はきよんとした。

「走ることができないんですか？」

赤桐は笑って「そうそう」と頷く。

「いやあ、若いころにやんちゃばっかりしてね。ちょっと事故って怪我したら膝を悪くしちゃってさ。だから飛んだり跳ねたり走ったりすると痛むからさ、走れないわけ。」

「じゃあ、何で運動会をしようと思ったんですか？」

克也は良く分からなくなってしまうた。不思議そうに自分を見上げる克也の首に腕を回して赤桐は肩を組んだ。

「楽しいからだよ。楽しかったでしょ？私は克也くらいの頃に運動会に誘ってもらったのに悪いことばかりしてて出やしなかった。そうしている内に怪我をして走れなくなつて、そしたらさ、運動会やっておけば良かったなと思ったんだよね。それは自業自得っての？自分が馬鹿だったから仕方ないんだけど、克也はその楽しい運動

会に誘ってももらってなかったなんてさあ、放っておけないじゃない。やってみて欲しかったんだよ。克也にも楽しいと思ってるんじゃないの。分かる？」

赤桐は克也に分かるようになるべく丁寧に説明した。

「どうして、僕に楽しいと思わせたいんですか？」

もう一度聞き返すと、赤桐は立ち止まって克也と向かい合った。腰に手をあてて呆れたような顔をしている。

「馬鹿だなあ、そんなの好きだからに決まってるじゃん。」

二人の少し前を歩いていた犬丸と針生は急な赤桐の告白に立ち止まって振りかえった。その前にいたメンバーも全員立ち止まっている。

「皆もだよ。皆も克也が好きだから、克也と一緒に楽しい気持ちになりたくてやったんだよ。分かる？」

克也は赤桐を見つめ返し、真顔で「良く分かりません。でも、僕は楽しかったの、こういう気持ちを好きな人に持ってもらえたら嬉しいのかもしれない。」と答えた。

赤桐は苦笑いを浮かべて「正直で良し。」と克也の肩を叩いた。

「じゃあ、皆になんて言おうか？」

赤桐に問われて克也はしばし考え込んだ。

「ありがとうございます？」

赤桐を見上げて確認すると「合格」と宣言された。

「ほら、ほら。皆待ってるから。」

そう言っって肩を掴んで振りむかされると、全員が完全に向き直って赤桐と克也のやり取りを聞いていた。

「あの、ありがとうございます。楽しかったです。」

克也が慌ててそういうと、猿君がおうおうと泣きだした。横にいた大木が驚いて宥めるが一向に泣きやまない。

「そりゃ良かった。」

最上はうんうんと頷いている。

「最上先生は大人気なく若者に走り勝って嬉しいんですよ。」

犬丸が最上に茶々を入れると、最上は底意地の悪い笑顔で「悔しかったら打ち負かしに來い」と言い返した。

「克也、ありがともいいけどな、友達と遊んで楽しかったんだったら、楽しかったなって言うだけでいいんだぞ。お前だけが遊んでもらってるんじゃないんだから。な。」

針生はわざわざ克也の前に戻って来てしゃがみこんで目線を合わせてそう諭した。真剣な表情で克也が頷くと「分かっているなら、いい。」と立ちあがる。

「なんだよ、針生。偉そうだな。」

赤桐が不満げに口を挟むと針生は「友人関係において、互いが対等だというのは大事なことですから。」と言って背を向けて校舎へ戻り始めた。その答えを聞いた赤桐はあまりの正論に咄嗟に言い返すこともできず、その背中をしばし睨んだ。それでも悔しくて「そんな偉そうな態度で対等とか言う？」と叫んだものの、針生は立ち止らず校舎へ去って行ってしまった。

針生の背中を追うように、再び歩き出した集団の後ろを歩きながら赤桐は克也にもう一度声をかけた。

「克也、当たり前だったことが急に出来なくなっちゃうことってあるんだよ。だから出来るときにやりたいことをやっておかないと後悔するから。やりたいことたくさん考えな。折角、うちの研究室に來たんだからこれから一緒に色々やってみようよ。」

克也は頷いた。やってみないと分からないということを深く学んだ克也がもう一度赤桐にお礼を言うと、「もういいって」と照れたように頭を抱え込まれて髪をかきまわされた。

更衣室の入り口で別れるときに、慌てて赤桐を呼びとめた。

「あと、紅葉饅頭。美味しかったです。ごちそうさまでした。」

赤桐は「へ？」と言った後でにこつとして「どういたしまして」「
と言つと更衣室へ入って行った。もちろん次回の帰省から必ず紅葉
饅頭を買って帰ろうと心に決めていた。

運動会をしよう - 7

その後、着替えて研究室に戻ったメンバーは全くやる気が起きず、打ち上げと称してジュースとお菓子を買い込んだ。大木の机の上に大いに食べ物を広げてつまみあう。

「大木さんは、運動が得意なんですね。」

今日の運動会を見ての克也の感想だ。柔道も強かったし、障害物競走でも克也と一位を争っていた。

「特別得意ってわけじゃないんだけど、普段から運動してるからかな。スパイは体も強靱じゃないといけないだろ。ジェームズボンDMみたいにさ。でもこのところ忙しくてトレーニング減らしてたから鈍った気がする。年かな。」

大木は後半ばやきつつ、ポテトチップをつまんだ。克也はジェームズボンDとは何か聞こうと思ったが、口を開く前に目があった猿君に首を横に振られて止められた。この頃までに猿君は、大木が本気で007を目指すほどのスパイマニアであることを知っていた。興信所よりもあてになるといふ彼の調べ物は、限りなく違法な手段まで用いて実行されていることも、克也を除く榊原研究室全員の暗黙知となっている。理論に実行まで伴ってしまっている大木にスパイについて講釈を始めさせると、これまた話が長いのだ。

「年なんて克也の次に若いくせに何言ってるの。俺なんて、最後の体育の授業から何年経ってると思ってるの。」

犬丸がミニ羊羹をかじりながら反論する。

「犬丸はそもそも体育なんか出てなかったんじゃないのか。それに、そんなこと言ったら俺の方が年上だし。最上先生なんてもっと上だぞ。」

針生は昼食抜きで実験を行い、さらに運動会に引きずり出された

ので空腹だったようだ。一人だけ牛丼を抱えている。

「別に体育の授業がなかったら運動しちゃいけないわけじゃねんだから、普段から体使えよ。30過ぎるとがくつとくるぞー。ほつといたらどんだん腹が出てきてって、犬丸はもう出てるか。」

最上が嫌そうにミニ羊羹の残り紙を見る。

「30過ぎるとがくつと何がくるんですか？」

克也はポツキーをかじる手を止めて最上に質問する。

「30歳過ぎるとな、年を実感するって言うかな。急速に体の衰えが進むんだよ。そして急速に体の衰えを実感するわけだ。おお、自分で言つてて落ち込むな、これ。」

最上はアイスコーヒを紙コップに注ぎながら笑う。本当は大して気にしていないのが丸分かりである。

「な、赤桐。」

一言余計に付け加えて、赤桐の方を向くと赤桐はパピコをくわえたまま嫌そうな顔で見返した。

「人を勝手に三十路仲間にいれないですよ。」

赤桐の年齢は定かではない。年次で言うとな針生より上、最上より下であることだけは分かっている。針生が26歳なので30歳を超えていない可能性も大いにある。

「みそじ？」

克也が猿君を見上げる。分からないことがあると、とりあえず猿君を見上げて質問するという克也の行動パターンは完全に定着している。

「30代のことだ。三十に道路の路と書いて三十路だ。」

猿君はリンゴを丸かじりしながら答える。

「30代の話題を引っ張るのはやめてくれ。」

最上が両手を上げて降参のポーズをする。

「機嫌が悪くなった赤桐と一緒に実験室に籠るのは俺だ。」

「今のは自業自得ですよ、先生。」

呆れたように針生が指摘する。牛丼は綺麗に消え去り次に大木の

前のポテトチップの袋を狙っている。

「うっせえなあ。だいたい針生よ、お前が俺の年の話するのがいけねえんだよ。そんなことよりお前痩せてんだからもつと体動いていいんじゃないの。猿の巨体があれだけ動けんだからよ。」

分が悪いせいか、一段と口が悪くなつた最上がやり返す。タバコの代わりにポッキーをくわえてしゃべるので唇に溶けたチョコレートが付いている。

「瞬発力を問われる競技は苦手です。」

針生は大木からポテトチップの袋を奪い取り、中身がほぼ空なのに気が付いて大木に押し返す。

「じゃあ、なんだつたら得意なんだよ。」

「トライアスロン」

回答しながら針生は犬丸の抱えている別のポテトチップの袋を奪い取る。犬丸が恨めしげな声を上げるが見向きもしない。

「なるほど、そついやそんな感じだね」

赤桐が声を上げる。確かにマツチ棒みたいな針生の体つきはそういう持久力勝負の競技に向いていそつだ。

「トライアスロンなんてマゾの競技だよ。どうして公然わいせつ罪で皆逮捕されないのかと思つちやうね」

ポテトチップの恨み節そのままに犬丸が文句を言うと、輪の外にいた黒峰から教育的指導が入った。

「犬丸君、不適切な発言です。」

「はい」

犬丸は首をすくめるが、反省の色はない。

「マゾの競技？」

克也がまた猿君を見上げる。

「辛いことを進んでやる人達の競技ということだな。トリアスロンは分かるか、克也。マラソンと、遠泳とサイクリングを続けてやるスポーツだ。体力的にしんどいから、普通はあまりやりたくない

な？それを楽しんでやる人達をマゾと表現したんだ。」

「人が嫌がることを進んでするのは良いことじゃないの？」

克也の純粹な瞳にマゾについてどこまで説明したものか、猿君はちよつと迷う。

「人が嫌がるけど、必要なことを進んでやるのはいいことだけど、人が嫌がるけど、する必要のないことを進んでやるのがマゾの人なんだよ。」

「嫌なこと、しかも必要のないのにやるんだね。それは不思議だね。」

克也はふんふんと頷いてから、針生の方を向いた。針生は思いつきり嫌そうな顔をしていたが、克也は躊躇わない。

「針生さんはどうしてトライアスロンをするんですか？」

「好きなんだよ。」

「もつと詳しく」

悪乗りした最上が促すと、針生は苦虫を噛み潰したような顔のまま付け加えた。

「体力の限界に挑戦するのが楽しいんですよ。」

「やっぱりマゾだ」

犬丸はむふふと笑って、針生の手からポテトチップの袋を奪還した。

「体力の限界は分らないですけど、僕も自分の限界に挑戦するのは楽しいです。限界だと思っていたことが、思い込みでもつと先があるのを発見することが楽しいです。」

克也が針生の目をみつめてさういうと、針生は眼鏡の奥の細い目を大きく見開いた。

「そう。さういうことだよ。」

針生はさういうと、俄かに笑顔になった。珍しい満面の笑みである。

「今、針生さん、絶対『同志よ！』って思ったでしょう。」

犬丸がポテトチップの袋を逆さにして残りを全て飲み込んだ後で

ニヤリとしながら言う。それを聞いた克也と針生を除く全員が吹き出して、珍しい針生の笑みは幻と消えた。

運動会をしよう・7 (後書き)

体育祭や文化祭は準備と打ち上げが楽しいものです。

運動会をしよう - 8

その日、遅い時間の講義が入っていた猿君が19時頃に研究室に帰ってくると、さすがに打ち上げは終了しており、克也はレポート作成に励んでいるところだった。

「克也、遅くなつてすまん。そろそろ帰れるか。」

克也の帰宅時刻は初日に教授からお達しがあつた通りの刻限が守られている。また帰りの時間が重なる場合や、外が暗くなつてしまつた後はさりげなくだが、確実に誰かしらが駅まで一緒に帰るようにはしていた。学校から駅までは自転車なら20分、バスに乗れば10分ちよつと程度である。遅くなつた場合は、駅の近くに下宿している猿君か大木がスーパーが閉まる前に買い物をするだの、郵便局によるだのと何かしらの用事にひっかけでは自転車の後ろに克也を乗せて送っていた。たまに赤桐が早く帰る日には赤桐の車で乗り換えのある駅まで乗せて行くこともあつたし、犬丸と帰りが重なる黒塗りに運転手つきの物々しい車に同乗させてもらうこともあつた。針生は学校から見で駅と反対方向に住んでいるため帰りが重なることが最も少なかったが、たまに本屋に行くとか、他大学へいくとかいう用事があると一緒にバスに乗つていった。針生の自転車は競技用で二人乗りには向いていないからだ。

この日は猿君の授業が終つたら、二人で駅前の本屋に寄つてから帰る約束になつていた。克也は扉の方を振り返ると、もう少しだけ待つて、と言つてこれまでより早いペースでキーを打ち始めた。

「待つのはいいけど、本屋が閉まる前に着きたいからあと30分以内に出るからな。」

本屋の閉店時間が20時までで研究室を出るいい口実になるので、猿君と大木は年中本屋による用事があることになつている。

「うん」

そこから克也は猛然と作業をしていたが、ぴつたり7時25分に

作業を止めると7時半少し前に研究室を出る準備を終えた。猿君はその間、不在中に自分の机の上にお供えのように積み上げられていた打ち上げのお菓子の残りをぱくついて待っていた。

「では、お先に失礼します。」

結局、克也と猿君が連れだって研究室を出たのはちょうど7時半だった。そのまま校舎を出て、自転車置き場に向かい、猿君のボロボロの自転車の後部座席に克也が乗って駅へと走り出す。

自転車で誰かの後ろに乗せてもらうことも克也にとっては新鮮な体験だった。小さい頃を一緒に過ごした祖父は、自転車に乗っているとどこも自分見たことがなかったし、山城家にきたときにはもう10歳で大人の自転車の後ろに乗せてもらう機会はなかったのだ。

克也は帰り道に自転車に乗せてもらうことを楽しんでた。大木の自転車には後部座席がないので立って乗る。そうすると大木の頭越しに随分と高いところから道路を見渡すことができた。一方、猿君の自転車は後部に固いながらも座席があるので座って乗ることができる。またがって座ると猿君の大きな背中しかみえないので、克也はいつも横座りしていた。克也は良くこの時間に、不思議に思ったのに誰にも聞けなかったことを猿君に質問した。猿君は何でも嫌がらずに納得するまで説明してくれた。克也の常識レベルの飛躍的向上の裏にはこうした猿君の日々の努力があるのだ。

その日は留守番電話について質問していた。

「うちの電話に留守番というボタンがあったんだけど、あれって携帯電話の留守録と同じだよな？」

ものを覚える順序が現代っ子だなあ、と思いつつ猿君は「そうだな」と返事をした。

「そうしたら、わからないのだけど、うちの留守番電話にずっと知らない男の人から伝言が入っているんだよ。間違い電話ってことをかけてきた人に教えることってできないのかな。『お手紙読んでい

ただけましたか。彼らに騙されないうでください。お子さんのためにはもっと良い環境を用意して差し上げた方がよろしいのではないですか。よくお考えください。今ならまだ間に合います。』だって。うちには子供はいないのに何日もうちなんかにかけてきて、本当にまだ間にあうのかな。』

猿君は自転車の運転を誤りそうになった。克也が子供かどうかは意見の別れるところだが、間違い電話にしては間抜けな間違いだし、そうでないなら何だか嫌な内容だ。

「ずっとか？」

「うん、ずっと。電話の使い方教えてもらってから毎日聞いているんだけどずっと同じような内容で、同じ人から。間違いですよって教えてあげたいけど、僕は家の電話使ったらいけないって言われているし。」

猿君は変質者かもしれないと危惧した。毎日ずっと変態電話をかけてくるとは気長だ。それを毎日克也が聞いているのも異常な気がした。家には保護者がいるのだから当然彼らも知っているだろう。有名人税としてはちょっと高いと猿君は克也一家を不憫に思う。「あまりおかしなことを言っているようなら警察に通報するとか、電話番号変えるとかした方がいいぞ。家の人と相談してみろ。」

そうだねえ、と克也は珍しく言葉を濁した。留守番電話を聞いて遊んでいるのはまだ家族には内緒にしていた。昔電話に触ってはいけないと言い渡されたのを気にしているのだ。乙女に相談したら電話遊びがばれてしまう。幼い頃の言いつけを素直に気にするこれまで通りの克也と、犬丸や赤桐に唆されて楽しいことを我慢できなくなってきたいたずらっこの克也がせめぎ合っている。

駅のロータリー付近までやってくると、猿君は自転車を止めて本屋へ向かった。今日のお目当ては最上に依頼されていた雑誌である。猿君は無言でモーター雑誌の棚へ向かい、指定の雑誌をいくつか集める。この内容なら研究用ではなくて趣味だろう。一説によると最

上と赤桐の共同研究は二人のモーター狂いが高じて自費でできないような改造を実現するために研究課題にねじこんだのだという話がある。

克也は猿君の後ろをついてきて普段は見向きもしない雑誌の棚を興味深そうに眺めている。

「克也は何かみたいものはあるか」

必要なものを全て揃えると、猿君は克也を振りかえった。

「今日はないよ。」

「そうか、付き合わせて悪かったな。」

猿君がそういうと、克也はふるふると首を横に振った。

「他の人と一緒にお店に入ると、普段なら見ないようなものを見るから面白いよ。」

家族以外の誰かと一緒にお買い物というもの、克也にとっては今年になって初めて体験したことだった。今年になってから、克也の周りは新しいことだらけだ。

「そうか。」

猿君は、頷くと会計に歩き出した。駅の改札まで見送るのがすっかり定着しており克也も無言で後についてきた。

その後、猿君は改札をくぐる克也を見送り、自分の自転車まで戻ると黒峰に電話をいれた。

「猿渡です。今改札を通りました。」

「分かりました。お疲れさまでした。」

黒峰は電話を切ると、すぐにメールを打つ。内容は定型化されているので打つと言っても送信ボタンを押すだけだ。そうして山城乙女の携帯電話に克也が最寄り駅を出た旨のメールが送られる。常々針生が過保護過ぎるとこぼすのも納得の構いっぷりだ。

「どうして克也の家族は送り迎えをしないんですか。」

4月の初めごろに針生が榊原教授にした質問である。学校の最寄

駅から克也の家まで1時間程度かかる上に乗り継ぎもある。中途半端に帰宅時間に制限をつけるよりも、いっそ送り迎えをした方が完全に決まっている。

「去年までは、実際そうしとった。ただ、江藤君も普通に進学しておれば今年から高校生だったはずだ。多少距離のある通学も一人でできるようになっていい頃だろう？だが、この春まで江藤君は一人で電車に乗ったことも無かったと聞いてね。御家族と相談して試しに送迎をやめることにしたのだよ。それでも暗くなった場合はなるべく誰かと一緒に帰るようにと、これは江藤君自身にも御家族から伝えられているはずだよ。」

「駅まで送つても、克也の乗換駅は新宿ですよ。駅構内とはいえ安全なルートってわけじゃないじゃないですか。」

針生としては納得いかなかった。克也に大人になるために普通の子供が体験するようなことをさせるべきだ、という原則は理解できるが今の暗くなったら送るという方法で安全が確保できているとは思えなかった。

「駅の中くらい選択肢の少ないところなら、多少常識がかけても帰宅できると思うがね。」

榊原教授は、実際のところ、と付け加える。教授は今年から全く送迎は無しにしたらどうかと提案したのだが、受け入れられず長い交渉の末にこのような結果に落ち着いたということだった。

針生は結局不満げだったが、それは自分が克也を送って行くのが面倒だからではなく、中途半端な保護の仕方が気になるという潔癖症的な彼の一面からくる不満だったので榊原教授もそこまで解決しようとはしなかった。

克也自身は自分を送るために学生達が都合を合せているという意識はなく、遅くなってしまったと思っていると大抵声をかけてもらえて助かる程度の認識しかしていなかった。そういう点において克也は普通ならどうするか、という常識のベースに不足があり、結果

的に実際の出来事を正しく判断する能力に欠ける部分があると言わざるを得ない。

運動会をしよう - 9

黒峰からの連絡を受けた克也の里親、山城乙女は、そのときまだ会社で作業中だった。小一時間で克也が駅に着くが自分が迎えに行くのは無理そうだ。すぐに電話をして家政婦の吉野に迎えを依頼した。吉野は山城家の家政婦として働き出してすでに10年以上たっている家族のような存在である。克也にとっては和男と乙女が父、母であるとすれば吉野は叔母の感覚だった。

克也が最寄りの比較的小さな駅の改札を通って出口へ向かうと、吉野が待っていた。明るい色のエプロン姿で、手にはネギの突き出た袋を提げている。買物物がたら迎えに来たようだった。

「克ちゃん、おかえりなさい。」

「ただいま。お迎えありがとう。」

去年まで学校までの送迎を行っていたのも吉野だ。もう何千回とお迎えにきているが一度も欠かさず、克也は必ずお礼を言う。最初にお迎えに来てもらったときに乙女に教えてもらったことを律儀に守っているのだ。吉野は笑顔でどういたしましてと答える。家に向かつて歩きながら、克也は今日の運動会の話をした。吉野は大学の研究室で突然、運動会が開催されたことに驚いたようだが克也が障害物競走で一位をとった話を聞くと、「それはすごいわ」と嬉しそうに笑った。

「だって、回りのお友達は体も大きい大人のように。1位なんてすごいじゃない。それを知っていたら今日はネギト口井じゃなくてカツ丼にしたのに。あしたも丼物じゃ飽きちゃうものねえ。」

乙女は帰宅が遅く、夕食の支度は吉野に任せることが多い。その分、と張り切って弁当を用意するので克也の弁当はいつも手が込んでいて量も多い。

「お祝いのごちそうは乙女さんと相談しましょう。今日はもうすぐ帰って来られるから。」

山城家は山城夫妻、克也、住み込みの家政婦吉野の4人暮らしである。山城和男は家を開けることが多いので夕食の席には大抵乙女、克也、吉野の3人がつく。乙女の仕事がどうしても終わらない場合だけ、吉野と二人で食事をすることがあるが、それは非常に稀だった。その日も克也が配膳の支度をする吉野の後ろでレポートを読んでいると乙女が帰ってきた。吉野が年の割に大柄で骨太な西洋人体型であるのに対して、乙女は背が低く体型も少し丸みがある程度の小柄な女性だ。一応スーツを着て通勤しているが、それも学校の參觀日によく見かけるようなスーツでありバリバリのキャリアウーマンには見えない。実は億単位の年商を上げる会社社長とはとても思えぬ外見である。

「ただいまー。いいにおい。揚げだし豆腐？」

乙女は6人掛けのテーブルと大きな食器棚で埋まっているダイニングルームに入ってくると台所の吉野に声をかけた。

「おかえりなさい。外れですよ。今日は茄子です。」

乙女は、あら、茄子もいいわねえ。と嬉しそうに台所の鍋を覗き込むと振り返ってダイニングの更に奥のソファでレポートを読んでいる克也の方へやってきた。

「おかえりなさい、乙女さん」

克也は山城夫妻のことをとおじさん、乙女さんと呼ぶ。お父さん、お母さんとは誰も呼ばせようとしなかったからだ。

「ただいま。今日のニュースは何ですか。」

乙女はスーツ姿のまま克也の横に座って、訪ねる。これは一日の恒例行事で何か一つ、克也はその日の出来事を乙女に報告する。

「今日は、運動会に出たんだよ。」

当然、今日の報告内容は運動会になった。

「運動会？」

乙女は小さな目を見開いて、吉野同様驚いた顔をした。克也は少

し愉快的な気持ちになる。まさか自分が今日運動会に参加したなんて誰も思っていない。誰かがびっくりするところをみるのは愉快だった。

「乙女さん、ご飯できちゃうから先に着替えてきてくださいな。克ちゃん、運動会の話は夕飯食べながらでもいいでしょう。」

吉野が隣の部屋から声をかける。

「うん、いいよ。」

克也が頷くと、乙女は「そうね、そうしましょう」と立ちあがり自身の寝室へ入って行った。

吉野がネギトロ丼と茄子の揚げびたしとキャベツの酢のものを並べて、克也がお吸い物を並べるのを手伝い終わる頃には、イージーパンツにTシャツに着替えた乙女もダイニングに戻ってきた。吉野が最後に大きな煮物の鉢を食卓に置くと、いつも通りの夕食が始まった。最初は「あら、おいしい」と今日の献立の話をしてしたが、すぐに克也の運動会の話に戻る。

「それで、克也。運動会ってどこの運動会に参加したの。」

「研究室だよ。」

克也が今日の経緯を話すと、乙女は「まあ」と嬉しそうに目を輝かせた。

「良かったわね。今度和男さんが帰ってきたら話してあげなくちゃね。ああ、でも写真があればいいのに。克也がゴールテープを切っているところ見たかったわ。」

乙女と吉野が嬉しそうなのを見て、克也は好きな人に楽しい気持ちになってもらいたいという赤桐の言葉を実感した。

好きな人が嬉しそうにしていると自分も嬉しいものだ。

運動会をしよう・9（後書き）

おうちに帰るまでが運動会ってことで、運動会編終了です。

One for All - 1 (前書き)

元々のタイトルは「克也の恩返し」でした。

運動会の翌日、克也は午前中の講義に出席してから研究室を訪れた。ちょうど昼食時で研究室の面々も集まってきた。

克也は自分の席にカバンを下ろすと、珍しく榊原教授を含む全員が研究室いるのを確認して声を上げた。

「あの、みなさん」

大きな声ではなかったが、やいやい言いあっていた犬丸と針生も、真面目な顔で何か相談していた黒峰と榊原教授も、PCに顔をくっつけそうになって作業していた大木も、タバコの煙を目で追っていただけの最上も、積み上げられたモーター雑誌を読んでいた赤桐も、財布の小銭を数えていた猿君も一斉に克也の方に注意を向けた。

「昨日はありがとうございました。昨日、家で家族に報告したらとても喜んでくれました。僕も大事な人に楽しい気持ちになってもらえて嬉しかったので、ええと、それも運動会をした話をしたからだから、」

克也が自席の前に直立してだんだんしどろもどろになって行くのをポカンと聞いていた一同だが、まずは猿君が泣きだした。声をあげて泣く猿君を今度は大木も放っておいた。泣き続ける猿君に克也は困惑して何を話そうとしていたのか分からなくなってしまうた。

「おい、猿。克也が困ってるぞ。」

呆れたように最上が口を挟む。

「いいよ、克也。猿君はほっときな。そうやって皆に喜んでもらえたら運動会をやった甲斐があるってもんだよ。」

赤桐も呆れた様子で猿君を見やって苦笑いする。

「僕は筋肉痛だけだね。」

犬丸がじとつとした声で付け足した。克也が悲しげな表情になる。一斉に犬丸に余計なこと言いやがって、という視線が飛ぶが本人は気にしていない。

「お前は普段運動不足なだけだろう。克也、気にするな。」
針生がフオーすると、犬丸は昨日マゾの同志であることが判明したから急に克也に優しくなったのだと針生に文句をつけて、二人は克也が来る前と違う話題で、しかし同じようにやいやいやいといひだした。

「江藤君は礼儀正しいな。」

榊原教授は針生と犬丸の口論を無視してにこにこしている。

「克也」

雄たけびは収まったが、まだぐずぐずと涙をぬぐっている猿君の横で途方に暮れている克也に向けて最上が声をかけた。

「お前さ、誰かを喜ばせたいって言うんだったらちよつと頼まれてほしいことがあるんだけど。皆がきつと喜ぶ。」

その言葉に皆が何を言い出すかと注目すると、最上はビシッと猿君を指さした。

「そこの猿を洗うの、手伝ってくれ。」

猿君の涙はついに止まった。

しかし、その他の多くのメンバーから喝采が上がったので場はちつとも静かにならなかった。4月の復学時ほどではないにせよ、猿君が発するどこか熱帯地域に紛れ込んでしまったような匂いは気温が上がることに増して来ていた。猿君の入浴サイクルや入浴スタイル、衣類の交換頻度は定かではない。榊原研究室の面々は不名誉なことに、この匂いに慣れてしまい最早誰もあからさまに文句は言わなかったが、このまま梅雨を迎えるのは危険なことは明らかだった。最上は梅雨前に猿君を徹底洗浄し、さらに危険な衣類は処分するという一大使命を自らに課していたのだ。常に傍若無人であるが立場上は中間管理職ともいえる最上には、誰かがやってくれたらいいのにな、という無言のプレッシャーが一番強くかかる。いわば研究室

の小人さんの役割も担っているのだ。全く可愛げがないので感謝されないが、実はそうなのだ。

克也は、猿君を洗う手伝いに何が必要か分からなかったが、皆に必要とされている作業であることを理解した。誰かに切実に必要とされたことが無い克也にとっては心の奮い立つ事態である。ゆえに二つ返事で了解した。

「じゃあ、大木は猿を洗いあげた後の衣類を調達してくれ。あと、その土嚢だけどな、針生の言う通りそいつも変えた方が無難だな。4限までに頼む。」

最上はさつさと財布を取り出し中から数枚の紙幣を取り出すと大木に渡した。大木に拒否権はない。洗われる予定の猿君にもない。こうして克也の恩返しは猿君の洗濯と決まった。

昼になると一同連れだつて食堂に赴く。今日の克也の弁当は唐揚げ、卵焼き、ミニトマト、タコさんウィンナーなど子供向けメニューが多く目に着いた。どうも昨日の運動会と言う単語が頭にあつたらしく、乙女が子供の運動会があつたら作つてあげたかつた弁当になつたらしい。弁当の中身をみた赤桐も、運動会のお弁当みたいだと思つた。きつと克也の言う通り、家族が喜んでくれたのだろう。弁当の中身に興味が無い犬丸と針生はどうやって猿君を洗浄すれば人並みに綺麗になるか話し合つている。猿君自身は普段より遙かに無口にミートボール入りシチューをすすつている。

「猿君？」

泣きやんでからも、あまりに猿君が静かなので克也はちよつと心配していた。

「どうしたの？」

「洗われるのが嫌なんじゃないの？」

犬丸が口を挟む。

「嫌とか我儘が言えるレベルにないだろう。そんなに嫌なら自分で風呂に入ればいい。」

針生は苦々しい顔だ。鼻がいい針生は猿君の異臭被害を最も強く受けていると言える。

「昨日も今日も、克也がお礼を言つてくれたのが嬉しかったんじゃないの？」

赤桐が問いかけると、猿君はゆっくり頷いた。

「克也が喜んでくれると、嬉しい。」

よく映画で片言の言語しかしゃべれない大きくて不器用な謎の生物がこういうことを言うよな、と猿君と克也を除く全員の頭の中にそれぞれがイメージするキャラクターがよぎつた。気は優しく力持ち、そしてちよつとおつむの弱い、そういうキャラクターだ。

一方、克也は大まじめに猿君の言葉を理解した。

「猿君が嬉しいと僕も嬉しいから、このままだとずっと二人とも嬉しいね。」

その瞬間、二人の間に幸せオーラが放たれた。

「お前らのいっばいの幸せを今日の4限には俺たちにも分けてもらうからな。猿、覚悟しとけよ。」

最上からの外的刺激によって猿君はしゅんとなり、幸せの永久運動は早々に阻害された。

最上の猿君洗浄計画は4月の早い段階から練られていた。使用できる設備と許容できる作業内容を検討した結果、選ばれた方法が最上と赤桐が使用している研究棟のシャワーを使用するというものだった。合宿所にも広い風呂があるが、他の人も使用する風呂にいきなり突っ込むには猿君の清潔度に疑問がありすぎる。最上達が使用している研究棟は大型機械を扱う実験用の設備で、油にまみれて作業する学生のための設備が整っている。猿君の洗浄計画第一弾に最適な環境である。既に何度か猿君に自発的な入浴を促したが逃げ回られて洗浄計画は頓挫していた。そこで猿君が溺愛している克也を抜擢したのである。

克也は猿君と一緒に最上に伴われて研究棟へ移動した。長い廊下を通り抜け更衣室と書いてある扉を開けると、最上は克也と猿君を中へ通した。

更衣室のロッカーの更に奥に扉があり、シャワー室と書かれている。

「よし、じゃあ猿はとっとと脱いでシャワーを浴びてこい。克也は

ここで猿が逃げ出さない様に見張っていること。いいな。」

最上は大木に調達させた新しい衣類と石鹸を猿君に押しつける。

「猿が上がってきて、綺麗だと思えるレベルじゃなかったら何度でも風呂に入り直させる。克也がOKと思ったら俺のところに来てこい。来る途中に通っただろ？9番の部屋にいるから。」

最上はそう言うと、自分は更衣室の外に出て行った。

猿君は、自分が最上の納得がいくレベルまで風呂を浴びないと克也が解放されないしくみになっていることを悟った。適当に逃げ出すことができない。薄暗い男子更衣室に何時間も克也を置いておくわけにはいかない。猿君は意を決して風呂場へ向かった。

シャワー室は相当に汚れた人間が使うことを想定されているのか素手で触らなければならぬ部分が多かった。ブースに入るとセンサーが反応して問答無用でお湯が降ってくる。しばらく猿君はじっとお湯に打たれていた。体中が体毛に覆われているので、時間をかけないと肌まで湯が達せず石鹸を泡立てることもできないのだ。猿君の風呂嫌いの大きな原因の一つはこれである。時間がかりまどろっこしい上に水道代もかかる。常に困窮している猿君にとって風呂による出費は切り詰めるべき対象に入っていた。しかし、今日は学校の設備だ。じっと時間をかけて湯をしみこませて体を洗う。頭髮は絡まりすぎてどうしようもないが、出来る範囲で洗おうと試みる。

猿君の自己評価でOKがでるまで、克也は更衣室の中にあるベンチに腰かけて待っていた。今自分がしていることがみんなの役に立っているとはとても思えないが、猿君がお風呂が嫌で嫌で飛び出すかもしれない、と思うと見張りは必要なかもしれない。自分が本気で逃げようとする猿君を止められるとは思えないが、逃げたと報告することくらいはできる。嗅ぎ慣れない匂いに囲まれながら、扉の向こうの水音が止まるのを待っていた。

猿君が満足したのは15分後だった。大木が100円ショップで

まとめ買いしてくれたタオルでせっせと体を拭く。猿君の風呂嫌いの原因その二は、体毛がたっぷり水を吸うので全身を拭き切るのに時間がかかるからである。なんとか拭き終えて新しい下着をつけて克也に声をかけると、克也はすたすたと猿君の方へやってきて、くんくんと鼻を鳴らした。真面目に最上の言いつけを守っているのだ。匂い、見た目の合格点が出せなければもう一回シャワーを浴びてもらわないといけない。克也は少し申し訳なさそうに猿君を見上げた。

「猿君」

その表情に何か悟った猿君は、克也に皆まで言わせず無言でシャワールームへ戻って行った。

最上は赤桐と実験室に籠って不具合が出ていたバイクのパーツの取り換えを行っていた。ふと、赤桐が時計に目をやる。

「遅いね。」

「そう簡単には綺麗にならんだろう。克也が見張ってくれてると思っけどな。」

「克也を見張り番にするなんて、よく思いついたよね。確かにあの風呂嫌いを風呂に閉じ込めるには適任だけど。」

赤桐はバイクの傍をはなれてアイシールドをあげると、作業用手袋をはずして作業机の上に置いておいたチョコレートの袋に手を伸ばした。

「でも、あと30分してもこっち来なかつたら見にいった方がいいと思うな。どっちか風邪ひいちゃうよ。」

チョコレートをもう一つ取り出して、バイクの方へ戻ると、バイクの下に潜り込んでいる最上の目の前にチョコを示して食べるかと仕草で聞く。計器から手が離せない最上がものぐさに口だけ開けて催促するので包みを開けて口に放り込んでやる。

「あ、それ。」

赤桐が言いかけると、チョコをかみ砕いた最上が一瞬息をつめて、唇の端から赤い液体がフッと流れてきた。

「チェリーボンボン」

予期せずアルコールが流れてきたのによく吹かなかったものだ。最上は恨めしげに赤桐を見上げる。今口を開けるとチョコレートが吹き出すのだろう。珍しく黙っている。

「って言おうと思ったんだけどー。」

赤桐はそのまま最上の顔を伝って首筋まで達しそうな赤い流れを指で掬いとるとそのまま舐めとった。最上は計測を終えてバイクの下から這い出して、上体を起こすとなんとかチョコレートを飲み下

す。搦い損ねたりキニールを拭おうと手を上げるが、作業用のグローブを着けたままであることに気が付いて、手を下ろす。グローブを外すより前にもう一度赤桐に指で顔を拭われた。最上はジロリと隣に膝をついている赤桐を睨んだ。

「言おうと思いつていうか、転がっている人間にボンボンチョコレートなんか食わずなよ。最初から間違つてんだよ、選択が。」

またリキニールを舐めて片付けた赤桐は大して悪いとも思っておらず「たまたま搦んだら、それだったんだって」といつて笑っている。

ちょうど、そこで作業スペースの扉が開いて猿君と克也が入ってきた。

「最上先生」

猿君と克也の目には座り込んでいる最上に赤桐が寄り添っているように映った。最近では共同研究のため二人での行動が多い最上と赤桐の関係を犬丸が激しく邪推しており、猿君にはその話も耳に入っていた。犬丸が面と向かつて関係を問いただしても最上と赤桐も適当にしか相手をしらないので、二人の関係は謎に包まれている。

一つ確かなのは、たとえ赤桐とつきあっていたとしても最上には他にも女の影がたくさんあるということだ。

「おう、終わったか。」

最上はさっさと立ちあがって、まだリキニールの味が残る唇を舐めながら二人の方へ近づいて行った。長い前髪は誰のものか女性用のヘアクリップで止めて、薄汚い作業着に機械油臭を漂わせているのに唇を舐めるだけで色つばいだから、30年以上磨いた男の色気はすごいものだと言君は、やってくる最上をみて感心した。

「いいじゃねえか。だいぶ人間に近づいてきたぜ。」

それで、口を開けば洋酒の香りなんて最上は毎日何を食べているのだろうと猿君の興味関心の方向はどんどんずれて行く。

赤桐も後ろからやってきて、猿君の姿を確認する。まず異臭はほ

ぼ消えている。髪が絡まっている辺りはどうしようもなかったのだろ。髭も特に剃っていないので毛むくじゃらであることは変わらないが、なんとというか毛艶がよくなった。服は少しサイズが合わなかったのかTシャツがやや小さく、カーゴパンツがやや大きいので服装だけみたら米軍兵のようである。

「ようし、これからもまめに風呂に入れよ。そのくらいだったら部屋棟のシャワーも使わせてもらえんだろ。」

最上は満足げに猿君の見やり、次いで横にいる克也を見下ろして「お前もいい仕事をしたな」と褒めた

無事、無罪放免となった二人は榊原研究室に戻り針生、犬丸、大木の他に珍しく黒峰からも褒めてもらった。克也は風呂場の前に座っていただけなのだが、やはり皆が喜んでくれたのでやってよかったと満足した。

克也は風呂に入って綺麗になった猿君と一緒に自転車で駅まで帰ることにした。自転車置き場まで歩きながら克也がふと「最上先生と赤桐さんは仲がいいね」と言うので猿君はちよつと驚いた。「そうだな」と何気なく返しつつ、克也がどういう意図で仲がいいと言ったのかと考える。自分が15歳だったときと同じとは考えにくい。克也は恋愛というものとは無縁の存在に見える。それは犬丸や猿君が女に縁がなさそうなのとは全く違う意味である。

猿君は二言目に何を言おうかと悶々としながら自転車の鍵を開けて走り出した。いつも通り猿君の後ろに座った克也は風につて石鹸の匂いがすることに気が付き、ちよつと声を張り上げて「猿君、いいにおいがするね」と声をかけた。そして、そのまま背中が頭があずけられる感触があった。猿君はそういえばこれまで克也が自分の自転車に乗るときには必ず風下にいたわけで、体臭に不満も述べずにいてくれたのだと思いつた。明日からちゃんと風呂を浴びようと心に決める。思い描いているのは当然学校の設備である。

One for All - 3 (後書き)

やっと猿君が綺麗になりました。よかった。

江藤克也の独白

おじいさんの家は学校から遠かった。だから学校に通っている間、僕は学校に住んだ。

おじいさんの家には春と夏と冬のお休みにだけ帰る。おじいさんはいつも車で学校まで迎えに来てくれて、僕は学校での出来事を話しながら家まで帰った。おじいさんは毎回「お友達はできたか」と聞いたけど、僕にはどうしたら誰かとお友達になれるのか分からない。「できない」と答えるたびに、少し悲しそうに「そうか、次の学期はできるといいな」と言われた。でもおじいさんが生きている間にお友達はできなかった。教室に居る間は勉強をしているし、休み時間は特別教室への移動のために先生が迎えにきた。学校が終わって寮に帰ったら、部屋には自分一人しかない。どうしたら友達ができるのか、というのが友達なのか分からなかった。

山城のお家に来たのは10歳の時だ。それからも1年だけ同じ学校に通った。今度は和おじさんや吉野さんが迎えに来てくれるようになった。和おじさんは「お友達はできたか」とは聞かなかった。僕の話聞くより、和おじさんが話す方が多かった。いつも休みの間にどこに行こうかという話ばかりしていた。学校以外のほとんどの場所は和おじさんが連れて行ってくれるまで行つたことがなかった。動物園、水族館、大きな図書館、プラネタリウム、植物園、海乙女さんと吉野さんはスーパーやデパートの買い物に僕を連れて行った。おじいさんと一緒に買い物にいったお店よりずっと大きなお店ばかりだった。

ずっと通っていた学校を卒業して僕は高校に進むことになった。高校へは山城のお家から毎日車で通った。吉野さんが毎日お夕飯のおかずの話をしながら送ってくれた。これまでいた学校は大きな子供から小さな子供まで色んな子がいたけど、高校は大きな人しかい

なかった。分からないことが沢山あつて近くにいた人に聞いてみたけど、ちゃんとした答えはもらえなかった。何度か聞いてみて、答えてもらえないんだと分かったからその後はもう聞かなかった。聞かなくても、見ていてほしい分かってきたし。たくさん人が周りにいて、ずっとザワザワしていることだけが、落ち着かなくて最後まで苦手だった。

大学に入ると周りは皆大人だった。やっぱりザワザワしているけど、僕は好きなようにそこから逃げ出すことができた。席を変わっても怒られなかった。高校よりも毎日が楽だった。

3年目になつて研究室に入るのだと言われた。それが何だか良く分からないまま、教えてもらった部屋に入ったら大人の人が何人かいる普通の部屋だった。僕より後に今まで見た中で一番大きな人が入ってきた。それが猿君だった。初めて会った日に猿君は何でも聞いていいよと言ってくれたので、質問したら、本当になんでも分かるまで答えてくれた。猿君が困ってしまったも、そばにいる誰かが教えてくれた。研究室というところに来てやつと不思議に思うことを全部聞けるようになった。皆からも質問された。そうやって、いろんな話をしていたら友達のことを思い出したから友達の作り方も猿君に聞いてみた。

「俺と克也が仲良くなったみたいになればいいんだよ」

と言ったから、猿君と出会ったところから全部思い出してみただ、出会ったらすぐにリングゴを差し出してくれる人なんて他にもいるのかと不思議に思った。

おじいさんに、お友達ができたよって言ったらなんて返事をしただろう。

猿君にも聞いてみたら、「良かったね」って言ったと思うと言っていた。

僕もそう言ってくれると思う。今だったらいつもおじいさんが「

お友達はできたか」って聞いたのも、僕ができなかったと言ったら
悲しそうだったのも理由が分かる。

お友達がいると毎日とても楽しい。

江藤克也の独白（後書き）

次話からちょっとシリアスめいてきます。

日常の綻び・1 (前書き)

本人は痛そうではありませんが、流血シーンがあります。苦手な方はご注意ください。

最上の猿君洗淨計画がきちんと梅雨に間にあったのは実に良いことだった。その年の梅雨前線は6月半ばから律儀に毎日雨を降らせたので、洗淨前の猿君だったら湿気で何かの発酵が進んで大変な事態になっていただろう。

雨が続くので自転車での克也の送迎が難しくなり、このところ克也は連日、赤桐の車に乗せてもらってターミナル駅やまで送ってもらっていた。同じ車通学の犬丸の出番がなかったのは、赤桐がその役を譲らなかつたせいでもあり、彼の実験が立てこみ20時に退出できる日が数えるほどしかなかったからでもある。そうしたわけで、折角苦手なシャワーを毎日浴びているのに克也と二人の時間を中々過ごせず、猿君はしょげていた。

ある日、待ちに待った梅雨の中休みが訪れた。久しぶりに自転車で帰宅できそうだと思った猿君は、赤桐に克也を横取りされる前に克也を促し研究室を後にした。

猿君は意気揚々と自転車を漕ぐ。久々に誰にも邪魔されずゆっくり話せるので、猿君は克也の声が聞こえやすいように車の少ない裏道を選んだ。並行して立派な国道が走っている裏道を通る車は少なく、道は細い。途中からはフェンスがはられた畑の間を通る一方通行の道になる。この辺りからは、たまに車とすれ違うときには注意しないとフェンスが車に足をこすってしまいそうになる程だ。

運悪く、その最も細い道を通っている間に向かい側から大きめのセダンが入って来てしまった。猿君は電柱の手前で自転車を止めてやり過ごすことにする。車はスピードを落として走り去るかと思いきや、ぴったりと猿君と克也の乗っている自転車の脇で止まった。すぐに扉が開いて柄シャツに黒いパンツというVシネマスタイルの

男が降りてきた。猿君は至近距離に降り立った男から自転車ごと克也をかばうように立ちはだかる。

「そこ、どきな。」

実に横柄な態度である。当然、猿君は首を横に振った。

「何の用だ。」

問い返すと、男は反対側の扉から降り立った二人の男と目を見合わせた。ちよつと口元が笑っている。

「お前には関係ない。いいから、どけ。」

そんな回答で納得する人間はいない。黙っていると他の男が口を開いた。

「お前がボディーガードか？それじゃあ、簡単にどけないよなあ。いくらもらってんのか知らないけど、ちゃんと戦って敗れたようにしてやるから心配すんなよ。どうする？それとも本当に戦って敗れてみる？」

猿君はへらへらと笑う男の言っていることがさっぱり理解できなかった。何の話かと首をかしげる。克也を見習って可愛く首を傾げたつもりだったが、首の骨がボキボキと音を立てたので、まるで挑発したようになってしまった。困ったな、と猿君は厳しくなった男達の顔をみて眉を寄せたが、鳴ってしまったものは仕方がない。

男達は無言のまま、手に手に武器を取り出した。手前の扉から出てきた男はナイフを、車を挟んで奥の男の一人は銃である。猿君は薄暗い路地にぼんやりと光る白い刃を見て近くの人には銃じゃない、良かったなと思った。猿君の背中ですれらが見えていない克也はもちろん、猿君も武器に全く動じないので男達は一瞬自分達の手の中のものを確認してしまった。もちろん、それは期待通りのナイフや銃である。

そのほんの数秒の間のことだった。

猿君は手前にいた男の手をむんずと掴んで捻り上げた。もう片手でナイフを持っている手を掴んで開いたままの車のドアに叩きつけ

ると、男は悲鳴を上げてナイフを落とした。手首付近を持っていた猿君には感触で分かったが、たぶん手首が折れている。手加減が足りなかったかと少し眉毛を下げて反省する。戦意を喪失した風な男を引き寄せて自分にはちよつと小さいながら盾の代わりにする。猿君は下手に動くとき也を背中にかばいきれなくなるので、立ちつくしたまま二人を見やった。

もう一度、素朴な疑問が湧く。この人達はこんな物騒なものを持って何をしに来たのだろうか。

「本当に、何の用なんだ？」

男たちには、これもまた挑発にしか聞こえなかった。銃を構えた男が猿君の眉間に狙いを定めながら舌なめずりをして応える。

「お前には用はない。」

「何の用ですか？」

猿君の後ろから今度は克也が質問した。克也には状況が見えていない。猿君に用でないのなら、きっと自分だと思って素直に質問してみたのである。男たちは鼻白んだ。彼らには本当の用事が何かなんて知らされていない。

「何の用にしたって銃を突きつけながら話もないだろう。」

猿君は眉間を狙われるのは嫌いだ。当たったら死んでしまうのではないか。目の前の男を片手で持ち上げて眉間をかばう。視界が悪くなるが死ぬよりマシだ。襟首を掴んで持ち上げられた男は首が締まって苦しそうだ。

猿君と対峙していた二人の男は目の前で決して小柄ではない男を片手で持ち上げた猿君の姿に戦慄した。あのまましばらく吊るされていたら窒息してあいつは死ぬ。猿君の足元めがけて銃を放ったが、狭い路地で車が間に止まっている。的にできる範囲が狭すぎて当たらなかった。

猿君は銃声を頼りに掴んでいた男を放り出した。いつまでも男をぶら下げておくわけにもいかない。銃を構えた男は車の上を飛んでくる仲間に誤って発砲しそうになって慌てて銃を下げた。よけきれ

ず二人して倒れ込む。

もう一人、車の向こうにいた男は素早く車を回り込み猿君が吊るしていた男を放り投げた瞬間に襲いかかった。

猿君の右肩にナイフを突き立てようとして片手で払いのけられる。それだけで自分の手にしびれが走った。飛んできた虫をいなす程度の動作から与えられた衝撃とは思えない。驚愕しながらも、今度は左手も添えて脇腹をめがけて飛び込む。猿君は腹筋に力を込めただけで避けようとはしなかった。避けるには空間が狭すぎたし、とにかく背中に克也がいる間は一步も動けない。

動かない猿君を見て、男は体ごとぶつかるとようにナイフを突き立てようとした。しかし、猿君に達する前に前進が止まり、そのまま意に反して後ろへ戻された。両肩に猿君の毛深い手が乗っている。自分の体がいとも簡単に押し戻される感覚に男の額を悪い汗が流れて行く。猿君は相撲のはたき込みの要領で男の背中を下方向へ押し、男を地面に寝転がらせた。片手で男のベルトを掴むと車の向こう側へ放り投げる。咄嗟に両手で持っていたナイフを片手に持ち替えていなければ、男は自分のナイフの柄でみぞおちを強打していたことだろう。それを回避できたのは良かったのだが、良くなかったのは、手首がぶらぶらになっている男をどけて、ようやく立ちあがった男が銃を構えているところに飛んで行ってしまったことである。今宵、二発目の銃弾は空に向かって飛んで行った。

「克也、しゃがんで。」

猿君は克也が小さくなる気配を確認しながら、落ちていたナイフをフェンスの向こうの畑へ放り投げた。そして立ち上がりざま車の下に手をかける。良く見ると車にはまだ運転手が残っていたが、目があっても彼は銃を向けては来なかった。

猿君は「うっ」と野太い声を上げると車の下に手をかけた。

(まさかね。)

運転手は一連の猿君の動作を見ながら、麻痺した頭に浮かんだ想

像を打ち消した。

「うおおあ。」

咆哮しながら猿君は立ちあがった。もちろん車の下側を掴んだままである。

車の片側を持ち上げるとどうなるか。当然反対側に倒れる。車は見事に横倒しになった。運転手の閃きは正しかったのである。ただし、自分で可能性を否定してしまったので無防備に地面に叩きつけられ意識不明である。

車の外にいた黒い男たちは飛びずさってなんとか下敷きになる難を逃れた。

猿君は克也の肩を抱いて車の陰に移動させた。銃を取り上げるまでは油断ならない。

襲撃者たちは車を素手でひっくり返されてだいぶ冷静さを失っていた。銃を持った男は横倒しの車の天井側から腕を伸ばして、タイヤの間にかがみこんでいる二人の方へ出鱈目に撃ってきた。

猿君はしゃがみこんだ克也に覆いかぶさって銃声が止むのを待った。車にびったり身を寄せると車体がまだ熱かったが我慢する。やっと静かになったところに猿君はそっと体の向きを変えると車のサイドミラー越しに向こうの様子をのぞきみた。弾切れらしい。猿君は右肩を直立している車の底の部分に当てるとぐっと踏ん張った。

車とは本来は横向きに安置されるものではない。元々安定が悪かったのか、ぐらりと傾いて今度はフェンスによりかかって底を空へむけるような角度になった。車に腕を置いて弾を込めていた男は車と畑を囲っていたフェンスの間に閉じ込められた。フェンスが思いっきり体に食い込んでボンレスハムにでもなったようだ。

ナイフを持ったまま投げられた男は車の下敷きを免れて、もう一度、猿君の背後に隠れている克也の更に後ろから忍び寄った。しかし、素早く猿君が克也を引き寄せたので、伸ばした腕は宙を切った。再び猿君と対峙した男は先ほどの教訓に学んで闇雲に飛び込むことはしなかった。

一瞬睨みあつてから、たった一步。

猿君が大きく踏み込むタイミングで男は体を大きく横に交わしながら、猿君の脇へ回り込みナイフを背中に突き立てた。

猿君は全くスローダウンせず、体を半回転させながら勢いよく手刀を男の首筋に叩きこむ。

猿君が体をひねった拍子に背中から抜けたナイフを握りしめたまま、男は昏倒した。

刺されたことなど気が付いていないように、猿君は襲いかかってきた全員が失神しているか動けない状態であることを確認して回った。そして、頷くと止めてあつたママチャリを拾い上げてこれまでと反対方向へ向けた。

「克也、学校に帰ろう。」

大人しく丸くなつていた克也は頷いて猿君の方へ歩みよつた。学校を出た時よりさらに暗くなつた路上で再び二人乗りをして先ほど来た道を戻りだす。ふと、覚えのない臭いがして克也は鼻をひくつかせた。先ほどまで石鹼の匂いだった猿君から違う臭いがする。確かめるように背中をなでると、猿君はびっくりしたのかぶるつと背筋を揺らした。克也の手にはべつたりとした感触が残つた。見下ろすと黒く濡れている。自転車が街灯の下を通過した時に、それが黒ではなく濃い赤だと分かつた。その瞬間に克也の意識が飛んだ。

意識が飛んでもしばらく克也は猿君の広い背中に寄りかかった状態で自転車で揺られていた。角を曲がるうとして克也が転落して、ようやく猿君は克也の意識が無いことに気が付いた。道路に落ちた克也の額から頬にべったり血が付いている。自分の血だと気が付いていない猿君は大慌てで研究室へ電話をかけた。幸いにもワンコールで黒峰が出た。

「猿渡です。克也が襲われそうになりました。逃げてきたのですが克也が気を失ってしまつて、自転車から落ちて出血が。誰か迎えによこしてもらえませんか。」

「救急車ではなくて？今どこに居ますか。」

黒峰は一瞬息をのんで、すぐに質問を返してきた。

「どつちでもいいです。ああ、そうか警察も。今の場所はガソリンスタンドの脇から幼稚園に向かう角のところですよ。」

「分かりました。今の場所に留まっついていて安全ですか？」

猿君は先ほどの男達が目を覚ましたら、ここまですぐに追い付かれると思つたが、克也が頭でも打っていたら担いで移動するのは危険すぎると思つた。

「あまり安全ではないですが、克也を動かす方が危険です。」

「猿渡君、すぐに犬丸君が向かいます。そこで待つていてください。」

「はい。」

電話が切れると、いつも通りの裏道にいつも通りの静かな空気が戻ってきた。

待てと言われたが犬丸の車ではここまで入って来られない。猿君は克也を抱えて車の通れる大きな通りから見える場所へ移動して座りこんだ。しばらく茫然と克也の額と頬を撫でて砂と血を払っていると、どこにも怪我が無いことに気がついた。はて、どうしてどこ

も切れていないのに血が出ているのだろう。猿君は見えないところに傷が無いが克也の頭の周りを確認したが、たんこぶを発見しただけだった。少しほっとして犬丸を待つ。

急ブレーキ音と共に大徳寺家の黒塗りの車がやってきた。予想通り狭い道には入れないので犬丸だけが降りてくる。犬丸をみた猿君が自分で克也を抱えて立ちあがると、駆け寄ってきて克也の顔を覗き込んだ。

「克也は？」

「いや、それが頭にたんこぶはあるんだけど、傷が無くて。血が付いていたから頭を切ったと思ったんですけど。」

猿君は困惑気味に報告する。犬丸は克也の首筋に手を当てて様子を見ていたが大事なという結論に至った。自転車に残っていた荷物を抱え上げると猿君を促して車へ戻る。克也を抱いたままの猿君が後部座席に落ち着き、犬丸が前に乗る。背もたれに背を預けようとした猿君が、ふと背中に違和感を覚えて背筋を伸ばした。片手を背中に回して触ってみる。べったりとした感触がした。

「犬丸さん。」

既に車は学校へ向かっている。電話で黒峰に二人の回収報告している犬丸に後ろから声をかける。

「なに？」

電話を中断して犬丸は半身だけ振り返った。

「克也についてた血、俺のかもしれないです。俺の背中かも。」

「はあ？」

犬丸は高い声で聞き返すと今度は完全に振り返って車内灯を着けた。猿君の背中は見えないが、赤い血がべったりついた猿君の手と後部座席の背もたれに触った時に付いたのであろう大きな血痕がはつきり見えた。犬丸は勢いよく振り返ったせいではずれた眼鏡を直す前を向き直った。

「あ、黒峰さん。聞こえました？猿君が大量出血。明るいところで

みたら血まみれでした。えー、だって暗くて分かんなかったですよ、克也についてた血もきつとそれですね。学校に連れて帰るとだいぶ目立ちますけど、このまま病院に向かいましようか？」

しばらく何か相談していたが、電話を切ると行き先を大徳寺家が懇意にしている病院に変更した。犬丸専属のいかつい運転手は横で主が血まみれと叫んでも動じることなく、スムーズに進路を変更した。

病院について二人を下ろしてみると、歩いているのが奇跡かと思っくらい猿君の背中では真っ赤だった。よくふらつきもせず克也を抱きあげていたものだ。犬丸は小さな看護師に引かれて行く大きな背中を見ながら感心した。一方の克也の意識は戻っていないが怪我はないようだった。念の為、検査してもらおうことにして克也も医師に預ける。

犬丸は、血まみれの車を一度家に戻して自分は病院に残った。改めて経過を報告するため研究室に電話をかける。

「大徳寺です。病院に着いてそれぞれ処置中です。命に関わるってことはないみたいですけど、猿君が思ったより出血が多くて。克也は猿君の血まみれの背中をみて卒倒したんじゃないですかね。襲撃犯の方はどうですか？」

黒峰によると、研究室からの通報より前に近所から通報があったらしく警察が駆けつけているとのことだった。犬丸はぜひとも現場がみたいと思つたが、今ここを離れるわけにもいかない。なけなしの弁えで見に行きたいというのを我慢する。現場には最上が向かったという。

「教授は？」

「連絡は入っていますが、今日は名古屋の大学での講義をなさっているので終わり次第、病院の方へ向かわれると思います。それから、江藤君の保護者の方も病院に向かっているとのことですよ。」

「ああ、そうか。猿君の家族は、確か遠いんですか？」

「九州です。」

少なくとも、すぐには駆けつけて来られないだろう。犬丸は電話を切って指定されたベンチで医師の報告を待った。克也の処置は比較的すぐに終わった。やはり軽く頭を打ってはいるが全く問題ないとのことだった。自然に意識が戻るのを待てばよいと言われベッドの脇に移動する。血の跡を綺麗に拭われた克也は眠っているだけに見えた。

まもなく赤桐と針生がやってきた。黒峰に報告したものと同じ説明を繰り返すと、赤桐は安心したように克也の頬を撫でた。

「良かったー。」

そのまま、ベッドに突っ伏しようとした赤桐が目測を誤って軽く克也に頭突きをかましたことで克也は目を覚ました。

「う、うーん」

「あたー、克也、ごめん。痛い？」

慌てて赤桐が顔を覗き込むと、克也はしばらく茫然と薄いベージュの天井を眺めていたが、赤桐の顔を見て、その後ろの犬丸と針生をみて、やっと本格的に目が覚めてきたようだった。

「赤桐さん、猿君は？」

寝起きのかすれた声で聞くと赤桐も犬丸の方を振り返った。

「今、治療中。この病院で克也を医者に渡すまでずっと猿君が抱きかかえて運んでいたから結構元気なんだと思うよ。」

犬丸の言葉に克也は少し安心した。意識を失う前の真っ赤な血に染まった自分の手を思い出し慌てて手を見るとすっかり綺麗になっていた。あれは幻だったかと思うが、そんなはずはない。初めて嗅いだ大量の血の臭いを鮮明に覚えている。思い出して少し気持ち悪くなり克也はぐっと目を瞑った。

「大丈夫？」

赤桐が軽く布団の上から腕をまわして抱きしめるようにしてくれる。そうされると少し落ち着く気がした。しばらくそのままじっと

吐き気がおさまるのを待つてからゆっくり目を開けて頷くと、克也は体を起こした。体はどこもおかしくない。大丈夫だ。ベッドの上で起き上がると小さく一つ息を吐いた。

「克也、もし平気そうなら何があつたか話してみしてほしいんだけど。猿君からは4人組の男に襲われたことだけしか聞いてない。それを猿君がやつつけて、二人で学校に帰ろうとしたら克也が気絶して自転車から落つこちて、それで猿君が研究室に電話をかけてきたというわけなんだけど。克也が覚えていることは？」

犬丸に問われて、克也は車が自転車の脇に止まつたところから記憶を高速で再生する。

「あの人たちはどうなつたんですか。」

説明よりも前に克也が聞くと、犬丸は首を傾げた。

「さあ。警察がけつこうすぐ来たみたいだから捕まつたかも。猿君がどのくらい大暴れしたか聞いてないから、生きてるかどうかとかは分かんないよ。」

犬丸の口調はまるでいつも通りだ。

「猿君は誰も殺してないです。たぶん。」

克也がそういうと犬丸は大きく頷いて「そりゃよかつた」と言つた。

克也は見えていたことを順序立てて話した。いくら動揺して気を失つたとはいえ、それ以前の克也の記憶は正確だ。研究室の面々もこれまで克也に物を教えてきた経験上良く知っている。彼は見聞きしたことを決して忘れない。三人はただ黙つて克也の説明を聞いた。猿君の背中しか見えていなかった時のことは音声だけ伝えた。それは勝手に状況を推測したが、それ程間違つてはいなかつた。

克也が猿君が車をひっくり返したというと、犬丸と赤桐と針生は揃つて頭を振つた。

「あり得ないけど、あり得る。」

「猿君ならあり得る。」
「有り得る。」

今ごろ警察はひっくり返された車を発見しているのかと思うと三人は少し気の毒な気持ちになった。きつと困惑しているだろう。素手で人の乗っている車をひっくり返すなんて聞いたことが無い。

話し終えた克也が猿君の様子がみたいと言い出したので四人は病室を出て猿君の処置が続いている手術室の前に移動した。犬丸はいつたん克也を赤桐と針生に任せると再び黒峰に連絡をいれた。

猿君が車をひっくり返した、という鉄壁の冷静さを誇る黒峰をして一度聞き返された。

一方、警察への通報の後で事件現場に駆け付けた最上は予備情報も無しに裏返されている車に御対面して絶句していた。

道路の上に腹を空に向けた車が天井をフェンスにもたれるようにしてひっくり返っている。既に怪我人はすべて救急車に収容されていたので、街灯の下、車だけがひっくり返っているようすはかなりシユールなものがあつた。

「こりゃあ、猿だろうなあ」

最上は頭をかいて苦笑いした。綱引きで最後には大人4・5人を引きずった馬鹿力を体験した後なので、なんとか受け入れらる説明だ。警察の邪魔にならない程度に車の様子などを観察したが、予想していた通り、全く見覚えのない車だつた。

程なく警察の担当者に声を掛けられ、研究室への通報の経緯などを説明させられた。警察側に逆に事情を聞いてみたが、あまり多くの情報は得られなかつた。最上は放免されると、その足で君と克也の收容されている病院へ向かつた。

猿君の顔をもう一度見られたのは、克也が目覚めてから1時間以上経つてからだつた。

その間に最上も病院に到着し、克也の無事を喜び、実際に転がっていた車の様子と警察の困惑ぶりを語つて聞かせた。

更に山城乙女が病院に駆けつけてきた。乙女は克也の姿を認めると駆けよつてきて、無言で克也を抱きしめてしばらく離さなかつた。だいぶ時間が経つてから、怪我人がいたと聞いたことを思い出したらしく、点灯中の手術中のランプに目を向けた。

「克也？一緒に帰っていたお友達は今、手術室の中なのね？」

そう確認すると、克也は頷いた。

「そう。」

乙女はそれ以上言わずに克也の手を握りしめて手術室の前のベンチに腰を落ち着けた。

ランプが消え、扉が開いてストレッチャーがでてくると大きすぎる猿君の足と腕は完全にはみ出していた。しかも背中にも傷があるためという理由でうつぶせだ。大変喋りにくそうなので、みな無言で病室まで付き添った。

病室に着くと克也は猿君の枕元に座って何度もお礼をいった。猿君はうつぶせのまま腕を伸ばして無事でよかったと克也の手を撫でた。山城乙女も重ねがさね礼をいった。これには猿君はもごもごと不明瞭に返事をした。

赤桐と犬丸がうつぶせで横を向いている猿君の顔のつぶれ加減についてからかって少し固くなっていた場の空気が少し和んだところで、医師の説明を聞いていた最上が血相を変えて走ってきた。

「猿！」

そう言ったきり、しばらく絶句している。言葉が見つからなかったのかだいぶ溜めた後に

「このド阿呆が！」

と怒鳴りつけた。

「お前、傷があと一歩深かったら肺に穴開いてたぞ！チンピラ相手に背中とられてんじゃねえよ！」

最後の文句は一般市民相手に無茶な要求だと思いが誰も反論できる雰囲気ではなかった。あまりの剣幕に克也がびくつとしたので猿君が腕を伸ばして抱きしめる。椅子に座っている克也にベッドに寝転んでいる猿君が腕をまわしているので、克也の膝に猿君がすがりついているようにも見える。

「でも、刃渡りが短かったから。」

猿君が一言だけ反論するのを聞いて、最上は次の怒鳴り文句のために吸いこんでいた息を全部吐き出して、ぐったりと壁際の椅子に

座りこんだ。ため息をつく最上と困ったような雰囲気の猿君を見比べて赤桐が質問する。

「話が見えないんだけど？」

「猿の背中への傷、ナイフによる創傷。背筋が異常に発達してなきや肺に穴が空いて致命傷コースだったそうだ。まあ、奴には勝算があったらしいけど？肉を切らせて骨を断つって、肉切らせすぎだろうがよ。お前自分のこと不死身だとも思ってたんじゃないのか。」

解説するうちに怒りが再燃してきたのか最後は再び怒鳴りつけるように最上がいうと、一斉に猿君に視線が向いた。克也は猿君の背中に恐る恐る手を伸ばして撫でながら、ごめんね、ごめんねと繰り返した。

「どうして克也が謝るの？」

猿君は不思議そうだ。克也もそう聞かれると理由は分からない。でも自分がいなければこんなことにはならなかったと思うのだ。

「結局死んでないし、克也も無事だし、それでいいだろう。」

克也はさっぱり納得できなかったが、反論する言葉が思いつかなかった。

「まあ、そういうことにしといてやるよ。克也に感謝しろよ、猿。」

お前は毎日風呂に入って無かったら今ごろ自分の皮膚が体毛が原因の感染症であの世行きだ。」

最上が言い添えると、乙女と克也を除く全員がその通りだと深く頷いた。

日常の綻び - 3 (後書き)

実は結構な大怪我でした。全然痛がってなかったですけども。

榊原探偵団の推理 - 1 (前書き)

大木と犬丸編。

「なるほど、分かった。」

最上は冷静さを取り戻してから猿君から事情を聞いた。時折、横にいる克也にも内容を確認する。一番遅れて駆けつけてきた大木を含めて全員で話を聞き終り黙り込む。

話が途切れるのを待って、山城乙女は一旦克也を連れて席を外した。家で待っている吉野や和男に克也の声を聞かせて安心させてあげなければならぬ。

二人が出ていくと、学生たちは克也の前では言い出しにくかった推論を展開し始めた。

「今回のつて、誘拐未遂つてことになるんでしょうか。猿君に阻止されなければ克也を連れ去つていた可能性が高いですよね。」

大木は確かめるように口にする。

「犯人が克也の価値を正しく理解しているのなら、どうして今の克也を誘拐しようとする人間がいるのか分かりません。」

最上は目で続きを促す。

「克也は確かに天才だと思います。あの驚異的な記憶力と実験における閃きつていうんですか？未恐ろしいと思いますけど、今の時点で完結した研究は高校時代の全て公開済みの基礎実験だけでしょう。今の克也を誘拐しても、これから必要な情報を与えて研究を完成させるまで克也を監禁しておくなんて無駄が多過ぎる気がしませんか。逃亡や誰かに嗅ぎつけられるリスクをとつてまで誘拐しなくても、学校にいれば克也は放つておいても研究を続けるんだから、成果が出た後で成果だけを取りに来る方がずつと効率がいいと思いますけど。」

最上は組んでいた両手を解くと、背後の壁に大きく寄りかかった。「大木、そうするとお前はどっかの企業かなんかが研究をさせるた

めに克也を誘拐しようとしたと思うんだな。」

他に克也を誘拐する必要性のある人がいるとは思えないと大木は肯定した。原子レベルの研究成果は一般市民にすぐに利益をもたらすようなものではない。

「悪の秘密結社が天才研究者を監禁か。お前はスパイ映画の見過ぎだな。現実世界にそんなもんねえよ。」

ピシヤリと言い放たれて大木は悲しい顔をする。それを見ながら最上は本当に嫌そうな顔で続けて言う。

「と、言いたいところだが相手が克也だとありえるから性質が悪いな。」

「悪の秘密結社ですか。」

針生が呆れたように口を挟む。

「そりや世の中にそういう名前前の結社はねえよ。お前らなんで克也がうちの大学にいるのか不思議に思ったことない？」

3人も特にないという顔をしたので、最上はふうんと息を吐き出した。

「あいつの能力はどうみてもワールドレベルだろうが。大学つつたらアメリカ当たりから引き合いが来たはずだと思わねえの？」

そう言われてみれば、辞書でもすぐに暗記できそうな克也の記憶力があれば言語の違いなど問題にならない。どの国の学校に進学しても良かったはずだ。

「あいつを日本から出さないのは国策なの。あの才能を最も求める人間から守るのに都合が良いから。」

「求めている人つてのが悪の秘密結社ですか」

大木が問いかけると最上は頷いた。

「いい機会だから教えてやろうか。悪の秘密結社はな、現実世界では国防という名前を名乗っているんだよ。」

なるほど、と一同は納得する。克也の能力を軍事目的に伸ばしたくなる人間は当然いるだろう。そういう人間にしてみれば、ちんたら大学など通わせておくのは時間の無駄に思えるかもしれない。

「でもさー。」

犬丸が戸口付近に寄りかかりながら口を挟む。

「そんな大物が絡んでるにしては、この顛末は恐ろしくお粗末じゃないですか？」

最上も苦笑いして頷いた。

「確かに克也を狙う人間のリストに悪の秘密結社の名前はがあるが、今回はそこまでの大物は噛んでないだろうな。」

大木の疑問はかろうじて説明可能な仮説が否定されたことで暗礁に乗り上げた。

大木説が途切れた沈黙を破って犬丸が壁に寄りかかったまま声を上げた。

「克也が天才だから誘拐されそうになったっていう前提がそもそも間違いなんじゃないの。一応まだ子供だし、体も15歳にしては小柄だし普通の子供の誘拐だと思ったら、少しは意味がわかる気がするけど。」

研究室に居る人間にしてみれば驚異の速度で新しいことを学び覚え、予想もつかなかった応用までこなす克也を日々見ているので克也自身の価値がクローズアップされてしまうが、克也は天才であると同時に子供だ。

「子供を誘拐って身代金目的か。それなら小学校に行った方がいいんじゃないのか。その目的で大学に行くのは納得行かないな。」

針生が正論で反論する。

「まあねえ。でも克也ってそこそこ儲けてる会社の息子だし、なんせ有名な天才だし、身代金がつぼりって思えば悪いターゲットじゃないと思いますよ。」

犬丸が身代金目的説を推すと、赤桐が驚いたような顔をする。

「克也って社長の息子なの？」

「あれ？これって秘密にした方が良かったかな。最上先生？」

犬丸が問いかけると、最上は苦笑して首を横に振った。

「ちよつと検索かければネットでも分かる話した、別に構わん。」

「そっか、そうですね。克也はねえ、山城酒店っていうソコソコな酒屋さんの社長さんの子供なの。さっきの乙女さんが社長さんね。その会社もまあまあいい商売してるんだけど、バックにもつと大きい造り酒屋がついてて、酒造業界では有名なお店だよ。当然大金持ち。」

赤桐は「へえ」と言っただけで知っていたか、というつもりで針生と大木の方をみる。針生は首を横に振って初耳だと示した。さすがにスパイ志望の大木はそのくらいの背景は知っていたようだ。

「そっち狙いなら、あえての克也狙いで、結構浅はかな人達が来ちゃったつてのも分からなくはないかなあ。」

悪の秘密結社よりは現実的で説得力がある仮説だが、これはこれでお金が欲しい誰もが容疑者になりえるので、それ以上先へは推理が進まず暗礁に乗り上げた。

榊原探偵団の推理 - 2 (前書き)

赤桐と針生編。

「そんなことより、気になるんだけど」

今度は赤桐が口を挟んできた。

「襲ってきた男が言ってた克也のボディガードって話。そんなのいるの？最上さん、なんか知らないの？」

最上は突然質問を振られて、ちよっと思いつくようにした。確かにそんな話を克也も猿君もしていた。

「ああ、覆面ボディガードでもつけてるのかつてことか？少なくとも猿は違うぞ。猿は本当に去年まで行方知れずだったのがひよっこり帰って来て復学するっていうからよ、1年生の頃に面倒見てやった腐れ縁で戻ってきたはいいけど引き取り手のなかつたところを、うちの研究室に引つ張ってやっただけだよ。」

事実、榊原教授、最上と猿君は猿君出奔前からの付き合いである。「他は？実はこの中に特殊任務のために学生のふりをしてる人とかいないわけ？」

赤桐は興味津津という顔で居並ぶ面々を見回した。

「うちの研究室なんか、入学から研究室配属に至るまで後ろ暗い奴ばかりなんだから腹の探り合いしてもしょうがねえよ。お前も聞かれたら困るだろうが。」

最上に言い返された赤桐はぐつと詰まった。赤桐も猿君同様に最上と榊原教授が裏から手を回して席を用意してやっただけだ。

「つまんないの。そのボディガードがどっかの組織から来ててさ、ヤクザの抗争のもつれが飛び火してんのかと思ったのに。」

「お前は任侠映画の見過ぎだ。」

最上が言下に切り捨てて赤桐の疑問も打ち捨てられた。

「動機はどうあれ、今回の犯人は克也を誘拐したかつたんですかね。」

針生は眉を寄せながら呟く。

「克也を攫いたいなら、なんで猿君と一緒に居る時という一番失敗しそうなタイミングでやってきたのか理解に苦しむ。数日様子を見ていけばもつと簡単に克也を捕まえられるタイミングが分かるはずじゃないですか。確かに、このところ赤桐さんの車で送迎してたから自転車で移動していた今日は狙い目だったかもしれないけど、電車の中で凶器でも突きつければもつと楽に行っただんじやないですか？ただ何か脅しをかけたかっただけで、かつ、他の学生に目撃させることに意味でもあつたんですかね。それが偶々猿君だつたて言うのは、事前調査が足りないと言えないうすけど。」

送り迎えは以前に針生が疑問を呈した通り、帰り道の限られた時間帯でしか行われていない。克也は朝の通学時はバスを使用しているため常に人混みを移動していることになるが、日中ちよつと校外に出たりすることは禁じていないので一人になる可能性はある。また、早い時間に帰宅する場合や、電車に乗ってからしばらく克也は一人だ。確かに誘拐目的ならば、何も一番大柄な友人と一緒に日を狙うことはない。

「だいぶましな着眼点だな。」

最上は針生を見やる。本当に惜しい人材だと思う。榊原研究室とiggottした煮的研究室ではなくもつと筋の通った研究室で、もつと筋の通った教授に指導を受けていれば今頃は学生を指導する側にいてもいいような人材だ。真面目で冷静、神経質だがその分観察眼が鋭い。マゾ呼ばわりされる程度にストイックに努力できる。なんで消えるトイレットペーパーにそんなに惹かれてしまったのか。もつとたいない。入学時点から明らかに裏金の流れを感じる犬丸や、研究者としての未来に欲が無い赤桐とは一線を画す学生だ。今からでも更生して学会の未来のために羽ばたいてほしいものだ。

「誘拐よりも脅迫目的と考えた方が早く犯人にたどり着くかもしれない。」

「犯人？犯人捜すんですか？」

大木は、意外そうに最上に問いかける。一般市民の常識では事件の解決は警察に委ねられるものだ。しかも万引きなどではない。刃物をもつての誘拐未遂など素人の手を出す分野ではない。ここであれこれ言い合っているのも結局は警察に任せることになるのだと思っていた。

「どうかな。」

最上は首をかしげる。最上が説明する気がないのを見て、大木もそれ以上は聞かなかつた。

「強引かつ浅慮なやり口は、今日という日付に特別な意味があつたか、何かの期限が迫っていた位しか考えられませんね。最低限自転車で移動していてくれれば今回の作戦は決行可能なわけだし。車で送ろうとしていたら、今回姿を見せなかつたもう一台が出てきたとか、違う展開があつたかもしれないし。しかし、今日という日の意味はさっぱり分かりませんけどね。」

針生の疑問もまた行き詰まり、暗礁に乗り上げた。

沈黙が降りると話に飽きたのか、手術疲れか、寝てしまった猿君の寝息が急に大きくなって聞こえる。その場違いなまでの安らかさに脱力していると、山城乙女と克也が戻ってきた。

猿君も寝入ってしまったことだし一度解散とする。乙女と克也が帰宅した後も、みな何となく猿君の傍に残っていたが、榊原教授が病院に来られるのはかなり深夜になりそうだと黒峰から連絡を受けたのを潮に最上を残して帰宅していった。

榊原探偵団の推理・2（後書き）

あらゆる推理が行き詰りました。さて、どうする教授？

山城和男の悩み（前書き）

お父さんの独白。

山城和男の悩み

江藤克也の現在の養父である山城和男は、出張先で妻から息子が運動会で活躍したのでお祝いの席を設けると連絡を受けた。どうして突然に運動会なのか分からないが、良いことがあったようなので、仕事を切り上げて帰路についていた。

40代も半ばを過ぎて名刺も持たない彼のことを金持ちのどら息子と思っっている人も多いが、働いていないわけではない。ただ、人に言えないような仕事をしているだけだ。後ろ暗い、平たく言えば産業スパイやあまり表に出せない興信所のような仕事だ。時には名前を変えたり、身分を偽ったりもする。名刺などおいそれとは差し送せないのはそのためだ。

しかし、この職業が克也のために役立つことも多い。身の回りに不穏な影が絶えない克也のために、そこそこに潜り込んで情報を仕入れることは親鳥が雛の為に餌を取るのと同じようなものだ。克也がやってきてからのこの5年間、和男はそればかりしているとも言える。和男が、こんな調子なので代わりに妻の乙女が世間体を保つてくれている。実家でも大変評判のいい働き者の妻だ。愛情が深くて頭がいい。山城家にはもう一人、家族と言える同居人がいる。家政婦の吉野だ。結婚当時、自分の仕事から起こるトラブルが妻に及ぶことを恐れた和男はボディーガードを雇うことを検討した。ものものしい男など置いておいたら、この人を避けてから襲って下さいと言っているようなものだ。目立たない、それとなく守ってくれる人がいい。そう思って家政婦兼ボディーガードという求人を出した。応募してきたときの吉野は20歳そこそこで、幼い子供を抱えてお金に困っていた。子供好きの乙女は子供を連れて仕事に来てくれたら、自分も子供と遊べると大喜びした。もちろん家政婦の仕事も、ボディーガードとしても吉野は十分優秀だった。そうして数年

がたつて、家に克也がやってきた。以前に仕事で知り合った江藤幸助氏からの直々の依頼だった。

うちの家族を見込んで、自分の死後は孫の世話をお願いしたいと言われた。可愛らしい克也。聞けば、その幸助が死ねば天涯孤独になるという。引き受けない理由はなかった。

家に向かう途中の和男に、克也が襲われたと連絡が入る。残念なことに「またか」と思ってしまう。克也にはいつも危険が付きまとう。山城家の財産をあてにした身代金目的の誘拐、大きくなつてきてからは有名になつてきた息子自身を人身売買のように求める者が次々現れた。結果の軽重を考慮しなければ、誘拐未遂だけで5回も事件に巻き込まれている。

乙女が克也の元に向かっているということだったので和男はそのまま帰宅し、克也の帰りを待った。途中、乙女から電話が入り息子の無事と、一緒にいた友人が大けがをしたので手術終了まで待つてから帰宅するという。これまで克也のまわりで起きた事件の中で一番深刻な事態だ。ともかくにも二人とも命に別状はないらしい。吉野と最近の出来事を話しながらただ待った。深夜にようやく玄関が開いた。

「お帰り、克也。」

15歳の克也は相変わらず可愛らしく成長期の気配を感じさせない。

「ただいま。おかえりなさい、和おじさん。」

「おう。」

和男は反抗期にも縁が無さそうな素直な克也の頭を撫でた。

克也と乙女の帰りを待っていた吉野が寝る前に食事をとるか確認する。本当ならばお祝いの席だったはずの夕食のメニューはトンカツだったが、この時間に揚げ物は厳しい。残念ながらメニュー変更となった。二人は何も食べていなかったようなので少し食べさせようと吉野は食事の準備を始めた。食卓の準備が整うまで家族は居

間に落ち着いて今日の事件の経緯を聞いた。克也の話聞く限り、これまでの事件の中でもっとも性質が悪い。八面六臂の活躍をしてくれた友人が一緒になければどうなっていたか想像に難くない。友人は大げがをして入院中だと言うが、よくぞ息子を守ってくれたと、和男は今からでも駆けつけたい気持ちに駆られる。

克也の帰宅が遅かったのでかなり遅くなってしまった夕食の席では、事件の話は一旦打ち切りとした。和男は最近聞いていなかった研究室のメンバーの話など学友の説明や、本当なら今日の主題になるはずだった運動会の話聞く。やっと克也にも友達らしい友達ができるかかと安心する。話が入院中の友人に及ぶ度に悲しい顔をする克也をみて、もっと子供らしく嬉しそうに自分の活躍を話してほしかったと思う。数時間前までは、きつとそうできただろうに、と悔しく思うが起きてしまったことはどうしようもない。

「よくやったな、克也。」

和男はまた暗い顔になった息子の皿におかずを移してもっと食べと促した。楽しい思い出を大事にしなければ。彼はこれまでに辛い思いをし過ぎている。

夕食が終り、皆でお茶を飲みながら再び誘拐未遂の話に戻る。今度は明日からの話をしなければならぬ。

「克也、今日の事件のことだけだな。」

改めて口火を切る。

「また、似たようなことがあると困る。お前にもお前の友達にも怪我をさせたくないな。まず通学は去年までと同じように吉野さんに送り迎えをしてもらおう。学校の中にいるときは、人の少ないところは避けるように気をつけるんだぞ。お前は何かに夢中になると他のことが一気に留守になるから、研究室以外の場所では研究のこととは考えるな。わかったか。」

克也はこっくりと頷いた。

「和おじさん、学校は休まなくていいんだよね？」

聞きながらも克也は心配そうな様子で、そんなに学校が楽しいのかと周りの大人たちは場違いに嬉しくなる。

「休まなくていい。」

克也はほっとしたようで、分かったという吉野に向き直って「明日からよろしくお願ひします」と頭を下げた。吉野はちよつと驚いたように目を瞬かせたが、すぐに笑顔になって「承りました」と頭を下げ返した。こうした状況で吉野に手間をかけることになる判断して頭を下げるなど、これまでの克也には出来なかったことだ。和男は驚いて妻を見やったが、妻は目だけで「後で」と返してきた。「克也、私と和男さんで今日怪我をしたっていうお友達のお見舞いに行こうと思つているんだけど、いいわよね？」

克也はどうして確認されるのか分からないという顔で頷いた。

「じゃあ、克也も今日事件の後に迎えにきてくれた先輩や、心配して来てくれた研究室の皆さんに明日ちゃんとお礼を言つてね。」

乙女が念を押すと、今度は心得たように深く頷いた。

「よし、じゃあ、今日は色々あつて疲れただろうからもう寝なさい。吉野さんには明日の朝、八時半出発で送ってもらえばいい？吉野さん、悪いけどお願ひしますね。家の方は戻ってから片付けてもらえばいいから気にしないで。私も手伝うし。」

克也は風呂に追い立てられた。警察が出動するような事件に子供が巻き込まれた家庭にしてはやたらとあっさりしたものだ。残念ながら進級と同じくらいの頻度で克也が事件に遭うので毎回お通夜のごとく沈んでも居られない。人間は慣れて行く生き物だ。

克也と吉野が風呂に入って寝室に引き上げてしまつて、和男と乙女は二人で居間に残つた。

「なんだか、克也は随分人間らしくなつたな。」

「あなた、なんて言い方ですか。大人らしくなつたと言いなさい。」
和男が声をかけると乙女はぴしゃりと言ひ返した。

「まあ、そうともいえる。いつ誰に感謝したらいいかとか、あいつ

ずっと苦手だっただろう。いつちよまえによろしくお願いしますとかいうから、感動したよ。」

「そうねえ、私も事あるごとに言ってたけど、ケースバイケースでしか理解してなかったものねえ。最近よ、本当に4月に研究室に入ってからじゃないかしら。人に気を使うことを覚えだしたのね。」

人間関係がずっと苦手なようだった克也にとっては大進歩だ。

「榊原さんとここに預けて正解か。こういう効果が出る分かってたのかね。」

「どうかしら。私は予想外だけれど。」

山城夫妻は引き取った時から克也の進学先を幸助の遺言どおりにすることが正しいのか悩むことが多かった。彼の才能を誰より早く見抜いていたのは彼の亡父である江藤友助だったそうだ。ただし、友助は克也が物心つくかつかないかの時期に帰らぬ人になった。自分の妻が既に他界し、係累が少ない中で自分にもしものことがあればと心配していたのだろう。自分の実父である江藤幸助に万が一の場合の措置を依頼していた。この心配性な気配りがなければ今の克也は山城家にはいない。祖父に引き取られた克也は小学校から特殊な事情の子供たちばかりを集めた私立学校に通っていた。心配性は江藤の血なのか、自分が高齢であることを意識したのか江藤幸助も早めに自分の死後の手を打っていた。その中に含まれていたのが山城家に克也を託すことであり、成人まで榊原教授のもとで指導を受けさせることだったのだ。榊原教授の在籍する学校や学部が克也の進路として違和感のないものだったので、克也自身は祖父の遺言によって研究室が決まったとは気づいていないだろう。

幸助の遺言に従うにあたり、山城夫妻も榊原研究室について下調べをした。幸助がこの研究室を指定したときから5年経っている。当時とは状況が変わっているかもしれない。自分達で確認した方がよいと思ったのだ。結果、驚くほどバラエティに富んだ経歴の集団で、ここに克也を預けていいものかと逡巡したが、榊原教授本人の説得もあって進学を認めた。何より幸助の遺言に背くということは

非常に勇気のいることなのだ。見届け人がいるわけではないが、言うことを聞かなければ呪うという気迫に満ちた瞳で息子を託して逝った。その呪縛はいまだ有効だ。

研究室に通わせてみれば、学校の友人の話を家でするなど、これまでついぞ見られなかったことが次々おこり、判断は間違っていないかたかもしれないと思えた。

問題は一方で、匿名で研究室メンバーの情報を送りつけてくる人物がいることだった。馬鹿馬鹿しいと思いはするが、一部は山城夫妻自信が調べたものと同じ内容を含んでおり、まるつきり嘘だと無視することもできなかった。

乙女がため息と共に居間のテーブルに置いた書類をばらばらとめくる。この春からずっと送りつけられてきている手紙の一部だ。

一枚目のシートには最上一樹と名前が入っている。元広島の暴走族。窃盗、公務執行妨害の他、もちろん暴走行為による補導歴がずらりと並んでいる。とても最高学府で教鞭をとる人間の経歴ではない。もつとも成人してからは大人しくしているようだ。

二枚目の赤桐唐子も同様だ。二人は同郷で時期はずれているが暴走行為に没頭して青春時代を過ごしたらしい。いずれも自分たちの調査内容と一致している。

三枚目は針生義一。彼の経歴は綺麗なものだ。ただし東東大学の在籍期間が長く、榊原教授と一緒にあって企業から金を巻き上げているとある。この事実については和男の調査では確認できていない。四枚目の大徳寺光明は古くからある暴力団大黒組の本家の息子だ。現役の暴力団構成員である。前科は全くないが、明らかに揉み消しているだけだと思われた。

五枚目の大木圭介は東東大学への裏口入学について記述されていた。彼も若い頃に補導歴がいくつもあり、素行に問題があるようだ。彼の経歴は和男が調べる限りごく普通の学生であり、この調査結果も疑わしい。

六枚目は猿渡桂蔵。消息不明になっていたこの4年間、海外で傭兵養成組織に身を置いていたとある。ゲリラと関係がある可能性も示唆されている。これについては全く確認する術がない。

もう一枚、黒峰優花。彼女はメイクアップの専門学校を出た後ストリートで現職についており、その異色の経歴が目を引きだ。ただし神原教授との血縁関係があるとされており、縁故採用と思われる。神原教授の血縁なら却って信用できる。もはや縁故採用など些細な問題だ。

妻は、猿渡のシートを取り上げて破り捨てた。

「この人が、克也を守ってくれた。」

次に最上のシートを取り上げて破り捨てる。

「この人も、絶対悪い人じゃない」

残った4枚を見つめて眉を寄せる。

「4人ともお会いしたけど、まだ分らない。」

そう言つて4枚を重ねてもう一度封筒にしまう。克也の友人を信じられないのは悲しいことだが、山城夫妻はもう家族以外は無条件に信じないことにしていた。過去の誘拐未遂の中には学校の教師が手を貸していたことも、同級生の親が情報を流していたこともあったのだ。無邪気に人を信じるには克也の周りには羊の皮をかぶって近づいてくる狼の数が多過ぎる。

榊原探偵団の捜査 - 1

事件発生の翌日、猿渡家は家庭の事情が許さず猿君の付き添いができないことが判明した。他にこれといった友人が見当たらないので、研究室の人間が交代で様子を見に行くことにした。それ以外は皆いつも通りだったと言える。

研究室の奥にある教授室も外から見ると通常通りだ。しかし中では黒峰を交え、3人で今回の事件の後始末について相談していた。教授室は完全防音構造になっており、こうした大人の内緒話に便利である。

「山城さんとも話してみたのだがね、克也君はこれまでに5回も誘拐されそうになっているそうだが、今回ほど乱暴なことはかつてなかったということだったよ。」

榊原教授は教授用のちょっとしたいい椅子にもたれている。

「5回とは随分多いですね。で、今回の首謀者の目星はついていませんか。」

最上が、学生よりはちょっといい程度の椅子で頬づえをついたまま質問する。

「ある。ただ、これほど強引な方法に出た理由が良く分からないがね。」

「可能性としては、何か切羽詰まった状況に追い込まれたんでしょうかね。」

「そんなところかね」

一見、二人の間には何の緊迫感もない。試験問題のレビューをするときよりも緊張感が無い。

「まあ、これ以上のトラブルは無用と願いたいし、とにかく心当たりの大本命を早めに押さえておくに越したことはない。ちょっとこちらで調べてみようかと思うのだよ。出せるような証拠が無いから

警察にはまだ言えないが。」

榊原教授の広い人脈は馬鹿にならない。克也に関心を示している人間をあらゆるコネを使って調べ上げるなど朝飯前である。しかも、克也の祖父とは学生時代から親交のあった榊原教授は、江藤幸助本人から克也をくれぐれも頼むと言いつづけているという経緯がある。大学入学時点で既に彼の身辺を確認し、数名の何かやらかしそうな人物リストを握っていた。今回の事件の報告を聞いて、すぐに一覧上の人物で今回の件に関係があり得る者をピックアップした。その後、警察の捜査状況をなんとか聞き出し、容疑者を絞り込んでいた。大活躍の各種のコネについては自分の生命線であるからして学生はもとより、最上にも警察にも、どうやって容疑者をしぼったか明確に説明できないのが難点だ。

最上は心得たもので余計なことは聞かなかつた。

「とりあえず最上君が適任と思うのでお願いできるかね。」

最上は「またきた。」という表情を隠そうともしなかつた。研究室の小人さんにはいつも面倒な仕事が振りかかる。榊原教授は最上の反応に怯むことなくもう一言続けた。

「君の知り合いのようだしね。」

最上が自分の知り合いで今回のようなうっかりした事件を起こすような人物はいたかどうかと思いついてみたところ、候補が腐る程いたので力なく項垂れた。

「それから大木君にも協力してもらった方がいいかもしれないね。」

大木はスパイおたくが高じて法律スレスレ、というか完全アウトのところまで行っている。もちろん、外向けには教授陣は知らぬ存ぜぬで通しているが警察のシステムやら町の監視カメラ映像やらのデータをハッキングできるといつかを知っている。スパイが罪に問われる国でなくても、立派な犯罪である。しかし、非常時には有益だ。普段見逃してやっている分、多少働いてもらうことにする。

それから3人は詳細の確認を行った。打ち合わせが終ると、通常

通りのスケジュールに戻り榊原教授は共同研究の依頼を出されている企業との面談に赴き、黒峰は実験室の予約調整を始めた。最上は大木を呼び出して任務を伝えると、そのままタバコをふかしに外へ出て行った。

「面倒くせえなあ。」

吹きさらしの喫煙所でタバコをくわえつつ、最上は独り言をいう。面倒くさいのはこれから榊原教授の代理で出席する無為に長い教授会よりも、その後にはやらねばならない作業の方である。榊原に指示された大本命について調査し、今回の一件に関係があるか確認しなければならぬ。関係があることを証明するのは容易いが、関係がないことを証明することは難しい。どういう手順で確認していかとプランを練る。

最上が調査する対象は四方田彦治よもたひこという男である。最上が四方田と知り合ってから既に20年近くが経過している。古い知り合いであった。

最上が以前に在籍していた大学は西の雄、某西大学である。三流大学で極めて適当な学生生活を送っていた最上を学長であった四方田が某西大学に一本釣りしたのが出会いである。どうやって情報を得たのか知らないが、最上の金属組成に関する研究を嗅ぎつけ将来性ありと見込んで高額な給与といくつかの最上の弱みをちらつかせて引き抜いたのだ。当時、最上の研究成果は改造車と改造バイクをこよなく愛する学会とは縁もゆかりもない世界でだけ知られていたことなので、四方田の情報網が通常の研究者が持っているものより遙かに広がったことは確かだ。ちなみに、今も昔も最上の研究テーマは強くて軽い金属の生成である。当然、産業分野においては引く手あまたの人材である。本人の素行さえも少しよければ、企業の研究所からの誘いも多く入るであろうが、企業との共同研究をする

たびに研究所の女子職員に次々と手をつけて食い散らかしていくためか企業からの移籍の誘いは全く来なかった。

「やっぱ面倒くせえな。」

そうは言っても最上は自分の研究室の学生を、舎弟のように思っているので克也を誘拐しようとしたことも猿君に怪我を負わせたことも捨て置くつもりは毛頭ない。若い日にはその義侠心の厚さで多くの不良少年、不良少女に慕われたものだ。

タバコを吸い終わると、頭を切り替えて教授会の行われる会議室へ向かった。

翌日の昼過ぎに、教授室にて大木の調査結果が報告された。警察が話してくれない最新の捜査状況を探らせていたのだ。猿君と克也を襲撃した車は盗難車登録済みの黒いセダンで、盗難に遭った場所は台東区となっていた。念の為、元の持ち主の情報も控えられていたが子持ちのサラリーマンで本件には関係ないと思われた。

「それから、映像が取れるものは落としておきました。照合をかけるデータベースが絞り込めなかったので身元は特定してませんが。」

画面には逮捕済みの4人組の写真があった。

「犬丸さんにも確認してもらいますか？」

黒峰が榊原教授に問いかける。猿君と克也が目撃した外見および大木が調べてきた捜査状況から実行犯が暴力団関係者であることは確実である。その道のプロフェッショナルである犬丸経由で探した方が早く身元が確認できる可能性がある。

「大木君、この写真の出元が分からない様に加工できるかね。」

「すぐできますよ。」

大木はけろりとした顔で請け負った。

「では、そのデータを犬丸君に見てもらって心当たりを当たってもらうとしよう。助かったよ、ありがとう。」

大木の特技であるハッキングは犯罪行為なので当然だが、なかなか日の目を見ない。こうして教授にお礼を言われて嬉しそうに去っ

て行った。

宣言通り30分もしないで大木がデータを犬丸に渡し、犬丸が信頼のおける筋に男達の身元を問い合わせると、あつという間に結果がでた。

同日の夕方には今度は犬丸が教室にいた。

「運転手はこの手の運転のプロですね。うちもたまに使うからすぐわかりましたよ。」

この手とは、犯罪に関するということなのだろうが、犬丸は良く出前をとる蕎麦屋の説明と変わらないテンションでそう言った。

「運転手は、言ってみればフリーランスなんで先日の雇用主は誰かを問い詰めないとそれ以上つながらないと思いますけど、まあ同乗してた奴らの組に雇われていたんでしょね」

犬丸は手に持っていた残り3人の男の写真を示して、こつちですけどと続ける。

「こつちは岡島組っていうところの下っ端です。こいつらのくつついて回っているのは矢島っていうらしいから、順当にいったら矢島が後ろに居るんだと思いますよ。」

あつさりしたものである。警察が言いたがらなかった名前まで分かってしまった。犬丸から矢島と運転手以外の3人組の名前を聞き出す。さらに、矢島が出てくる場合に関係がありそうな幹部の名前も確認する。

「助かったよ、ありがとう。」

榊原教授が途中で礼をいうと、犬丸は意外そうに首を振った。

「いいんですよ。何もなくても克也と仲良くなっていっぱい恩も売っておくつもりでしたから。先行投資です。」

真顔である。しかし、実際に犬丸が克也に普段していることはラメンについて教えることと余計なことを言って困惑させることだけである。真面目に恩を売る気があるとは思えない。

「お前は克也の素直さをもうちよっと思習え。」

最上が本当はただ克也を気にいつているのだと言えはいいのに、と苦笑する。

「素直ですよ。」

犬丸は胸を張った。本当に大人になると人間は素直でなくなる。克也の素直という美德が輝いて見えるのは周りが歪んでいるからかもしれない。榊原教授も最上もそれ以上言わずに頷くと、犬丸は「ところで」といらないことまでペラペラと喋ってから退場していった。犬丸流の照れ隠しである。

二人だけになった教授室で最上は榊原教授を見やった。

「うちの学生は本当に優秀ですね。教授がそういう生徒を選んでいるとしか思えませんけど。」

「そういう」を強調して最上が言うと、榊原教授は目を細めて最上を見返した。

「学生に限らず、我が研究室は優秀な人材に恵まれて喜ばしいことだね。」

学生に限らず、ね。と呟いて最上はため息をついた。

噂の二人(前書き)

探偵団の捜査は一回お休みです。

噂の二人

猿君が入院している間、克也はローテーションとは関係なく毎日病院へ行つて出来る限り長い時間を猿君と過ごした。

榊原教授が最上に説明したように克也はこれまで5回の誘拐未遂に巻き込まれている。本人が気づかぬうちに事無きを得たものも、連れ去られようとした現場で吉野や和男に力づくで取り戻されたこともある。誘拐未遂以外の事件にも何度か遭遇したこともある。いくら始終天然ボケの克也でもこうした事件が度重なれば自分がトラブルの元だということくらいは察しがつく。しかし目の前で大怪我をした人を見たのは今回が初めてであり、大きなショックを受けた更には、初めてできた友人が自分のせいで怪我を負い、それが死に至る可能性があったということに彼なりに責任を感じていた。

夜になれば血まみれだった自分の手を思い出し、自分が猿君を刺したのではないかという錯覚まで覚えて飛び起きる夜が続いていた。山城家が大きすぎるので山城夫妻が気がつくことはなく、克也は人にものを相談する習慣がなかったため、その事実を知っている人はいなかった。

克也は猿君と一緒にいるときはずっと猿君にどこかしら触れながら、話をしている。当たり前だったことが、急に当たり前でなくなるといふ以前の赤桐の言葉を思い出して、当たり前前に生きている猿君を確認しているのである。

「猿君は、起きられるようになったら何がしたい？」

猿君は「うーん」と唸ってしばし考える。

「そつだなあ、動物園に行きたい。」

「動物園？」

克也が聞き返すので、猿君もその日の当番で病室の隅で雑誌を読んでいた赤桐も克也が動物園を知らないのかと思つた。

「知らないか？」

「ううん、昔、和おじさんに一回連れて行ってもらった。」

二人はほっとする。良かった。なんとなく動物園に行ったことがない子供と言うのは可哀想な気がしてしまう。

「どうして動物園に行きたいの？」

「動いている生き物を見るのは面白い。」

猿君の返答は簡潔を極めた。一度見れば何事も忘れない克也にとつて動物園は一度行けば十分な存在だが、生き物の動きは常に変わっているのだからもう一度行っても楽しいかもしれないと思う。

「克也はどこでも遊びに行けるならどこに行きたい？」

今度は猿君が質問する。克也はしばらく考えていたが行きたいところはなかった。

「何もない。」

猿君は残念そうだ。

「子供のうちから色んなものを見ておいた方がいいぞ。」

今度は克也が複雑な顔をした。

「僕は、子供かな。」

15歳は微妙な年頃だ。

「子供は嫌か。」

猿君が聞き返すと、克也はまた少し考える。

「嫌じゃないけど、子供だとできないことがたくさんあるでしょう。大人になつたらもつと色んなことができるでしょう。」

赤桐が割り込んできた。

「大人もいいけどさ、克也。子供の時にたくさん遊んでおかないと、立派な大人にはなれないよ。」

赤桐は少々遊び過ぎの子供だったが、その経験がなければ今の自分がないことには自信がある。

「子供にしかできないこと？」

「そうだよ、我儘いっぱい言ったりさあ。ちゃんとやりたいこと考えてる？」

克也は困って猿君の方を振り返った。猿君はにこにこしている。

「克也、何も思いつかないなら今度一緒に動物園に行こうか。」

克也は頷こうとして、途中で固まった。

「どうした？」

猿君が問いかけると、俯いて首を横に振り直した。

「僕と一緒にいると、また怪我をするかもしれないよ。」

ぼつりと呟く克也に猿君はゆっくり体を起こした。まだ傷が付いていないので体を動かしてはいけないのだが赤桐も止めなかった。

「そんなこと気にしなくていい。克也のせいじゃないって言っただろう。」

「でも、僕がいなかったら」

克也が言い募ろうとするのを、猿君が遮った。

「襲ってくるのは、襲ってくる方が悪い。襲われる方じゃない。それに、友達だろう。友達っていうのは一緒に困難に立ち向かうものだぞ。また克也が危ない目に遭うというんだったら、なおさら俺はずっと克也の傍にいるよ。」

「僕は、誰かが僕のせいで傷つくのは嫌だよ。」

克也が必死に抵抗したが猿君は引かなかった。

「俺は克也が傷つくのが嫌だよ。次からはうっかり怪我しないようにするから。せっかく元気になっても一緒に遊びに行けないんじゃない生き残った意味がない。」

猿君が元気でいてくれても、もう話したり一緒に自転車に乗ったりできないならそれは失ってしまったのと同じことだ。克也はいかなる意味でも初めてできた友達を失いたくなかった。克也と猿君はつづらな瞳同士でしばし見つめあっていたが、ついに克也が「もう怪我しないなら」と言って目を逸らした。

それを聞いた猿君は笑顔になって「じゃあ、動物園の次はどこに行こうか。」と言い出した。

赤桐は、これは完全に愛の告白だなと思いつながら二人の話を聞いていた。そして、比較的最近に自分も克也に好きだと公言したこと

についてふと思ひ出した。

（でも克也に向き合うと、どうも好きだと叫んで抱きしめたくなくなるんだよね）

赤桐は頼杖をついてデートの計画を練る親子ザルを眺めつつ、克也が可愛すぎるのがいけないんだ、と結論付けた。きっと猿君は同意してくれる。最上あたりは自制心が足りないというだろうが、とりあえず彼はこの場にはいない。

その後の入院中の日々で猿君と克也はずっと遊びに行きたいところの計画を立てており、どのバカップルかと思うような熱愛ぶりであった。その様子を見守っていた面々の中には様々な疑惑が生まれていたが、節度を守って黙っていた。唯一例外の犬丸だけが、二人の友情について声高に違う感情ではないかと疑っていたが、無慮の権化の彼をして猿君と克也の前でだけは口をつぐんでいた。とにかく二人の間に強いきずがあるらしいことだけは、全員の認めるところであった。

噂の二人（後書き）

「のほほん」といっしょに「ぶぶぶぶ」ですね。

榊原探偵団の捜査 - 2

事件から2週間経過すると猿君が退院し学校へ帰ってきた。まだ行動制限があると言って荷物も持たずに手ぶらで登校してきたが、克也は喜んで珍しく授業をボイコットしてまで猿君の隣にいたがった。

猿君が登校を再開してさらに数日後、大本命の調査を命じられていた最上は、榊原教授に適当な出張をでっちあげてもらい大阪にいた。必要な下調べが済んだので、家宅捜索に入ることにしたのだ。無論、捜査令状はない。しかし、最上にとってはそれほど難しい作業ではなかった。というより、難しくなくなるように手を打ってあった。

まずは手っ取り早く入り込めるところで、某西大学の学長室に狙いを定めてある。だいたい、仕事に関する情報は職場にあるものだ。

木曜日の夕方、サングラスで夕陽をよけながら最上は何気ない様子で某西大学の教育棟に入って行った。入口付近で一日の清掃作業に取り掛かろうとする清掃員とすれ違うが、あまりの自然体にサングラスの着用すら不審がられることもない。この日、学長の四方田は所用で東京に出張していることは確認済みだ。なんせ、所用をこさえたのが最上自身なのだから間違いない。

若い頃には悪いことばかりしていた。もみ消した前科がいくつもあつた。それがアキレス健になつて某西大学への勤務も断り切れなかつたし、榊原教授の東東大学への誘いも断れなかつたのだ。若気の至りとは恐ろしい。最上は因果なもんだな、と若かりし日の自分が強引に勧誘を受けた、まさに現場である某西大学の学長室へ向かいながら苦い思いをかみしめる。この部屋にはいい思い出など何もな

い。

若い頃に悪いことばかりしたおかげで、鍵の閉まっている扉を開くのは得意である。先程すり取った清掃員のIDカードであっさり
と学長室の扉を開く。この時間、あの場所で清掃員のIDカードを
手に入れば良いことはもちろん事前に調査済みだ。最上には言い
寄る女の数だけの情報源がある。古巣の某西大学ならいくらでも抜
け道があった。更に防犯カメラの映像は東京から大木が操作してい
るので、誰かと物理的に遭遇するまでたつぷり時間はある。

（だいたい四方田なんて、御大層な名前つけやがって中身はただの
食えないオヤジじゃねえか。）

四方田の悪態なら24時間つき続けられる最上は心の中で四方田
を罵倒しつつも学長室の搜索を開始した。

一方その頃、御大層な名前で食えないオヤジの四方田は天敵たる
文部科学省の粟倉あわくらと対峙していた。傍目には太ったオヤジが二人、
紙コップに入ったコーヒー片手に世間話をしているようにしか見え
ないが、二人は確かに対峙していたのである。その時の二人には並
々ならぬ緊張感があった。

粟倉は正義感の強い男で、四方田が金に任せて優秀な研究員を他
の弱小大学から引き抜いたり、素行に問題のある人間を教員として
採用したりすることに十年來文句をつけてきた。数回は実際に四方
田の「買い物」を阻止した実績もある。四方田としては目の上のた
んこぶのような存在だ。蔑ろにしておいて、また「買い物」を邪魔
されては困るので呼び出されれば応じるしかない。

今回の呼び出しに四方田本人が東京に飛んできたことで、粟倉は
疑惑を深めていた。粟倉は自分が四方田に嫌われている自覚が十分
にある。できるだけ会いたくないと思っっているはずだ。全く後ろ暗
いことがなければ代理の副学長なり、教務部長なりをよこせばいい

のに自分が来るとは探られたくない腹があると言っているようなものだ。

(怪しい)

栗倉は美味くもない紙コップのコーヒートの酸っぱいような香りを嗅ぎながら、四方田の様子を観察していた。

一方の四方田も、この時期に栗倉から呼び出しがかかったことに疑惑を感じていた。目立ったことは何もしていないはずだ。予想外の時期の呼び出しは予期せぬ尻尾を掴まれている可能性があるといつも以上に警戒していた。

「久しぶりにお会いしたのに立ち話もなんですから、よろしければどこかあいている会議室でも腰を落ち着けてお話しませんか。」

栗倉が切り出して、ついに太ったオヤジ2名による大きな腹の探り合いのゴングが鳴った。

「ほほ。」

学長室の棚という棚、引き出しという引き出しに続けて本命のPCの中身を確認していた最上は小さな声を上げた。四方田は消したつもりなのだろうが、復元したメールやファイルの中から正に犬丸から聞き出した人間とのやりとりを発見した。すぐにデータをダウンロードする。データの転送を待つ間にさらに最近やり取りされた封書を確認する。興味深いと言えれば興味深い名前がたくさんあったが、克也の事件に関係ありそうなものはない。ピーツと低く小さな音を立てて動いていたPCの音が止まる。デスクトップデータのダウンロードが終了した合図だ。最上はすぐにメモリを抜き取り、片づけを済ませると耳を澄ませて一帯の廊下が無人のタイミングを見計らって部屋を出た。清掃員のIDカードは教育棟外の清掃会社の車の脇で落とす。十分な距離を移動してから大木に電話をかけ、監視カメラの乗っ取りを終了させる。

羽田へ戻るべく、その足で伊丹空港へ向かう。伊丹空港に向かう途中、難波のデパートに立ちより研究室に土産を用意するのも忘れない。今回の仕事はこれでお役御免となってくれればいいと儚い願いを抱きつつ最上は帰路についた。

「教授、きりがいいですよ。」

教授室にて、某大学の監視カメラ映像の操作の傍らタヌキの化かし合いを盗聴していた大木が音を上げる。端的にいうと飽きたのだ。同じように盗聴していた榊原教授は苦笑いして頷いた。

「そのようだね。いいねえ、こういうことにはばかり時間を費やせる人達は。」

そもそも最上がちよつとした知り合いを經由して四方田が以前、榊原教授に強引に奪い取られた教員を取り戻そうと無茶なことを画策しているという情報を粟倉の耳に入れたのが今回の呼び出しの発端である。当然、強引に奪われた教員とは最上自身である。四方田を目の敵にしている粟倉は、まず榊原教授にこの真相を内々に確かめにきた。当然、榊原教授は最近、最上の動向が落ち着かないので心配しているなどと嘯いた。最近の最上が慌ただしいのは榊原教授が便利に使い倒しているからなのだが、そんなことは粟倉の知るところではない。ただでさえ注目度の高い榊原研究室から教員を引き抜こうとは大胆不敵であると、鼻息荒く帰って行った。その後粟倉は証拠固めに走ったが、最上を引き抜こうとしている事実が無い以上、証拠は出ない。最上がそれらしく大阪と東京を行き来しているくらいだ。そこで直接探りをいれに四方田を呼び出したと言うわけである。いつもの粟倉なら証拠なしに四方田と直接対決などしない。しかし、今回は文部科学省のお偉方から早期解決のプレッシャーがかかっていた。かけさせたのは無論、盤石のコネを誇る榊原教授である。

四方田にはいつでも隠しておきたいことの一つや二つはある。遠回しに腹を探られれば長期戦になるのは目に見えていた。万が一、最上の名前が出れば出たで、10年以上前とはいえ金で横つ面をはいた事実があるので簡単には逃げられない。粟倉との対決は最上

が必要なことを調べ上げるために必要な時間を稼げる安全な手立てであった。

栗倉の秘書が予約した会議室に水やホワイトボードのほかに盗聴器も用意したことは、栗倉も四方田も予想だにしていなかった。最上の魔の手を逃れたければ秘書は男性にした方が良かった。

大木と榊原教授が片手間に盗聴を続けていると、最上から大木へ連絡が入った。まずは監視カメラの映像を通常の映像に切り替えるしばらくしてもう一度、今度は榊原教授の電話に連絡が入った。

「どうかね。」

榊原教授が軽い調子で尋ねると、最上からも簡単な返事が帰ってきた。

「黒ですね。」

「分かった、ご苦労だったね。」

榊原教授は白い髭を撫でつつ早々に電話を切る。

「大木君。もう大丈夫だ。念の為、この化かし合いの帰結を追っておいてくれるかな。」

大木は元よりその予定だったので、あっさり頷いた。

「ところで教授。最近色々立てこんでいて、本木教授のところのレポートが滞ってしまっていて、ちょっとご指導いただきたいのですけど。」

大木は真面目な顔でさらりと付け加える。予定外の作業に時間を散々割かされた謝礼を言外に要求している。

「それは大変だね。では明日にでもどうかね。黒峰君に話をしておこう。」

榊原教授はこっそり片眼を瞑ると、教授室を出て行った。本来、教授こそ毎日のスケジュールが目白押しでタヌキの化かし合いなどゆっくり聞いている時間はないのである。

最上が研究室に戻ってきたのは夜9時近かった。その時、珍しく研究室は無人大った。既に克也には迎えがきて帰宅していたが他の面々はまだ学校に残っていたにも関わらず出払っていた。犬丸はこしばらく取り組んでいた爆破シミュレーションソフトの計算が合わない、あらゆる爆発物の爆破実験を再開して実験室に缶詰になっている。赤桐は不具合調整の終わったバイクの試運転と称して夜な夜な近所を走り回っている。針生は非協力的な榊原教授の態度にもめげず、地道な素材開発実験に勤しんでいる。大木ははったりではなく滞った課題の対応に追われて図書館にいる。まだ、それほど忙しくないはずの猿君はリハビリと称して体育館にいた。

そういうこともあるよな、と最上はお土産に歓声をあげてくれる人の不在を少し残念に思いながら部屋を通り過ぎた。教授室へ入ると、最上からの連絡を受けた黒峰と榊原教授が報告を受ける準備を整えていた。

「ただいま戻りました。はい、おみやげ。」

最上は、たこ焼き味プリッツと抹茶プリンを黒峰に手渡した。そのまま、自席に座るとPC立ちあげて撮ってきた証拠写真とデータをプロジェクト経由で壁に映し出す。

「学長室で発見したものです。まず、これが犬丸が言っていた岡島組の人間とのやり取りと思われるメールですね。とにかく退学させると要求してます。」

メールの内容を勝手に要約して最上が解説する。

「メールは非常に少なかったです。電話連絡だったんでしょう。画像を添付するためにこれはメールになっている。」

添付されていた画像は榊原研究室のメンバーの顔写真だった。唯一猿君の写真が無い。

「猿は、この計画時点では研究室に配属されていることが知られていなかったんでしょう。あいつが復学手続きしたの新学期の当日でしたからね。」

次に画面が切り替わる。

「経過報告が一度だけ入っています。これも写真を添付したかったんでしょうね。追加で猿の写真と、こいつだけ経歴が洗えないという愚痴みたいなもんですね。岡島組とうちの研究室について話をしていたのなら、克也の退学の件と違って間違いのないでしょう。」

「いいながら、最上は画面をさらに切り換える。」

「こつちが克也を退学させた後に某西大に移籍させようとしていた計画の内容です。研究室や設備なんか用意していたみたいですね。この移籍が主目的だったんでしょう。四方田さんの引き抜きはもう病気だな。」

資料には思いつきり江藤の名前が記載されており、意図される内容は明らかだった。

「あと、おまけですけどちょっと面白そうなのもありましたよ。」

そこから次々と出てくるのは四方田の克也コレクションとも言えるデータと画像だった。四方田が大学入学時からずっと克也を熱く見つめてきたことが窺える内容だった。克也の研究結果や日々の生活の隠し撮り写真達である。

「こつちで訴えたらストーカーで引っ張れますよ。」

榊原教授もあきれ顔で頷いた。よほど克也が気になっていたのだらう。

「どうしてこんなに克也に執着するんだか。」

最上は延々と流れて行く四方田の克也コレクションを見ながら首をかしげる。優秀な人材が欲しいだけにしては異常な執着に見える。俄かに四方田の克也ストーカー説が浮上り教授室の面々は非常に残念そうに顔を見合わせた。

とりあえずの結論 - 1

前期も終りに近づいたある日に、山城夫妻が榊原研究室を訪れた。梅雨明けが近いのか晴れた空は空調の効いた研究室から外を眺める分には気持ちがいいものの、一步外に出れば蒸し風呂のような陽気だった。

「蒸し風呂？」

黒峰に研究室に戻るように指示をうけた犬丸が、外の通路を通って研究室へ帰ってきて愚痴ったのを聞いて克也は猿君の方を見上げた。

「克也はサウナに入ったことはあるか。」

「サウナ？」

なるほど、サウナも知らないのかと猿君は別の表現を模索する。こうしたやりとりは克也の教育だけでなく猿君の語彙力の向上にも役立つていた。

「蒸し風呂とサウナは基本的に同じものだ。風呂に入ったらあつたかいだろう。あれをお湯なしでやってみようという奴だ。部屋全体を暖めて、お風呂のお湯につからなくても、部屋の中にいたら体が温まるようにしてある。その部屋をあつためるのに蒸気を起こしたりするから蒸し風呂っていうんだと思う。」

克也は、ふむふむと頷く。克也の脳内では暖かい蒸気に満たされた湯船が想像されている。使う水の量が少なくて済みそうだと思う。「梅雨の時期は湿度が高くて暑いから蒸し風呂に入っているみたいだ、と表現するわけだな。」

「分かった。猿君ありがとう」

克也が素直に礼をいうと、猿君は笑って頷いた。

「蒸し風呂の説明聞いたら、暑さが蘇ってきた。」

犬丸は団扇を取り出してハタハタと自分を仰ぐ。克也は自分の質

問がいけなかつたのかと困った顔になるが、当然犬丸は気にしない。「お前はどうして余計なことばかり言うんだろうな。克也、蒸し風呂という単語はそれだけで気温を上げたり、湿度を上げたりはしない。心配する必要ないからな。」

団扇の風が微妙に当たるのが気にいらぬのか針生が心底嫌そうに犬丸を睨んだが、当然、犬丸は気にせず無駄に長い黒髪をなびかせている。

「せめて髪切ればいんじゃないの。」

あきれ顔で赤桐が口を出す。赤桐も肩の下まで髪を伸ばしているが最近はずっと束ねっぱなしだ。毎日長い髪を束ねもせず、なびかせているのは犬丸だけである。

「えー。」

犬丸は不服そうに自分の髪をつまんだ。その仕草も、物憂げな美女がすれば絵になるが、丸々太った犬丸では話にもならない。どうして髪を伸ばしたいのかと赤桐が更に追求しようと口を開いたところで、研究室の扉がノックされた。この扉をノックするのは部外者しかない。普段なら黒峰が対応するのだが、彼女がちょうど防音加工済みの教授室の中に入ってしまったので部屋にいた面々は顔を見合わせた。予期せぬ来客は珍しい。

「はい。」

結局、大木が扉を開きに立ちあがった。一度病院で会ったことがある女性と見知らぬ男性だった。

「あ、乙女さん、和おじさんも。どうしたの？」

克也が扉の方に寄ってきたので、大木は場所を譲る。

「今回の件でご迷惑をおかけした皆さんに御挨拶と、あと教授からも呼ばれているのよ。」

乙女の返事をきいて、克也はあっさり納得する。彼は来るのなら朝言ってくれば良かったのとは思わない。朝のうちに聞いていても何も状況は変わらないのだから今知っても同じことだ。

「教授ー。」

会話を聞いていた赤桐が教授室の扉をノックすると、奥から黒峰と榊原教授が出てきた。すぐに戸口付近に立っている二人の客に気が付いた。

「おお、山城さん、お呼び立てしてすみませんな。ええと、黒峰君、椅子を。」

黒峰が教授室の中から程度のいい椅子を出して来て研究室の真ん中辺りに並べた。針生も腰をあげて手伝おうと教授室へ入ると、黒峰に椅子を奪われたらしい最上が立ったままコーヒーを飲み干そうとしていた。程度のいい椅子というものは意外と余っていないものだ。

「みんなも、集まってくれるかな」

榊原教授が声をかけて、それぞれ自分の椅子を研究室の空いている隙間に移動させ、いびつな円を描くように全員が着席した。

「まずご紹介しよう。江藤君の保護者である山城さんだ。山城和男さんと乙女さん。殆どの人は病院で乙女さんにはお会いしたね。」

この頃までには皆、克也が保護者のことを和おじさん、乙女さんと口にするのを聞いたことがあったので保護者の名字が江藤でないことも、二人とも克也とはちっとも似ていないことにも驚かなかった。

「で、ここにいるのが私の研究室に現在在籍している全員です。乙女さんには以前ご紹介しましたね。こちらにいるのが黒峰君と最上準教授。」

榊原教授の斜め後方に両脇を固めるように座っている黒峰と最上は軽く会釈をした。

「最上君の隣から、大木君、赤桐君、克也君の隣が猿渡君、それからお二人を挟んでこちらに犬丸、いや失礼、大徳寺君、針生君です。」

それぞれ名前を呼ばれると軽く会釈をしていく。克也はその作法

について疑問に思つて横に座る猿君を見上げたが、猿君はちよつと顔を横に振つて今はダメだと意思表示をしてきた。

「山城和男です。息子がお世話になっております。このたびは皆さんにご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。」

和男が頭を下げると、犬丸は椅子の背もたれに寄りかかったまま「迷惑ではないでしょ」と一言つぶやいた。和男と乙女が不思議そうに顔を向けると、隣の針生も頷いている。

「みな、心配はしたでしょうが迷惑とは思っておりませんよ。」

榊原教授が犬丸の言葉を補うと、二人は揃つて教授に頭を下げた。「なんで教授に頭下げんの。」と団扇ごしに針生に囁いた犬丸は不満げだ。針生は黙殺する。

「そう言つていただけると有難いです。あの、猿渡さんその後お加減は？」

乙女が猿君の方に向き直る。猿君は大きな手を振つて、「いや」とか「もご」とか言った。大丈夫の意を示したかつたらしい。

「今日は、今回の事件の首謀者についての確信が得られましたので、お呼び立てしたのですよ。ついでに皆にも聞いておいてもらおうと思つて集まつてももらつたわけだ。」

榊原教授はそう言うと同を見回した。和男は慌ててちよつと腰を上げた。

「ここで、このまま話すのですか」

榊原教授は悠然と頷く。

「この話は、子供には」

和男氏が言い淀む。克也の前で話したくないのだ。克也には耳に入れなくていいことは聞かせたくない。榊原教授はそれを察したが、もとより聞く気はなかった。

「克也君も、知つておいた方がよいと思いますよ。何より一番の当事者であることだし。」

克也は突然、名前を呼ばれて驚いた。驚いて猿君を見上げると、

今度は頷かれた。

「榊原教授。僕が何を知っておいた方がいいのですか？」

素直に質問する。

「克也。」

乙女が諫めたが、克也は諫められた理由が分からずきょとんと乙女を見返した。

「江藤君、君を攫って行こうとした犯人と、今回の事件について君自身が知っておいた方が良かったんだよ。そうしなければ、教訓を次に生かせない。」

克也は、榊原教授の発言に異論はなかった。「はい」と返事をして静かにする。

まだ不満げな山城夫妻の様子を見て、犬丸が口を出した。

「あんな事件にあつて、真相を知らされなかつたら毎日不安になつちやうと思っけどな。」

相手が初対面でも、どこにも遠慮が無い。とはいえ、最もな言い分ではある。

「よろしいかな？」

榊原教授は山城夫妻の迷いを見てとりつつも割り込まれる前にさつさと話を進める。

「今回の事件の首謀者をちょっと独自に調査しまして、確証を得るにいたりました。ただし、警察に持ち込める種類の情報ではないので、ここで関係者だけに共有したいと思います。その点、ご理解ください。」

警察に言えない情報というのは山城夫妻にも大いに心当たりがある。それについての異論はなかった。

「まずは、これまでに分かったことをお話します。その上で、どう対処していくかを御相談させていただきたい。」

榊原教授は軽く咳払いして、カリスマ教授らしく一気に全員の注意を引き付けた。

とりあえずの結論 - 2

「まず、江藤君と猿渡君に襲いかかった実行犯は岡島組という暴力団の下っ端幹部とそのさらに弟分だったわけですが、彼らはもつと上の幹部から頼まれたらしいですな。江藤君の顔写真と居所の情報を与えられて、ちよつと脅かして来いと言われたようです。脅かして東東大学の退学を迫る予定だったそうです。一体どんな文句で迫る予定だったかまでは分からないのが残念ですが。」

榊原教授の語る情報の中でも、退学を迫る予定だったことは最上、黒峰を除く研究室のメンバーにとつても初耳だった。そんなある意味どうでもよさそうなことで銃まで持ち出すとは大げさだ。

「随分切羽詰まった感じですね。」

針生が小さな声で呟く。拳銃を持ち出してまで学校をやめると脅迫するとは計画自体が異常としか思えない。犯人の追いこまれていた状況が気にかかった。

「確かに、追い詰められて思いついた苦肉の策としか見えないね。どうして岡島組はそんなに追い込まれていたのか。そして、誰に。岡島組は大きなお金の入る取引を控えていました。組の存亡を左右するほどの大金でした。それを成功させるのにどうしても必要な人物が、協力の見返りに要求したのが江藤君を本学から退学させることです。その期限が前期が終わる前ということだったようです。この依頼をした人物は後期を待たずに、江藤君を別の大学に移籍させる計画だったようですから。伏せておく意味が無いので言いますが、今回の事件の発端になった人物は某西大学の四方田学長ですよ。彼が、江藤君を自分の大学に引き抜きたかった、というのが今回の事件の発生理由です。」

そんな一気にしゃべったら死んでしまう、と猿君は明後日な心配をしたが講演慣れした榊原教授は息も乱さず語り終えた。

「四方田学長っていうのは、そんなヤクザの取引に幅を利かすよう

な人物なんですか」

針生は大学の学長とヤクザの関係がしっくりいかない。

「この場合、取引と言っても銃や麻薬じゃないんだよ。四方田学長が優秀な人材の研究結果をね、企業に売る予定があった。それがどの企業に流れるかを先に知っている、株取引で大儲けできるといふような、その程度の関係だね。」

「じゃあ、四方田学長は自分のところの研究者の結果を横取りして売ろうとした拳句、欲しがる企業を争わせて値を吊り上げて、さらにそれをどこに売るかを裏でヤクザに流して株で儲けさせる代わりにマージンもとろうと。」

針生が確認していくと、榊原教授は首肯した。

「がーめつーい」

犬丸は鼻で笑っているが、金にがめついは大徳寺家も同様である。

「大金が絡んでいて彼ら在必死だったのは確かなのですが、それにしてもし学生一人退学させるのにいきなり銃にナイフとは大げさ過ぎます。」

そこまで言って、榊原教授は山城夫妻の方へ顔を向けた。

「我々が疑問なのは期限ぎりぎりになってから突然江藤君に襲いかかったことなんですよ。この計画は前期の開始前から始まっていたんです。3カ月近くも何もしていなかったとは考えられない。春から何か不審なことがありますでしたか。」

山城夫妻は榊原教授の長口上が始まってからずつと真剣な表情で話を聞いていたが、この問いかけに戸惑ったように顔を見合わせた。横から最上が畳みかける。

「直接的な脅迫ではなくても、うちの学校を辞めさせたくなるような噂を聞いたりとかしませんでしたか。間接的にでも。」

学生達の目は山城夫妻に注がれる。

「何も。」

和男がそう口を開くと、最上は「そうですか」と残念そうに引き下がった。四方田自身を警察に突き出す道を模索していたのだが、ここには手掛かりはないようだ。

黙って聞いていた克也が、ふと思い出したように口を開いた。

「あの電話。あれは関係ないの？毎日知らない男の人からメッセー
ジが入ってた。」

克也が何かの記憶違いをする可能性は限りなくゼロに近い。それは研究室に誰もが知っていることだ。彼があつたと言うなら、その電話はあつた。

「克也、それ、いつどこで聞いた？」

最上が問いかけると、克也は即答した。

「4月15日からずっと、土日毎日家の留守電に入っていました。」

「そう言つて、克也はいつぞや猿君に話したのと同じ内容を一言一句違えずに繰り返した。」

「類推するに、我々の信用を損ねるような情報がずっと山城さんのところに送られていたということになりますか。」

榊原教授が厳しい表情で確認する。

「この点だけでも、教えていただきたいですね。」

乙女はため息をついて首を縦に振った。この春から、ずっと学生の情報を匿名で送ってくるものがあつたと白状する。話を聞きながら、最上の額に青筋が浮かんで行く。

「研究室から、克也を抜けさせようと思つている人間がいたら、研究室のメンバーにも何か影響が及ぶかもしれない。そういう風には
思いませんでしたか。今具体的に克也に関して不穏な動きをしているものがあるということだけでも、おっしゃっていただければ、我々は無防備に学生を送り出して生きるか死ぬかの怪我なんてさせなくて済んだかもしれません。お二人が克也を大事に思われる気持は分かりますが、私にとってはここにいる全ての学生が克也と同様に

大事な存在です。克也のために犠牲にしている駒ではありません。」

最上は怒りを押し殺してそういうと、山城夫妻の目を見据えた。

「確かに、克也や妻が言ったような手紙や電話はありました。今、話をきけば確かに事件と関係があったかもしれないとは思いますが、その時には分かるわけもない。お騒がせして何もなかったとなれば、皆さんを無駄に煩わすことになります。決して克也の為に他の学生さんを犠牲にしているとは思っていただけではない。」

和男はそう説明したが、学生の個人情報調べ回っている人物がいることを知っていて黙っていたのは事実だ。最上と榊原教授は無言だった。

膠着状態を見兼ねたのか横から針生が口を出した。

「ちよつと脱線させますけど、匿名の手紙や電話がずっとかかってくるだけでも警察に通報できます。留守番電話に記録してあったのなら証拠もある。どうして黙っていたんですか。」

「これまで克也は何度もこうした事件に巻き込まれました。そのたびに警察で謂れの無い不当な扱いを受けました。私達はあまり警察が好きになれません。」

和男は人の良い顔の上に鋭い表情を浮かべて針生をみやった。針生は不当な扱いの内容が想像できず納得できなかったが、針生より前に犬丸が口を開いた。

「じゃあ、誰かが克也の周りを嗅ぎ回ってるのに、その状況で野放しにしていたってこと？」

犬丸には警察嫌いは良く分かるが、自分に害を成しそうなものを放置しておくことは理解しがたい。克也を案じているなどと言いなから匿名で手紙や電話をしてくる人間など怪しくて仕方ないではないか。犬丸に悪気はないが、遠慮もない。山城夫妻は言葉に詰まってしまった。

「これまで、山城さんはずっと江藤君を守って来られた。経験上、

最善の策をとられたのでしよう。ただ、今回は予想を超えるような事件が起きてしまった。残念ながら、もう二度とこんなことは起きないとは断言できません。そうでしょうか？」

榊原教授がフォローに入った。乙女は無言で頷く。

「簡単なことではないと思いますが、ここに居る我々を信じて欲しいのですよ。私も今年から送迎をやめたらどうかとお勧めしたことに責任を感じています。せめて身辺調査を受けているようだとお知らせいただければ、あの議論も違う結論に至ったのではないかと思えます。必要な情報を、些細なものでも共有していただきたい。そうしなければ守れるものも守れません。無駄に煩わせるなどと心配せず、遠慮なく何でも言っていたください。」

榊原教授はそう続けたが、山城夫妻は即答できなかつた。

しばらくの間、じつと回答を待つ。沈黙が重くなってきた頃に猿君が小さな声で横にいる克也に声をかけた。

「克也は、みんなを信用している？」

「信用ってどういうことかな？」

克也が首をかしげる。

「この人は自分に嘘をつかない。自分を傷つけないって思うことだよ。」

「じゃあ、僕はこの部屋に今いる人は皆、信用している。」
場違いに明るい返事に、大人達は黙り込む。

「あの、山城さんは克也を信じますか？」

猿君が遠慮がちに聞くと山城夫妻は当然だと頷いた。

「信じられるんだったら、克也が信じている僕達を信じてほしいです。」

二人とも答えられなかつた。克也は人を疑うことを知らない。彼の人を見る目など節穴だ。しかし、彼が研究室の面々に大事にしてもらっているのは日々の食卓での会話から十分、分かっている。それに問いかけてきたのが掛け値なしに命がけで息子を守ってくれた

恩人だ。信用していないなどとは言えない。

二人の繊細な葛藤には関係ない人物が頼まれもしないのに口を開く。

「克也自身はともかくとして、人を見る目はどうかなあ。克也は誰でも信じちゃうんじゃないの。」

軽い調子の犬丸に不本意そうに針生が同意した。

「そうだな。克也はちょっと無防備すぎる。これまで守られ過ぎてたんじゃないですか。」

「過保護だと？」

和男が問い返すと、針生は頷いた。常々思っていたことだった。

克也は世間を知らなさすぎる。良く言えば純粹だが、悪く言えば馬鹿正直だ。

「貴方達はこれまでの克也に起きたことを知らないからそう言えるんですよ。それに過保護と言われても実際、今回も事件は起きてしまった。」

過保護と言う単語は地雷であつたらしい。和男が毒気を乗せて言い返したが、針生は怯まず反論した。

「山城さん、話が混乱しています。克也を守ると言うことと過保護にすることとは別物ですよ。端的に言って親は順当にいけば子供より先に老いて死ぬ。それまでに一人で生きていけるように教育しなければならぬ。そうなるまでは、代わりに身を守ってやらなければならぬ。十分両立する話です。私が言いたいのは克也は自分の身を守るようにならなきゃいけないということです。そのために一人で放り出せと言ってるわけじゃないんです。」

正論である。正論が過ぎると会話が途絶える。山城夫妻に反論の余地はなかった。

「でも、これまで山城さん達が一生懸命育ててきたから、今の素直な克也がいるんだし、今回も結果的には無事でここでまだ元気にしてるんだし。ええと、なんていうか。いいこともあるんだから前向

きに考えた方がいいんじゃないですか。」

ずっと黙って悪い空気が上空に溜まって行くのを我慢していた大木が口を挟んだ。口を開くのには勇気がいったのか額に思いつきり汗している。榊原教授は笑顔で大木を見やって頷いた。

「そうだね。我々はこれからのことを考えればいい。我々を信じていただけるかどうか、これからの私達を見ていただければ良いでしょう。先ほど、申し上げたことはお二人に時間をかけて考えていただくことにしましょう。」

本題に戻りますが、四方田氏についてはこれ以上野放しにする気はありません。少なくとも、彼にはもう江藤君に手出しをしない様に釘を刺した方がいいでしょう。岡島組は四方田の要求がなければ元々江藤君に関わる動機はない。警察に目を光らせておいてもらえばそれで良いと思いますか？」

どう思われますか、と榊原教授は山城夫妻を交互に見つめた。山城夫妻はもう一度目を見合わせて頷いた。

「構いません。お任せしましょう。」

山城和男は素直に榊原教授の提案を受け入れた。

山城夫妻が研究室を去った後で、克也は今日のやり取りから山ほど溜まった質問を猿君にぶつけていた。猿君は一つ一つ回答している。

「どうして名前を呼ばれたら頭を下げるの？」

「挨拶していたんだよ。日本では挨拶するときには頭を下げるだろう？きちんとお辞儀すると大げさすぎる時には、あのくらいでいいんだ。」

「どうして最上先生は怒ったの？」

「最上先生は、克也が怖い思いをしたり、俺が怪我をしたりしないで済むようにしたいんだ。敵がどこからくるか分かっていたら避けやすいだろう？だからそうしたかったんだけど、敵がくるって話を

山城さんから先に教えてもらえなかったから怒ったんだよ。」

「どうして、和おじさんや乙女さんはそれを内緒にしたの？」

「本当に誘拐が起きるなんて思っていなかったんじゃないかな。狼少年みたいにならないためかな。」

「狼少年？」

質疑応答はエンドレスに思えた。皆、無意識に盗み聞きしながらも今日の場に克也がいたことは正解だったと思う。彼は自分を取り巻く状況を理解していなさすぎる。山城夫妻は過保護過ぎるという針生の頑固おやし説もここまでくると認めざるを得ない。猿君が困ると誰かしらが助け船を出しながら、克也がその日のやり取りを全て消化するまで3時間程度やりとりは続いた。

教授室ではいまだ憤懣やるかたない最上が榊原教授に絡んでいた。「特別な配慮をお願いしますと云っておいて、情報を渡してくれないんじゃないしょうもない。おかげで猿は死にかけたのに、それで謝罪もないなんて。」

一方の榊原教授は余裕の構えだ。

「人の信用というのは得難く、失いやすいものだ。耳から毒を注がれて我々が信じられなくなっているのに、口だけで今すぐ信じると言ってもそれは難しい。時間が必要だよ。実績を積み重ねるしかないだろうな。確かに猿渡には申し訳ないが、本人は何も恨んでいないようなのが救いだね。」

最上は、なぜ榊原教授が語ると何でも真実に聞こえるのかと不思議に思う。教授として大成する人物には、こうしたカリスマ性というか話術が必要なのだろう。新興宗教の教祖にも共通する必須技能だ。そして、それが分かっているとしても説得されてしまうのだから実に厄介な相手だと舌を巻く。

「最上君の予想通り、学期前から克也君を東東大学から転校させるように工事が行われていたことは分かっていたし、その延長線上に今回の事件があったことも確信がもてた。とりあえずの結論は今日出た

ということと今日は良しとしようじゃないか。せめて我々が彼らを信じなければ信頼関係は永久に成立しない。」

長く黙っていた後で、しぶしぶ最上は榊原教授の意見に同意した。「そうかもしれないですね。」

彼もまだまだ若い、と榊原教授は思う。

「無論、今回明らかにならなかったことについては引き続き調査はするよ。」

当然のように宣言する榊原教授の発言を「調査するよ」「じゃなくて」「調査してね」に訂正した方がいいと思いつつ、最上は頷いてなんとか溜飲を下げた。

ようやく梅雨明け宣言がでた。

四方田は粟倉との消耗戦に競り勝って以来の東京出張のついでに蒸し暑い夜の銀座に繰り出していた。本人の気持ち的には夜の銀座に繰り出すついでの東京出張である。お気に入りのお店で、お気に入りのホステスを指名する。大して実のない話をしながら酒を飲み進められた食べ物をとって店の売り上げに貢献する。そうしてすっかりご機嫌で店を出たところで、懐かしい人物を見かけた。まったく奇遇なことである。

「よう、最上。最上。」

大きな声で呼びかけると、通りの向こうで背の高い黒いスーツ姿の男が振り返った。驚いたように目を開いている。

「ひさしぶりだなあ」

更に話しかけると、こちらへ寄ってきて明るい街灯の下まできた。やはり、四方田が思った通りの男だった。顔がはつきりわかるようになって四方田を見送りに来ていたホステスから息を飲む音がした。男は下手な俳優やモデルより遥かに美しい顔をしていた。

「何年ぶりだ。相変わらずだなあ、お前は。」

ご機嫌な四方田は、最上が無言なのをいいことに肩を叩いて引き寄せる。四方田にとってこの男はゴロツキ同然だったところを見つけて出して拾ってやって学究の世界に引き入れてやった相手だ。自称恩人である。

最上は逆らわずにふつと顔を近づけると四方田の耳元で囁いた。

「そっちは最近つるみを岡島組に変えたらいいですね。」

四方田はぱつと身を離れた。岡島組と付き合いがあることは一握りの人間しか知らないはずだ。最上は人を食ったような笑みを浮かべている。

「お、お前。」

「相変わらずでしょう?」

酔って赤くなつた顔を更に赤くさせて四方田は口を開いたが、夜の銀座とは言え公道である。あまり騒ぎたてては分が悪い。

「久しぶりにお会いしたし、どうです。これからちよつと付き合いませんか。」

最上はやや棒読み気味に、人気ドラマの刑事のセリフみたいなことを言った。四方田は重々しく頷いた。それを見た最上が携帯を取り出してどこかへ電話する。

「ああ、俺だ。迎えの車をよこしてほしいんだが。」

四方田が去らないので店の中に帰れないホステス達は、横柄に車を呼び寄せる最上を見て目をハートからキャツシユマークに切り替えた。完全にロックオンだ。

最上はホステス達をさらりと流し見て、顔を覚えながら電話を切った。次から四方田情報の情報源にできるかもしれない貴重な女性達にほんのり笑顔をサービスする。

「そこらで拾ってもらいますから、ちよつと移動しましょうか。」

そして四方田を促して歩き始める。並んで歩くと嫌味な程に足が長い。ホステス達の普段より気合いの入った見送りの言葉に背中を押されながら四方田は通りを歩きだした。

ほんの2ブロック先の横道から白っぽい高級車が滑りだしてきて目の前に止まる。

「どうぞ。」

最上はドアを開けて慇懃に四方田を招き入れ、自分も隣に座ると扉を閉めた。車はゆっくりと発車し、何度も道を曲がって込み入ったルートで走り出した。なんとなくもう銀座界限ではないような気がするが四方田は東京の土地勘が薄い。ろくに標識もでてこないような裏道を走られると、どこにいるのかすぐに分からなくなった。

「どこまで行くつもりなんだ。」

無然として声をかけたが誰からも返事はない。運転席の女も無愛想で無言で四方田をちらりと見やっただけだった。そのまま30分も車に揺られ、止まったのは平凡な住宅街の一角だった。小さなコーヒーショップがあいている。最上はその店の扉を開いて四方田を促した。

3つあるボックス席の手前のボックス席だけ一人の客がいた。その姿を見て四方田は、今日、最上をみかけたのは奇遇でもなんでもなくて、あいつが俺に会いにきたのだ、と否定したかった可能性をしぶしぶ認めた。最上という男はいかにも軽薄そうに見えて昔から人を出し抜くのが得意だったと忌々しく思い出す。いつかもこんな調子で自分の手元から榊原教授の元に引き抜かれてしまったのだ。

「ご足労願ってすまなかつたね。」

榊原教授が腰を上げて四方田に席を示す。

ここまで来て飛び出すこともできない。タクシーも流していないような道だ。飛び出しても移動手段が無い。

「これは、何の真似ですか。」

すっかり酔いの冷めた四方田は腰をおろしながら榊原教授と、その隣に腰かけた最上を睨む。

「我々がいて、岡島の名を聞いて、まだ要件がわかりませんか。」

最上は呆れた様子で口を開いた。返事も待たずに店主に声をかけてコーヒーを注文する。

「分からんな。」

四方田は言い逃れできないものを感じつつも強弁した。つっぱねていけば向こうがぼろを出すかもしれない。先日の粟倉のように証拠がなく詰め寄ってくるだけならなんとでも誤魔化せる。

「では、僭越ながらご説明しましょうかね。」

まず、と言って榊原教授はびたりと四方田を見据えた。

「事の発端はうちの研究室の学生が襲われたことですな。御存知で

しょう。」

「存じ上げませんが、それは災難でしたな。」

このとき、榊原教授達の座っているブースから扉一枚隔てたところにいた大木は頭を抱えなくなった。ひと月前、これに酷似した化かし合いを3時間も聞いた悪夢がよみがえる。

大木の心の悲鳴が聞こえたように、榊原教授はフオフオフオフオと笑って先を続けた。

「襲われた学生の一人は無事でしたが、一人は刺し傷がありました、穏やかではないと我々も心配になっていたわけです。実行犯を逮捕してみれば襲いかかってきたのは岡島組という暴力団の組員だったということが分かりました。しかしうちの学生に暴力団に恨まれるようなのはいけませんで、これはおかしなことよ、と思いましてな。」

暴力団に恨まれるような学生なら二人は確実にいる。下手したら三人いる。と最上は思ったがもちろん顔には出さなかった。そもそも暴力団の関係者どころか構成員である犬丸、元暴走族の赤桐、下手した場合にカウントされるハツカーの大木の三名もこの時それぞれこの会話を聞いていたが、素直に榊原研究室に暴力団に恨まれるような人間はいないと思っていた。ちなみに最上自身は自分も大いに恨まれる可能性があることを承知しているが、彼は学生ではない。「彼らにうちの学生を襲う様に依頼した人間がいると思った方が、自然でしょう。ところが犯行を指示した人間が特定されない。と、頭を悩ませていたらこんなものが偶然手に入りましてな。」

そういつて榊原教授が目を上げると、一緒に店内に入ってきていた運転手の女が抱えていたファイルからA4の紙を取り出してテーブルに置いた。

「どうも、四方田さんから依頼を受けられたようだと。」

取り出された紙の内容は、岡島組とのメールのやり取りだった。

岡島組からは警察の捜査は無事切り抜けたと聞いていたので、虚を突かれて顎の肉がちよっと震えた。物証を目の前に突きつけられながらも四方田は尚も言い逃れの策を考える。

「確かに、不本意ながらこのアドレスは私のものようですね。しかし私にはこのような内容を書いたり、読んだりした記憶はありません。ねつ造か、誰かが私のアカウントを隠れ蓑に使用したのでしょうか。」

大木は子供みたいな言い訳すんなあ、と呆れた思いでそのコメントを聞いた。弱弱しい言い訳だが、確かにメールは筆跡も声紋もとれないので本人が書いたと特定することは難しい。だからこそ四方田を誘拐未遂の件で警察に突き出すだけの証拠が揃えられなかったのだ。

「なるほど。そういう可能性もありますなあ。」

榊原教授は動じない。

「その割には、岡島つて名前でも随分びびってたみたいだけど。」

最上は出てきたコーヒーを飲みつつ、独り言のように呟いた。四方田の顔にまた赤い色が濃くなる。

「ご自分のアカウントが乗っ取られた可能性があると思われませんか。」

四方田が何か怒鳴りつける前に榊原教授はそう問いかける。四方田はそうとしか考えられませんな。と眉を寄せて頷いた。

「そうですね。某西さんのセキュリティに穴があつたかもしれないということですか。」

榊原教授は軽く嫌味で返すと最上とちよつと目を合せた。四方田は言い返せば首が締まるのでじつと我慢だ。そのまましばらくの間、店は静かになり、外の道路をたまに通る車の音だけがしていた。

四方田がしびれを切られて口を開こうとした瞬間に、四方田の携帯が鳴った。タイミングの悪さに舌打ちしながら携帯を開くと、今しがたのつとられたと言った自分の職場のメールアカウントだった。不審に思いつつ、いつも通りにタイトルもろくに見ずにメールを開いて、そして固まった。

「どうかされましたかな？」

榊原教授が首をかしげる。四方田は白目の血管が切れるのではないかと思うほど目を見開いて目の前の二人を睨みつけたが、二人はきよとんとした顔だ。

「緊急事態ですか？」

四方田のメールには自らのアカウントから最近受領した裏金の明細やら、入試の口利きのやりとりが延々と送られてきていた。この情報が警察に漏れているのだとすれば確実に逮捕される。言い逃れはできない。

「そういうことでしたら、早くお帰りになった方がよろしいでしょうな。老婆心ながらセキュリティの強化、検討された方がいいかもしれませんぞ。」

榊原教授はフオフオフオと笑うと、店主にタクシーを呼んでくれと頼んだ。

四方田はこの情報がどうやって今の自分の手元に来たのか考えるのに忙しく、返事をする余裕もない。

タクシーが来るまでの間、榊原と最上はひたすら黙って四方田を眺めていた。ほどなくタクシーがやってきた。

榊原教授は立ちあがる四方田の後ろから声をかける。

「あなたは余りに浅はかですね。その浅はかさは罪です。」

それまでの好々爺然とした雰囲気とは違う、断固とした口調にぎよつとして四方田が振り返る。榊原教授は厳しい表情のまま四方田に引導を渡した。

「もう二度と、江藤克也君に近づかないと約束していただけますね。」

四方田が返事を洩ると榊原教授は静かに付け加えた。

「罪は償われなければなりませんよ。」

四方田はぶるぶる震えながら何か言おうとしたが、タクシーのクラクションに急かされて、ただ頷いて喫茶店を出て行った。車が遠ざかると、店主はおもむろに全ての窓のブラインドを下ろして住宅

街のコーヒーストックは閉店した。

四方田が黒だと確信してから、今日に至るまで最上は徹底的に四方田の悪事の証拠集めを行っていた。基本的に行きかけの駄賃とばかりにダウンロードしてきた四方田のコンピューターのデータを元に、昔から仲良くしている某西大学の秘書や事務員の皆さんの手を借りてこつこつと取引記録や通話明細を集めていったのである。克也を襲わせた件の証拠はメール2本しかみつからず、罪に問うには不足があつたからだ。二度と四方田に刃向わせないと思えるだけの証拠を集めるのに時間がかかり、本日やつと作戦決行となつたわけである。

本来であれば普通に呼び出して釘をさせば終りなのだが、今回の証拠集めに駆り出された大木と犬丸から、そんなんじゃないとクレームがついた。折角だから大げさに追い詰めたいという。無給でこきつかつた覚えが大いにある最上が折れて本日の舞台設定になつた。榊原教授が四方田と顔を合せるのは自分と最上だけだという点のみ絶対に譲らなかつたので、帰宅時間の制限にひつかかつた克也を除く全員でキッチン裏で立ち聞きということになつた。これを不服とした大木は、交換条件に最上にミニマイクを付けて四方田にかけるセリフまで指定した。最上としては不本意この上ないことである。

キッチンの扉から顔を出して赤桐が質問する。

「教授、最後のつて要するに「きっちり落とし前つけてやるぜ」って意味ですよね」

教授はニコニコしているだけで否定しない。

「えー、僕は約束しなければ情報流すぞって意味かと思った。」
犬丸が店のキッチンスペースから出てくる。

「どつちでもあるんじゃないのか。」

針生も犬丸に続いて入ってくる。

「教授、あのメールなんだったんですか？」

猿君の質問には大木が答えた。

「乗っ取られたって言い張ったメールアドレスから、本人宛にメール出したんだよ。本当に乗っ取ってやったわけ。中身は四方田さんのデータベースのトップシークレットフォルダへのリンク。」

タイミングを見計らって送信実行したのは当然マイクまで使って盗み聞きしていた大木だ。

「素直に認めれば、メールは出さないで置いてあげたのに。」

本当かどうか分からない同情を口にしつつ大木は、大好きなスパイごっこが完結したことに大変満足な様子だ。

「これで、しばらく静かにしてくれればいいんだけどな。」

その最上のセリフに一同深く頷いた。

「山城さんには明日報告を入れておこう。黒峰君、よいかな。」

榊原教授が運転手の格好のままの黒峰に声をかけると、彼女はいつも通り頷いた。仕草はいつも通りだが、見た目がまるつきり変わっている。女はメイク一つで化けるものだと言われ、男性陣はしみじみその姿を眺めた。

今回、大木と犬丸が描いたシナリオを実現するには運転手が必要だったのだが、榊原教授が学生の登場を許さないのでやむを得ず黒峰に依頼した。いつも通り驚いた様子もなく引き受けた黒峰が、あまりに完璧な変装をして登場し誰もが度肝を抜かれた。余りに堂にいった運転手スタイルに犬丸の中ではコスプレマニアではないかという疑念さえ生まれただけだ。そう思えば普段、必要以上に秘書らしい秘書スタイルをしている気もする。全員のもの言いたげな視線が気になったのかどうか分からないが、ジャストフィットの運転手の制服を着た黒峰は、ここでの仕事は以上と確認すると一足先に帰って行った。

落とし前、つけます。 - 2 (後書き)

克也襲撃編 終了です。

夏休みの準備

大学では試験の終わった学生から順に夏季休暇に入っていく。ちよつどその過渡期にあつた夏のある日、榊原研究室にはちらほらと人の出入りがあつたが、10時過ぎには部屋には克也一人になつた。彼が黙々と針生に勉強になると勧められた壮大なクロスワードパズルに取り組んでいると廊下からドスドスと重い足音が近づいてきた。「おす。」

猿君の足音と声がしたのに、研究室に入ってきたのは違う人物だつた。

大きな体に大きな顔がのつかつていているが、頭はさつぱりとスポーツ刈りで髭もなく、精悍な顔つきをしている。服装も革ジャンに破けたジーンズにブーツでフルフェイスのヘルメットなどを抱えており、ユニクロ一辺倒だつた猿君とは全く違う。

「こんにちは」

克也は、誰だろうと思ひながら礼儀正しく挨拶する。

その人物は勝手知つたる様子で猿君の席にすわり、猿君の机の上ヘルメットを置き、パソコンにスイッチをいれ、立ち上がるのを待つ間にブーツと革ジャンを脱いだ。革と汗のにおいが部屋に充満した。

しばらく、その人物と克也の二人は無言でそれぞれの作業に没頭していた。

その日の教授会では、今年度の秋に行われる学会に向けて各担当者の発表予定内容のレビューが行われていた。骨子や実験結果などを確認し最高学府の名に恥じない発表がなされるよう品質管理をしているのだ。今回は最上の発表もアジェンダに含まれており、真面目腐つた顔で昨年からの研究結果を報告していた。

「以上で、学会発表予定の研究内容の報告を終わります。」

最上が発表を締めくくると、聴衆から低いうなり声が漏れた。足を引つ張ってやりたくて仕方ないが、引つ張れる足がない。質疑応答含め、完璧な内容だった。最上は演壇からぐるりと周りを見回して大人しくなっているのを確認すると一礼し、いかにも真面目な表情で演壇を降りた。

発表会が終了して、教授陣が各々の持ち場に戻っていく。榊原教授は廊下を歩きながら隣を歩く最上に声をかけた。

「君のポストを確保するのは一筋縄では行かなかったが、やはり呼び寄せた甲斐があったというものだ。私も鼻が高いね。」

ここで普通の研究者であれば、改めて感謝の言葉を述べるところである。出世に意欲があればおべっかも述べるところである。しかし最上は、不愉快な様子であった。もう何度も口にしたので無言だが、言いたいことは要するに「頼んだわけじゃない」である。

最上に目をつけて引き抜きをかけたのは二人の間に限っても榊原教授の独断であり、最上自身は榊原教授にアプローチをかけたことはなかった。有名教授なので最上も名前と顔は知っていたが、特に榊原教授に対する憧れはなかった。今でも憧れてはいない。

榊原教授相手に、こうもつれない態度の教職関係者は少ない。その反応もまた榊原教授が楽しんでいるところであった。

「江藤君の件も、君が学生たちの現場指揮官として活躍してくれるから安心していられるというものだよ。」

言い添えられて益々最上は嫌そうな顔で、そういう能力まで分かっている引き抜いたのだからと目だけで文句言う。高校時代までは音に聞こえた問題児であった最上一樹を従えた榊原教授は、ただ満足げにニヤリと笑っただけだった。

ご機嫌と不満げの二人が研究室へ入ると、部屋の中には二人の学生がいた。榊原教授と最上は、それまでの機嫌も忘れて一歩部屋の中に踏み込んだまま立ちつくした。

教授達がやってきたので挨拶をしようと顔を上げた克也は、学校一の剛の者、榊原教授があっけにとられた顔で、猿君の席に座る人物を見ているので今日やってきた人物が只者ではないらしいと判断した。

「おい、猿渡。お前、猿渡じゃないか。」

その人物は、教授の変な呼びかけに振り返った。太い眉の下に大きな目がぎよろりと光っている。

「いかにも。」

そう返答すると、教授の後ろにいた最上が鋭く返した。

「何もつたいぶつてんだよ。お前に急に髪なんか切つて小奇麗にしてどうしたんだよ。誰かと思つたぞ。何だ、女か。」

「いや、ついにバイクを取り戻したんで乗ろうと思つたら、メット入んなかつたんで頭も顎も刈つただけですよ。」

「ふん、バイクか。バイクに女乗せようつて腹か。」

「いや、別に女は関係ないです。」

「なんだ、つまらん奴だな。」

女絡みでないと分かれると最上は本当につまらなそうに、その人物から目を離れた。次に目の前に座つて話を聞いている克也の方をみると、目を丸くして猿渡を名乗る人物を見ている。

「猿渡君、人間に戻れてよかったなあ。」

榊原教授はしみじみとしている。

克也は恐る恐る確認した。

「あの、猿渡さんつて猿君ですか。」

長い沈黙だった。

沈黙に飽きた榊原教授と最上が部屋を去り、どこかで言いふらしたのか、それから次々と猿君の友達が部屋を訪れて咆哮し、瞠目し、感涙し、写真を撮つていったが、その間ずっと猿君と克也の間には沈黙があつた。

「克也」

昼食と食後の一服を終えた最上が部屋に帰ってきたときに発した猿君の一言が、その沈黙を破る一言だった。

「俺は猿渡桂蔵だ。髪を切つて髭を剃つて風呂も浴びて服も着替えたが、それ以外は変わっていない。」

最上には口いっばいに言いたいことがあつた。しかし、克也の返事が聞きたくて我慢した。

「そうか。猿君、ごめんね。僕は全然気付かなかつたよ。」
そして克也は、思いついたようにカバンをあけ、山城乙女特製弁当を取り出した。腹が減つたことに気がついたようである。

「猿！まさかとは思うが俺たちが出て行ってから今までずっと克也と見つめあつてたつてののか。お前ら、本当に恋にでも落ちたんじゃねえか。そういうときは申告しろよ。二人きりで野放しになどしてやらんからな。あと、お前の変貌ぶりは髪を切つて髭を剃つて風呂を浴びて服を着替えた結果、髪に潜んでいた数々の謎の生命体と考へたくもないような量の垢とフケが洗い流されたことによつてもたらされたものだ。大事なところを省くな。克也、お前は朝こいつを見てずっと猿の席にいるのになんでほつておくんだ。別人だと思つたんだろ。不審者だつたらどうすんだ。もっと警戒心を持って。今日の弁当は何だ。」

最上が暴発した。

克也は「鶏の唐揚げだそうです」と笑顔で回答した。

猿君は何も言わなかつた。猿君は克也の弁当を見て空腹を思い出し、二人は連れだつて学食へと消えて行つた。

「克也。車はないけどバイクなら一人で遠出できるようになるぞ。」
猿君は食堂へ向かう途中でそう言っ、二人は入院中に計画した
デートプランの実現にむけて話し合いながら昼食を楽しんだ。

夏休みの準備（後書き）

前期 最終話です。次回以降は夏休み編になります。

合宿へ行こう - 1

夏休みに合宿をする。

そんな慣習は榊原研究室にはなかったが、今年は特別に行くことになった。運動会の次に重要が学校行事として赤桐が林間学校に行くべきだと言い出したのがきっかけだ。他の面々も克也が林間学校どころか旅行というものに全く行ったことがないと知ると赤桐の計画を後押しした。林間学校は合宿に名前を変え、ついに榊原教授を口説き落とすとした。

行き先は大徳寺家の別荘に決定され、自動的に熱海になった。最後の難関は意義ある合宿だと山城夫妻を納得させて未成年の克也の参加許可をとることである。

「建前でいいから、なんか合宿らしいプラン出してくれよ。これを持って山城さんちに許可取りに行くの誰だと思ってんだよ。」

最上が楽しそうな予定でいっぱい日程表を眺めて文句をつけるのと、赤桐は手書きで適当なことを書き込んですぐに押し返した。

「海水浴、前期研究結果報告、スイカ割り。お前ね、俺を馬鹿にしてんだろ。」

最上がもう一度日程表を差し戻し、受け取った赤桐はそのまま大木にパスした。大木は一応文句を言いながらも、さっさと建前の計画を練り直して最上に再提出した。

日程表には研究成果の共有の時間の他に、たまには体を動かす、友好を深める、社会性の向上を図るなどという大学生の合宿の目的として適切かどうか微妙な文言が書き込まれていたが何とか許可をとりつけ、一泊二日の夏合宿が開催されることになった。

なんだかんだ言って榊原研究室一同、全員参加である。

合宿へ行こう・1 (後書き)

ひさしぶりにお気楽のほほんのターンが来ました！嬉しい！

合宿へ行こう - 2

克也の家の前に大きな車が止まったとき、克也はそれが迎えにきた犬丸の車だと気が付かなかった。いつもの黒塗りの黒い硝子の車ではなかったからだ。明るい色の家族向けの長い車の後部の窓から大木の顔が見えて、ようやく気が付いた。

「おはようございます。」

「おはよう。」

犬丸の車に乗りこむと、もうだいぶ顔なじみの大徳寺家の運転手の他に、犬丸、大木、針生が揃っていた。ピックアップは克也が最後である。克也にとっては人生初旅行の始まりである。黒峰がイラスト入りの合宿の栞を用意して配布してくれていなかったら、克也はカバンに何を詰めていけばいいかさっぱり分からなかっただろう。何度も乙女と吉野が中身を確認して太鼓判をおして送りだしてくれたカバンはいつもより随分と大きい。荷物を3列シートの後ろに押し込むと、車は一路熱海へ走り出した。

明け方までバイトが入っていたという針生は車が高速に入るとうつらうつらし始めた。眠る針生が珍しいのか犬丸はすかさずカメラを持ち出してせっせと寝顔を撮影している。この二人は本当に仲が良いな、と口に出したら怒られそうなることを思いながら大木は克也と二人でしりとりに興じていた。こういう暇つぶし系のゲームも克也はたいていやったことがない。

「こういう意味の無さそうなおで暇をつぶすのが遠足とか旅行の移動って感じがするんだよ。」

何故しりとりをするか、という疑問にそう大木が答えると克也はしりとりで挑戦することを決めた。やってみれば分かるという最上のいつかの教えは大抵の場合、有効だった。克也は素直にその教え

に従うようにしている。実際に意味もなく言葉を連ねて行くだけという遊びは面白いという程ではなかったが、意味のないことを繰り返す自分や、いつも一緒にいる人の写真をとる犬丸など、いつもの人がいつも通りじゃないことをしている様子が、興味深かった。

合宿へ行こう・2 (後書き)

移動の車中って楽しいですね。

合宿へ行こう - 3

大徳寺家の別荘は海から少し離れた丘の途中にある。ワゴンが車幅ぎりぎりの細い林道を抜けて大きな門をくぐると二階建ての純和風の家屋が現れた。4人と荷物を下ろした車はどこへともなく去っていく。

「じゃ、入って入って。」

犬丸が引き戸になっている玄関を開けると、妙に広い玄関スペースに巨大な衝立が鎮座していた。家の大きさに比べて異常な広さに大木と針生が茫然としている脇を克也はトコトコと通り抜けて家が上がっていく。残された二人は顔を見合わせてから、金持ちの考えることは分かんないと思いつつ克也に続いて家にあがった。

宿泊スペースは2階にあって、階段を上ると旅館のように和室が並んでいた。

「うーんと、部屋が4つだから、先生部屋と女子部屋とあと僕らで二つだね。先生たちと赤桐さん達は二人ずつだから狭い方で我慢してもらおう。」

犬丸はスターンと襖を明け放つと10畳はありそうな広い和室が現れた。そのまま中に入行って行って、もうひとつ襖を開けると同じくらい広い和室が現れた。

「じゃ、ぼくらはここね。荷物下ろしたら適当に家のなか探検して。トイレは1階と2階に1個ずつしかないけど。」

犬丸はそそくさと出て行くと他の部屋もスターン、スターンと襖を開けはなつて換気を始めた。大木は案内された部屋の窓ガラスを開けて空気を入れた。すこし海から離れていても潮風が入ってくる。克也は大きな和室が珍しいのか部屋をうろつろと歩き回っている。

「あ、海見えますね」

窓から首を突き出した大木が言うので針生と克也もつられて窓の外に顔を出した。木々の向こうに少しだけ光を反射している海が見える。

「向こうの部屋の方が良く見えそうだな。」

針生は遠慮なく先生部屋に指定された部屋へ入って行く。確かに角部屋になっているその部屋からは海が良く見えた。床の間がついており、花が活けられている。ちゃんと誰かが家の手入れをして客を迎える用意をしてくれていたようだ。

一同は一階の台所や、なぜか磯野家風の居間、謎の置物が大量に鎮座する応接間などを探検していった。友達の家を訪ねたこともない克也にとつて知らない家を隅々まで見て回るのはちよつとした冒険だった。比較対象のない克也にはこの家の異常さは全く分からないかったが、特に広い風呂は是非入ってみたいと思った。針生と大木がいうには「ちよつとした銭湯」くらいの広さらしい。

トイレまで全部の部屋を見終わって、ちゃぶ台の前に落ち着きお茶など飲んでいるとビーツという電子音が響き渡った。

「誰かきた」

犬丸が立ちあがって廊下の日めくりカレンダーを全部めくると、その裏側に隠れていたモニターに門の外の様子が映っていた。黒いスポーツカーが止まっている。

「最上先生だ。」

犬丸はリモコンで門を開けると玄関に出迎えに行った。

「なんでモニターの上にカレンダーなんてかけるんだ。邪魔じゃないのか。」

針生は意味が分からないと思ったが、スパイおたくの琴線に触れるものがあつたようだ。大木は早速立ちあがって日めくりの裏のモニターをのぞいて喜んでいる。

「あー、ちよつといじつちやダメだよ。若い衆が飛んできちゃうよ。」

犬丸が不穏なことを言いながら大木を押しつけて居間に帰ってきた。大徳寺家のセキユリティシステムは人手に頼っているらしい。その後ろから最上が入ってくる。暑い盛りなのでいつものスーツ姿ではなくアロハシャツにジーンズだ。学校では夏もスーツスタイルを貫いているので非常に新鮮味がある。

「先生、必要以上に若く見えますね。」

「そうか？いつも若いぞ。」

最上は針生の感想に軽口を返すと、犬丸に呼ばれて2階へあがって行った。後ろ姿が和風の家から非常に浮いている。風来坊が帰宅してきたという感じだ。

最上が少し頭を下げて鴨居をくぐるのをみて、これからやってくる猿君が、これから何回頭をぶつけるかと針生は少し心配になった。

合宿へ行こう・3 (後書き)

大徳寺家別荘の応接間には木彫りの熊や、動物のはく製があります。

合宿へ行こう - 4

次にやってきたのはバイクを並べた赤桐と猿君だった。赤桐が乗っているのは最上との共同研究で作成したもので、これでもまだ研究を私物化していないと言い張るのかと犬丸と言い争いながら入ってきた。夏休みに入って猿君の頭はスキンヘッドになっている。どうも暑いらしい。

「おお、猿君がそういう髪型にすると迫力あるね。」

初めて坊主頭をみた大木が感想を述べると、猿君は頭を撫でて照れた様子だ。

「髪がなくても髪型っていうんですか？」

克也は万年スキンヘッドの針生に向けて聞いた。

「・・・ゼロも数字だろ。」

針生は無然と答えた。答えになっているか微妙なところだったので克也は考え込み、結果として静かになった。

赤桐はバイク用の服からパレオのワンピースに着替えてきて、早速海辺へ行く気満々である。克也がみたことのない服に興味を持ってじっとみると、赤桐が「かわいい？」と聞いてきた。克也は素直なので「いつもと違う」と答えた。

傍にいた他の人は赤桐が機嫌を悪くするかと思ったが、杞憂だった。

「そりゃ、旅行だもん」

合宿という単語は赤桐の中では旅行と同義である。

「旅行だといつもと違うんですか？」

「そうだよ。非日常を楽しむのが旅行のいいところなんだから。」

そう言われて克也は今朝から見かけた、いつもと違うことは全て旅行だからだったのだと理解した。

いつもと違うことをして楽しい。これが旅行というものか。

「いつもと違うのも楽しいですね。」

克也がそういうと、赤桐は克也に飛びついて喜んだ。教授を説得して合宿という名の旅行を計画した甲斐があったというものだ。

赤桐は隙あらば克也を抱きしめるので、皆も無反応に二人を放置した。ただし赤桐が去って行ったあとで、最上はいつもと違う女性の中でたちを見たら、とりあえず褒めるようにと克也に教育的指導を行った。

合宿へ行こう・4 (後書き)

スキンヘッドは髪型なのか否か。だって、スキンっていつちやてるんだよ？

海辺の面々 - 1

黒峰と榊原教授の到着を待たずに海に出ると、夏の砂浜は人で溢れていた。

その混雑の中においても一行は色んな意味で目を引く集団だった。とにかく目立つのは身長二メートル近い分厚い巨体を黒い毛に覆われた猿君である。首から下は殆ど体毛に埋まっているのに顔と頭がツルツルに剃られているので益々異様である。しかも体のあちこちに傷跡に沿って毛がない部分があり一層怖い。その海坊主のような生き物の腕にぶら下がるように小柄な少年が歩いているが、可愛らしさで中和するどころか二人の体格差が強調される結果になっている。猿君の進むところにはすぐに道が開けた。

「モーセだな。」

その後ろを悠々と歩いていく針生と犬丸は、薄着になると日焼けして引き締まっている針生と白くてたつぷりしている犬丸の好対照の体格が明らかになり、それはそれで気になる二人連れだ。犬丸のこだわりの長髪はさすがに束ねられているが何の救いにもなっていない。すれ違った若者たちがゲイのカップルかどうか囁き交わしている。どっちのペアのことを疑っているのかは分からない。

「連れだと思われたくないな」

サングラスをかけてアロハシャツを肌蹴て着ている最上は辺り一帯の女子の熱い視線を一人占めだ。今日は長い前髪を適当に下ろしていても四捨五入して40歳には見えない。

「私は、最上さんの連れだと思われたくない。海で足引つ張られそう。」

パレオワンピースの下は派手なビキニで年甲斐などどこ吹く風の赤桐はちよつと嫌そうに最上の傍を離れる。あの子、彼女？という女子の視線が怖いからだ。

「じゃあ、前のチームに合流すりゃいいじゃねえか。」

「それも嫌なの。」

口を尖らせた赤桐は後ろを振り返つて、完全に俺は知り合いじゃありませんという顔をしている大木を手招きした。

「一人だけ逃げようと思うなよー。」

ニヤリとして腕を引かれて大木はため息をついた。このチンドン屋みたいな一行と一緒にいてひと夏の出会いには期待できない。

海辺の面々 - 2

海に突入した猿君は体毛が濡れて張り付き、人間離れが進んでいる。克也と遊んでいるのか克也が海坊主に襲われているのか微妙な姿だ。

針生は、一人黙々と場違いなほど真剣に準備運動をしてから海に消えて行った。当分戻って来ないだろう。

大木は赤桐の目を盗んで逃げ出した。ひと夏の出会いへの未練が立ちきれなかったのだ。

残りの大人たちは海に触れもせず砂浜に落ち着いた。赤桐はパラソルの下で居心地のいい空間を作ってしばらく海を眺めていたが、肌が焼ける気配に日焼け止めを塗り忘れていたことに気が付いた。迂闊だった、と思身の周りを見回すが、残っているのは最上と犬丸だけである。居残る2人のどちらにも背中に日焼け止めを塗っていると頼みたくない。こんなことなら黒峰がくるのを待てばよかった。最後の手段だと克也を呼び戻すことにする。

克也が呼び戻されたので猿君も帰ってきた。確保したパラソルの周りに寝転んで体を乾かす。

「猿、お前なんだか今日はジユゴンみたいだな。」

ビールを買いに行ってきた最上が転がる猿君に声をかけた。

「ジユゴンって人魚のモデルですよね」

この半年弱で飛躍的に雑学が増えた克也が日焼け止めを塗りながら声をかける。寝そべる赤桐の背中に克也がせつせと日焼け止めを塗っている姿はマダムと若い燕といたいところだが、赤桐にマダムの貫禄が若干足りない。

「そつだ。よく知ってるな。」

最上に褒められて克也は針生に教えてもらったという。

針生の与える情報の選択基準は良く分からない。

今日限りのジユゴン君はお腹が空いたらしい。最上のビールを見てしばらくじっとしていたが、克也が日焼け止め塗りから解放されたのを見て遅い昼ごはんに誘った。

「あ、私も行く。」

赤桐も立ち上がってついてくる。

「これで俺に食いもん買ってきて。」

最上はしまおうとしていた財布から、お駄賃を渡す。

「先生、自分で行った方がおまけしてもらえますよ。」

猿君が五千円札を握って聞き返すと、最上は嫌そうに首を振った。「それよりギヤルに取って食われそうで怖い」

「どうやら、ビールを買いに行っただけで随分と人に囲まれたらしい。赤桐の傍にいと多少周りが遠慮してくるので今日はなるべく傍にいようと思う。海は久しぶりだが、こんなに女子が猛々しく狩りをする場所だったかと首をかしげる。若い女子に言い寄られて嬉しくないなんて年なのかもしれない。しかし、おじさんだと言われても最上は目の周りを白やスカイブルーで囲む新種のメイクは受け入れられなかった。」

海辺の面々・2 (後書き)

ジユゴンが人魚のモデルであると聞いたとき、人間の想像力は本当にすごいと思いました。

海辺の面々 - 3

克也は海の家も初体験だ。赤桐と猿君は何軒かの海の家の前を通り過ぎながらメニューの説明をしてやる。

犬丸も途中までついてきていたが、いつの間にかはぐれた。たぶんラーメンを食べているはずだ。海の家で食べるラーメンは特別美味い。

適当な店の前で止まって食事を仕入れる。

「焼きソバ3つ、いか焼き2つ、フランクフルト2つ、お好み焼き1つ、フライドポテト2つ、唐揚げ2つ」

猿君が淡々と注文していく。売り子の若者は圧倒されながら間違はなく全てを袋に詰めて渡してくれた。

「あ、ビール3つ」

飲み物を忘れたと猿君はビールも注文する。どうせ今日は誰ももう運転しないので飲み放題だ。ビールまで含めても会計は最上からのお駄賃5000円におさまっている。

「克也は何飲む？」

「うーん、ラムネって飲めるの？」

克也はジュースの中にラムネの文字を見つけて目を引かれた。克也の知っているラムネは白い小さいタブレット状のお菓子である。液体になったらどうなるのだろう。

「克也飲んだことないの？ダメだよ、飲まなきゃ。お兄さんラムネ一つ！」

赤桐は克也の返事も聞かずに注文した。

大荷物を猿君に預けて、砂浜を戻って行く。赤桐は克也にラムネを飲ませて感想を求める。克也は美味しいと判定した。瓶の中にビ―玉が入っているのもカラカラと音がして面白い。

「気にいった？夏はこれだよ。」

赤桐は克也のラムネも常のごとく横取りして自分も一口飲んで満
足げだ。飲み物を回し飲みする習慣のない克也は何度もボトルをと
ったりやったりするやり取りがちよつとしりとりみたいだと思っ
た。そういうと赤桐は「じゃ、ラムネ。」といって本当にボトルと
一緒にしりとりを始めた。

「ネツシー。」

克也が答えると、赤桐と猿君はちよつと変な顔をして「それ、誰
に教わったの？」と聞いた。

「針生さんです。」

二人は顔を見合わせた。針生のものを教える基準がますます分か
らない。

パラソルの下には最上がだらりと寝そべっていた。大人の海での過ごし方は不活発この上ない。

「買ってきました。」

猿君がどすと袋を下ろすと、最上は呆れながら起きあがった。

「お前これ、買いすぎじゃねえの？」

お釣りを受け取るう出した片手にビールを渡された。

「何？全部使ったのか。」

猿君が早速いか焼きを食いちぎりながら頷く。

「大人買いだな。お前らはどれを食べようかと小銭を握りしめて真剣に悩む楽しみを克也に味あわせてやらなかったのか。」

そんなこつたるうと思つたと思つたものの、一応文句を言う。

「まずは全部味を知つてからの方がいいと思つて。」

猿君は口答えしつつ、食べかけのいか焼きを克也に勧める。克也は一口齧つて美味しいと微笑んだ。頬に醤油がついている。

「わーい、焼きそば。ソースの匂い。」

お祭り好きは大抵ソース好きである。赤桐もご多聞にもれずソース好きだ。振り返つて赤桐の方を向いた最上が「おい」と文句をつけた。

「お前、あぐらはよせ。つつか泳ぐんじゃねえなら何か着ろ。」

「はい」

ビキニで胡坐をかいていた赤桐は手近に会つたタオルを膝の上に広げた。密かに目のやり場に困っていた猿君もほっとする。赤桐の膝の内側には大きな手術痕が残っており本当に目のやり場に困るのだ。克也は自分も泳いでないので何か着た方がいいのかと慌てて力バンの上に放り出していたTシャツを取り出した。

「ああ、克也、お前はそのままでもいい。腹が冷えそうなら着とい

た方がいいけどな。」

最上が止めてやると、克也は素直にTシャツを戻して元の場所に戻った。

「なんで僕は良くて、赤桐さんはダメなんですか？」

素朴な疑問に最上もうつと詰まって猿君の方を見た。猿君は口いっぱいに唐揚げを頬張っており助けにならない。

「あれは肌を出し過ぎなんだよ。それは日本ではハシタナイと言ってな、歓迎されないんだ。特に女性の場合な。その上胡坐をかいて食事をするなんて言語道断だ。」

最上は諦めて自分で説明する。

「ちよつとー、それじゃ、私のはしたないみたいじゃない。」

「みたい、じゃなくてそうなんだから文句言うな。そんなカツコで胡坐かく奴があるかよ。」

「だって、この方が座りやすいんだもん。」

二人がぎゃあぎゃあと言い合っている間に、克也は唐揚げ、フライドポテト、焼きそば、フランクフルトと海の家の人気メニューを一口ずつ制覇していった。克也の聞き流すという技術は格段に上達している。焼きそばはなんだかぼそぼそしているが塩気が強くておいしい。猿君もせつせと食べ続ける。どうせ赤桐と最上は大した量は食べないので遠慮はしなかった。

お腹いっぱいになった克也は猿君と一緒に砂浜に転がった。すぐに海に入るとお腹が痛くなると止められたので、とりあえずお昼寝だ。タオル越しでも砂が熱くて体が温まり眠くなる。猿君は目を閉じて胸毛をそよがせている。ふさふさした動きを見ていたら毛布を思い出して克也は試しに頭を乗せてみようと思いついた。乗せてみると猿君の胸板が厚過ぎて首が疲れるし思ったより弾力が無くて気持ちのいいものではなかった。でも心臓の音がして面白くしばらくそのまま頭を乗せているうちに寝入ってしまった。猿君も熟睡である。

折り重なって眠る二人を隣のパラソルの下から眺めて、止めてやるべきか悩んだ最上は放っておくことにした。ここで自分が出て行ったら確実にゲイの三角関係だと思われる。それは避けたい。目を背けて心の平安を確保する。

猿君と克也がナンパを諦めた大木と合流して再び海に入りについた後で、赤桐は周りの海水浴客がざわついているのに気が付いた。見回してみると後ろから榊原教授と黒峰がやってくる場所だった。榊原教授は作務衣姿で仙人度を上げているが騒がれるほどのことはない。赤桐も口をポカンと開けてしまったのはその後ろについてくる黒峰のせいである。今日は秘書スタイルはお休みらしく、白いマリリンモンローを彷彿とさせるワンピースに大きなサングラスをかけて日傘をさしている。髪は綺麗に巻いてあり、大きく開いたワンピースの胸元から黒い水着をのぞかせている。

「どこの女優かというスタイルで仙人風の教授と連れだっていると、なんとなくいやらしい。」

「これだから、うちの研究室はキワモノ、キワモノ言われんだよ。」
新たな飲み物を調達していた最上も遠くから二人を目撃し、近づ

きたくないなあと思った。どうしてみんな普通にしてくれないのだろう。

「黒峰さん、ちょっと、ちょっと！」

赤桐は榊原教授を無視して立ちあがると素早く黒峰をキャッチして有無を言わずワンピースを引っ張って水着のデザインを確認する。目で黒峰をずっと追っていた海辺の男性達にとっては垂涎の行為である。

「わあ、こつこついづのどこで買うの？」

赤桐がたずねると、黒峰はちよつと微笑んで「いただきものですので、分からないです。」と答えた。夜の蝶的な回答である。こんなセクシー水着を贈ってくるのはどこのどいつだ、と思うがその話は後に取っておこつと赤桐は引き下がった。

「赤桐君、他の皆はどうしたかね？」

榊原教授に聞かれて、赤桐は一瞬彼の存在を完全に忘れていたことに気が付いた。

「えつと、克也と猿君と大木は海のおつちの方で遊んでいますよ。最上さんは飲み物調達に行つて、犬丸と針生はずつと見てないですけれど。」

「ああ、犬丸君は私達を迎えに来てくれたのだよ。今日はもう海には降りて来ないと言つておつた。」

犬丸が海辺でしたことはしばらく砂浜に座つてからラーメンを食したことだけである。

「針生さんなら、本気で泳いでましたよ。監視員に聞けば場所見つけてくれるんじゃないですか。」

いつのまに上がってきたのか大木戻ってきている。後ろから猿君と克也もやってくる。克也は白いワンピースの黒峰に素直に「綺麗ですね」と言つて珍しい笑顔を向けてもらつという僥倖を得た。

遠くからそつと様子をうかがっていた最上はまっとうな人間はい

ないのか、と針生を求めて海の方に目をやった。そして陸に向かつて猛然と近づいてくる人影を発見した。海上ですれ違ふ親子連れが怯えた様子で見送っている。海から上がる瞬間もタイムロスしてはいけないのがトライアスロンだ。足のつくところまで来た針生は一気に立ちあがって砂浜に駆けあがった。北島康介スタイルの水着にゴーグルをかけたスキンヘッドが夏の浮かれた海水浴場に駆けあがってくる様はシュールなものがある。周囲の大注目の中、仁王立ちで腕時計のストップウォッチを止めてタイムを確認する針生を見つめて、最上はどうしてうちの研究室の人間はみんな普通にしてくれないのだろうとため息をついた。

一歩引いてみれば、そんな彼の背後にも憂い顔の最上を狩ってやろうと狙いを定めている女子の小山ができている。人のことを言えた義理ではない。

合宿の夜 - 1

一同はそれから程なく大徳寺家の別荘へ戻った。連なつて歩く一同はやはり注目の的だった。お互いに妙に妙に目立つのは他の人が悪いと思つていたので、明日も改善される兆しはない。

別荘につくと、まずは風呂に入れと犬丸に指示された。家族以外と一緒に風呂に入るというのも克也にとっては初めての経験だ。別荘の風呂はシャワーが4つも付いていて湯船も大人が6人は入れる大きさだ。

克也が大木と猿君と並んで風呂に入りながら少し後から入つてきた最上や針生が体を洗うのを眺めていたら、二人にちよつと嫌な顔をされた。

「克也、人が体洗つてるところをまじまじと見るな。緊張する。」
最上に指摘されて克也は慌てて目を逸らして「ごめんなさい」と謝る。

「僕ももう少し大きくなるかなあ」

細い腕を持ち上げて克也はもう一度視線を皆の方へ戻して見比べる。大人たちの体つきを見ていたのだ。皆引き締まつて、筋肉がついていて遅しい体つきだ。克也はまだまだ子供の体型である。

「ここにいるのはあんまり一般的なサンプルじゃないからなあ、あんまり気にしなくていいんじゃない？」

大木が励ます。どこでどういうトレーニングをしているのか知らないが最上は明らかに鍛えている体つきをしている。38歳と自己申告しているが未だ贅肉の欠片もない。針生は言うまでもなく趣味がトライアスロンだ。筋肉の標本みたいな体をしている。猿君はそもそも規格外だし、大木にしてもスパイは体も強靱でなければならぬという信条の下で格闘技の練習をしている。普通というにはち

よっとやり過ぎである。

「そうですか」

克也は期待に満ちた目で大木を見上げて、もう一度自分と大木を見比べた。

「少し体を動かすといいよ。」

そう言っただけでトレーニング談義が始まると、全員参加で喧々譁々の議論が始まった。風呂が上がってもそれは延々と続き、広い和室で簡単な筋トレ法の紹介大会まで始まった。

その頃、女子部屋では化粧をしていない黒峰の顔をはじめて挿んだ赤桐と、同様に眉毛のない赤桐の顔をはじめてみた黒峰がいつになく打ち解けて化粧品を並べ、お勧めのケア方法について語り合っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0963y/>

榊原研究室

2011年11月22日03時12分発行